

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第205集

の ぞ え い せ き
野 添 遺 跡

2016

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

序

愛知県豊橋市は、県東部にあたる三河地域の中では東側に位置し、市域は三河湾の北東にあたる最奥部に面しています。三河吉田藩の城下町時代から、東三河地域の中心的都市として、現在までその役割を担ってまいりました。

野添遺跡が位置する豊橋市周辺では、原始の時代より、我々の祖先による生活が営まれてまいりました。このことは、周辺地点で確認されている遺跡、過去の発掘調査結果が物語っています。

豊橋市石巻本町西下地地内では、このたび愛知県建設部道路建設課によって、県道東三河環状線の道路改良工事が行われました。（公財）愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センターでは、愛知県教育委員会を通じて、愛知県建設部からの依頼を受け、建設工事に先立つ事前調査を行いました。その結果、古代・中世を中心とした遺構や遺物を検出することができ、この地の歴史に新たな資料を提供することができました。

調査にあたりまして、愛知県建設部、愛知県教育委員会、豊橋市教育委員会をはじめとする関係諸機関、周辺地域の皆様から多大な御協力をいただきましたことを、深く感謝申し上げる次第です。

最後に、本書がこの地域の歴史理解と、埋蔵文化財研究の一助となれば幸いと存じます。

平成28年 3 月31日

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

理事長 伊 藤 克 博

例 言

- 1 本書は愛知県豊橋市石巻本町西下地地内に所在する、野添遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、愛知県建設部道路建設課による県道東三河環状線道路改良工事に伴う事前調査として、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが、愛知県教育委員会を通じて委託を受けて実施した。調査総面積は2000m²である。
- 3 発掘調査は、平成25年11月～平成26年3月に実施した。さらに平成27年度には調査報告書作成のため、整理作業を実施した。
- 4 現地における発掘調査は、愛知県埋蔵文化財センター調査課調査研究専門員・松田 訓が担当し、株式会社波多野組に調査事業の支援を依頼した。各職務は、現場代理人：初澤和博 調査員：小笠原久和、小泉信吾（中途参加、中途退任） 測量技師：尾崎裕司である。
- 5 調査にあたっては、愛知県建設部西三河建設事務所、愛知県教育委員会文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、豊橋市文化財センターをはじめとして多くの関係諸機関の御協力を得た。
- 6 本書の編集は松田 訓が担当し、執筆分担は以下の通りである。
第Ⅰ～Ⅳ・Ⅵ章＝松田 訓、第Ⅴ章＝パレオラボ株式会社（小林克也・伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・藤根 久・米田恭子）日鉄住金テクノロジー株式会社（鈴木瑞穂）
- 7 報告書の作成については松田が担当し、遺構図のトレース、遺物の実測、トレース、図版の編集等は、国際文化財株式会社に委託し、松田の指示にてこの作業を行った。
- 8 本書掲載写真の中で、遺構写真は株式会社波多野組、遺物写真は写真工房 遊に撮影を委託した。
- 9 本書に示す座標数値は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、「世界測地系」で表記した。また、海拔表記は、東京湾平均海面高度（T.P.）の数値である。
- 10 本書で示す土色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』による。
- 11 本書中の各遺構名については、以下のアルファベットによる分類記号を調査時のまま使用した。SI：竪穴建物、SL：炉・カマド、SB：掘立柱建物、SK：土坑、SP：ピット、SD：溝、SA：坑列、SU：遺物集中、SX：その他の遺構
- 12 遺物の整理番号と登録番号の対照表は、添付のCDに収録した。
- 13 遺構写真や図面類などの調査記録は、本センターにて保管する。
- 14 出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管する。
- 15 本書の作成にあたり、青木 修、城ヶ谷和広、中野晴久、藤澤良祐氏には遺物の解釈において、多くのご指導を得た。さらに本遺跡の調査、報告にあたって、次の諸氏にご指導、ご協力をいただいた。記して感謝したい。
（五十音順、敬称略）

岩原 剛 魚津知克 河野正訓 贅 元洋 林 弘之 平山 優 古尾谷知浩 村上 昇

目 次

第 I 章 調査の経緯

第 1 節 調査に至る経緯 1

第 2 節 調査の経過 1

第 II 章 遺跡の位置と環境

第 1 節 遺跡の位置 2

第 2 節 歴史的環境 4

第 3 節 調査区 7

第 III 章 遺構

第 1 節 基本層序 8

第 2 節 遺構 11

第 IV 章 遺物

第 1 節 遺物の記述 33

第 2 節 出土遺物 33

第 V 章 自然科学的分析

第 1 節 炭化材の樹種同定 45

第 2 節 放射性炭素年代測定 47

第 3 節 出土土器の胎土材料 50

第 4 節 鉄製 U 字形刃先の解析 58

第 VI 章 総括 60

図 表 目 次

挿 図 目 次

第 1 図	豊橋市位置図	2
第 2 図	遺跡周辺地形図	3
第 3 図	周辺遺跡分布図	5
第 4 図	調査区配置図	7
第 5 図	調査区土層断面図	9
第 6 図	野添遺跡遺構位置図	10
第 7 図	1050SI・1088SD 平面・断面図	16
第 8 図	1075SA 平面・断面図	17
第 9 図	1150SX・1135SK 平面・断面図	18
第10図	1141SI 平面・断面図	19
第11図	2008SI・2009SI 平面・断面図	20
第12図	2010SI 平面・断面図	21
第13図	2014SI 平面・断面図	22
第14図	2073SI・2041SD 平面・断面図	23
第15図	2100SB 平面・断面図	24
第16図	2126SA 平面・断面図	25
第17図	2127SA 平面・断面図	26
第18図	2128SA 平面・断面図	27
第19図	2001SD 平面・断面図	28
第20図	2001SD 遺物出土状態図	29
第21図	2099SU 遺物出土状態図	29
第22図	3028SI・3029SK 平面・断面図	30
第23図	3001SD 平面・断面図	31
第24図	3018SD・3008SK 平面・断面図	32
第25図	出土遺物実測図（1）	37
第26図	出土遺物実測図（2）	38
第27図	出土遺物実測図（3）	39
第28図	出土遺物実測図（4）	40
第29図	出土遺物実測図（5）	41
第30図	出土遺物実測図（6）	42

第31図	出土遺物実測図（7）	43
第32図	出土遺物実測図（8）	44
第33図	出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真	46
第34図	暦年校正結果	49
第35図	野添遺跡と周辺の地質	56
第36図	胎土の偏光顕微鏡写真	57
第37図	U 字形刃先画像	59
第38図	主要遺構変遷図	61
第39図	調査地周辺図	64
第40図	調査区分割図— 1	65
第41図	調査区分割図— 2	66
第42図	調査区分割図— 3	67
第43図	調査区分割図— 4	68
第44図	調査区分割図— 5	69
第45図	調査区分割図— 6	70
第46図	調査区分割図— 7	71
第47図	調査区分割図— 8	72
第48図	調査区分割図— 9	73
第49図	調査区分割図—10	74
第50図	調査区分割図—11	75
第51図	調査区分割図—12	76

表 目 次

表 1	出土炭化材の樹種同定結果一覧	45
表 2	測定資料および処理	47
表 3	放射性炭素年代測定および暦年校正の結果	48
表 4	胎土分析を行った試料と詳細	50
表 5	胎土中の微化石類と砂粒物の特徴	51
表 6	土器胎土中の粘土および砂粒組成の特徴	52
表 7	岩石片の起源と組み合わせ	52
表 8	各器種の砂粒組成と粘土の種類	55

第Ⅰ章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

調査地点は、愛知県豊橋市石巻本町字西下地に位置する。愛知県によって公開されている電子地図、愛知県統合型地理情報システム「マップあいち」の中で、愛知県文化財マップ（埋蔵文化財・記念物）<http://maps.pref.aichi.jp>（平成27年度時点）を閲覧すると、遺跡番号：790844、包蔵地名：野添遺跡、地目：畑地、宅地、といった情報とともに範囲が記されている。地図に示された範囲では、野添遺跡主要部は字野添で、範囲の南端は字日南坂、調査地点の所在する字西下地は範囲の東端にあたる。また、豊橋市遺跡地図（2004豊橋市教育委員会）によれば、地目：畑地、宅地で、縄文、古墳、古代（前）、古代（後）、中世、近世といった時代が記され、遺跡概要としては、中世～近世の遺物散布地、と説明されている。この記載範囲の中に、愛知県建設部道路建設課によって（主）東三河環状線の道路改良工事が行われることとなった。工事に先立ち、愛知県教育委員会により遺跡の確認調査が行われ、あらためて遺構、遺物が確認された。

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターでは、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて工事に先立つ発掘調査の委託を受け、平成25年11月よりこれを実施した。総調査面積は2000m²である。

第2節 調査の経過

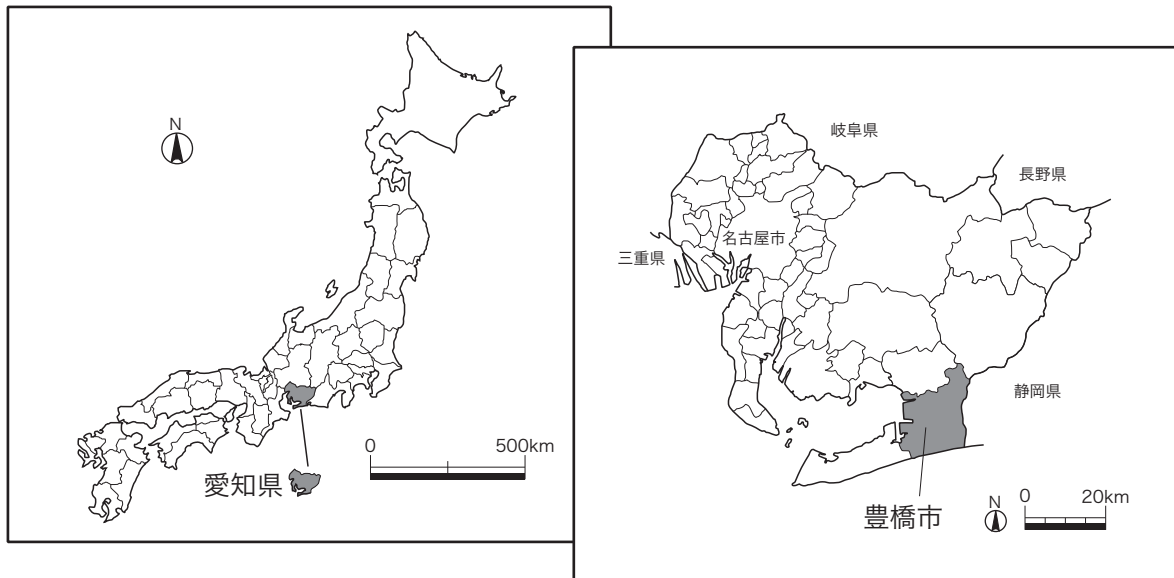
調査区は（主）東三河環状線の道路改良工事予定地内にて、排出土の処理、工事の進捗等を考慮し、細長い調査範囲をA・B・C区に分割設定した。

平成25年11月5日に重機の搬入を行い、同日よりA区の表土掘削を開始し、トレンチ掘削と調査区内精査も並行して進めた。11月19日には重機による表土掘削を終了し、遺構検出と掘削を開始した。12月12日にはA区的全景撮影を行い、翌日より補測、確認作業をすすめ、12月17日よりA区の埋め戻しを並行して開始する。12月26日にはA区の埋め戻し作業を完了し、12月27日にはA区の完了検査と工事業者への引き渡しを行う。平成26年1月7日にはB区の表土掘削を開始し、同日、豊橋市教育委員会の遺跡見学として、一般見学者25名が訪れる。1月17日にはB区表土ハギを終了し、遺構検出と掘削を開始し、2月25日にはB区的全景撮影を行い、2月28日に補測、確認調査を終了した。3月4日にはB区の埋め戻し作業を終了し、引き続き3月6日にC区の表土ハギに着手する。3月19日にはC区的全景撮影を行い、3月22日に補測、確認調査を終了した。3月25日にはC区の埋め戻し作業を終了し、資材等の撤去を完了し、終了確認を行った。

出土遺物の整理作業は、調査中、調査後に洗浄作業を行い、引き続き平成27年度に報告書作成までの作業を行った。

第 II 章 遺跡の位置と環境

第 1 節 遺跡の位置



第 1 図 豊橋市位置図

愛知県は日本列島のほぼ中央、太平洋側に位置し、旧国名では西側が尾張国、東側が三河国にあたる。野添遺跡の位置する豊橋市は、愛知県東部にあたる旧三河国の南東端に位置し、三河湾の東側最奥部に注ぐ豊川の下流域左岸を中心として市域を展開する。東三河地域では、中核市としての中心的存在の自治体である。市域は北側で豊川市、新城市と接し、南西側で田原市、東側では静岡県浜松市北区、湖西市と接しており、西部で三河湾に面しているだけでなく南部は太平洋に面する。

一級河川豊川は、本宮山地の南側、弓張山地の西側に流れ出て豊橋平野を形成し、三河湾の東奥部に注ぐ。中央構造線は、この豊川から諏訪湖方面を通っており、豊橋市はその外帯（南側）に位置する。野添遺跡は、豊橋市北部の石巻山西部に所在し、豊川左岸の上位段丘・台地縁辺部に立地する。遺跡の東側は、豊川の支流である神田川によって開析された谷に面している。現在の豊橋市中心部付近は、律令制以来の行政区画において三河国渥美、八名、宝飯の三郡が近接するが、遺跡の所在する石巻地区は、旧三河国八名郡に属する。

遺跡周辺の気候は、緯度、標高が低いこともあり比較的温暖だが、弓張山地の西側縁辺部にあたるため、豊橋市中心部の所在する豊川下流沖積低地より日較差、年格差は大きい。こうした環境は各種栽培、温室園芸などに適しており、遺跡の所在する石巻地区は全国有数の柿生産地である。



第2図 遺跡周辺地形図（国土地理院1/20万地形図「豊橋・伊良湖岬」合成）

第2節 歴史的環境

野添遺跡は、豊橋市の石巻地区に所在する。現在の行政区画である豊橋市は、古代における律令制の行政区画としては三河国渥美郡および宝飯郡、八名郡の一部に該当する。石巻地区は豊橋市域では北側に位置し、豊川市、新城市とも近い。したがって、調査地点周辺の遺跡を紹介、説明するにあたっては、「豊橋市の野添遺跡」とした視点よりも、「豊橋市石巻地区の野添遺跡」とした視点から、石巻地区周辺に所在する遺跡を中心として、説明を記す。

野添遺跡は、古代の竪穴建物跡、掘立柱建物跡、さらに中世の溝も確認された複合遺跡であるが、出土遺物の主体は古代の土器、須恵器、灰釉陶器であった。

『愛知県遺跡分布地図（III）東三河地区』（1990）の記載によれば、埋蔵文化財包蔵地として豊橋市内に分布する地点は、787ヶ所が確認（滅失地点含む）されているが、この時点では野添遺跡は未掲載である。『豊橋市遺跡地図』（2004）では、散布地として野添遺跡が掲載されており、遺跡概要では「中世から近世の遺物散布地」と記されているが、確認される時代は旧石器、弥生、近代を除いた全ての時代に印が打たれている。ここでは、野添遺跡が位置する豊橋市北部とその周辺について、調査によって確認された時代以外の時期も含めて、その歴史的環境を時代ごとに概観する。

豊橋市遺跡地図では、野添遺跡に隣接する位置には遺物散布地が多く示されていて、周辺には遺跡が濃密に展開するものと思われる。これらの散布地は、残念ながら発掘調査によって実態が確認されたものが少ない。ここでは、発掘調査が行われた遺跡を中心として、野添遺跡周辺の歴史的環境を述べる。

確認できる遺跡の中で、古いものでは縄文時代早期の遺物が確認された多り畑遺跡がある。調査地点からは、南東約400mに位置し、神田川によって開削された谷をはさんだ対岸の段丘である石巻面に所在し、縄文時代の土坑が数基確認されている。さらに、南西方向に約2.2kmの位置には、縄文時代早期前葉の土器を伴う竪穴住居、縄文時代早期の押型文土器などを伴う炉穴、集石炉、土坑が確認された眼鏡下池北遺跡が所在する。散布地では、野添遺跡から南東約400mの同じ丘陵である玉川面に大清水遺跡が所在し、過去に押型文土器が確認されている。

弥生時代では、野添遺跡から南西約1.2kmの位置に、前期の遠賀川様式の土器が環濠の可能性も考えられる溝から出土した、白石遺跡が所在する。白石遺跡は、野添遺跡と同じ段丘である玉川面に立地していて、野添遺跡近隣では弥生時代の早い時期から、遠賀川様式の土器を用いる集団が進出していたことがうかがえる。調査地点から南に約1.5kmの位置には、弥生時代中期の竪穴建物跡、土器棺墓が確認された西浦遺跡が所在する。野添遺跡からは神田川、三輪川をはさんだ対岸に立地していて、時期的な隔たりが見られるものの、弥生時代中期以降、現在まで続く集落遺跡である。調査地点から南西に約1.0kmの位置には、弥生時代中期末の方形周溝墓や後期以降に続く環濠、竪穴建物跡が確認された高井遺跡が所在する。野添遺跡と同じ玉川面の南西端部では、遺物散布地が広く展開している。高井遺跡は、先に述べた白石遺跡とは南側で近接している。調査地点から南西に1.2kmの位置には、弥生時代中期末から後期にかけての竪穴建物跡、方形周溝墓などが確認された森岡遺跡が所在する。調査地点から南西に約2.3kmの位置には、弥生時代後期の環濠集落が確認された西側



- 1.野添遺跡 2.多り畑遺跡 3.東下地遺跡 4.高井古墳群 5.大清水遺跡 6.高井遺跡 7.白石遺跡 8.神ヶ谷遺跡 9.東屋敷遺跡
 10.石巻山城址 11.大亀古墳群 12.西浦遺跡 13.森岡古墳群 14.森岡遺跡 15.浪ノ上遺跡 16.眼鏡下池遺跡 17.西側古墓
 18.西側遺跡 19.権現山1号墳 20.権現山2号墳 21.馬越長火塚古墳 22.馬越北山古墳群

第3図 周辺遺跡分布図（国土地理院 1：25000「豊橋」部分）

遺跡が所在する。また、西側遺跡と同一の段丘である牛川面には、調査地点から南西に約1.8kmの位置に、弥生時代終末期以降の集落が確認された浪ノ上遺跡が所在する。調査地点から南に約1.0kmの神田川と三輪川にはさまれた位置には、弥生時代後期の竪穴建物跡が確認された東屋敷遺跡が所在する。調査地点から南東側の段丘涯下で、神田川右岸の低地には、弥生時代以降の水田が確認された東下地遺跡が所在する。

古墳時代から古代の遺跡では、弥生時代の遺跡として述べた西浦遺跡、西側遺跡、浪ノ上遺跡にて、引き続き竪穴建物跡が検出され、牛川面では集落が各所で営まれていたことが確認できる。今回の調査では、野添遺跡もこの時期の集落が営まれていたことが確認されたが、神田川、三輪川をはさんだ南側の段丘上である牛川面の遺跡と、玉川面に所在する野添遺跡と、その関連性が注目される。縄文時代の遺跡として先述した大清水遺跡は、調査地点に近接する同一の段丘上に所在するが、縄文土器の散布だけでなく須恵器、灰釉陶器も採集されている。さらに、調査地点から神田川をはさんだ左岸の段丘上で、縄文時代の遺跡として先述した多り畑遺跡においては、古墳時代の竪穴建物跡と思われる遺構が確認されている。弥生時代の遺跡として述べた東屋敷遺跡では、明瞭な遺構に乏しいものの、当該期の遺物が一定量出土している。その他、散布地として確認されている地点は多いが、当該期の遺物が採集されているに留まる。

古墳については、調査地点の北側約1.6kmの位置に権現山1号墳、さらにこの北側約0.2kmの位置には権現山2号墳が並び、この両古墳から東に約0.6kmの位置には馬越長火塚古墳、が所在する。これらはいずれも県史跡に指定されている前方後円墳で、出土遺物から権現山1、2号墳は前期に所属する可能性が高く、馬越長火塚古墳は後期に属する。これらの被葬者は、墳形、規模、出土遺物などから判断して、いずれも首長級が想定されている。さらに馬越長火塚古墳から東に約0.5～1.3kmの丘陵上には、後期の馬越北山古墳群が展開する。調査地点から南側に約2.4kmの位置には、後期と考えられる円墳が多く分布する大亀古墳群が丘陵端部に展開する。野添遺跡近隣の古墳としては、調査地点の北西約0.7kmから南西約0.2kmの位置に、円墳、方墳にて構成される高井古墳群が展開する。この高井古墳群は野添遺跡と同じ段丘である玉川面に立地していて、確認されている三十数基は中期から後期にかけて築造されたものと想定されている。この中では、調査地点から南西に約0.3kmの位置に、高井1号墳、別称日南坂1号墳が所在したが、現在は保育園の敷地内造成に伴う調査の後、滅失している。この高井1号墳は、近隣の発掘調査事例としては、野添遺跡の調査地点から最も近距離である。発掘調査では、組合わせ式石棺、割竹形木棺、割竹形木棺の粘土槨といった主体部が確認された円墳で、副葬品などの分析から5世紀後葉に築造されたと考えられている。この高井古墳群の南西側には、弥生時代の遺跡として先述した森岡遺跡以東に森岡古墳群が所在する。野添遺跡からは、神田川、三輪川をはさんだ対岸の河岸段丘縁辺部に展開し、確認されている12基の古墳は群集墳としては古手と捉えられている。

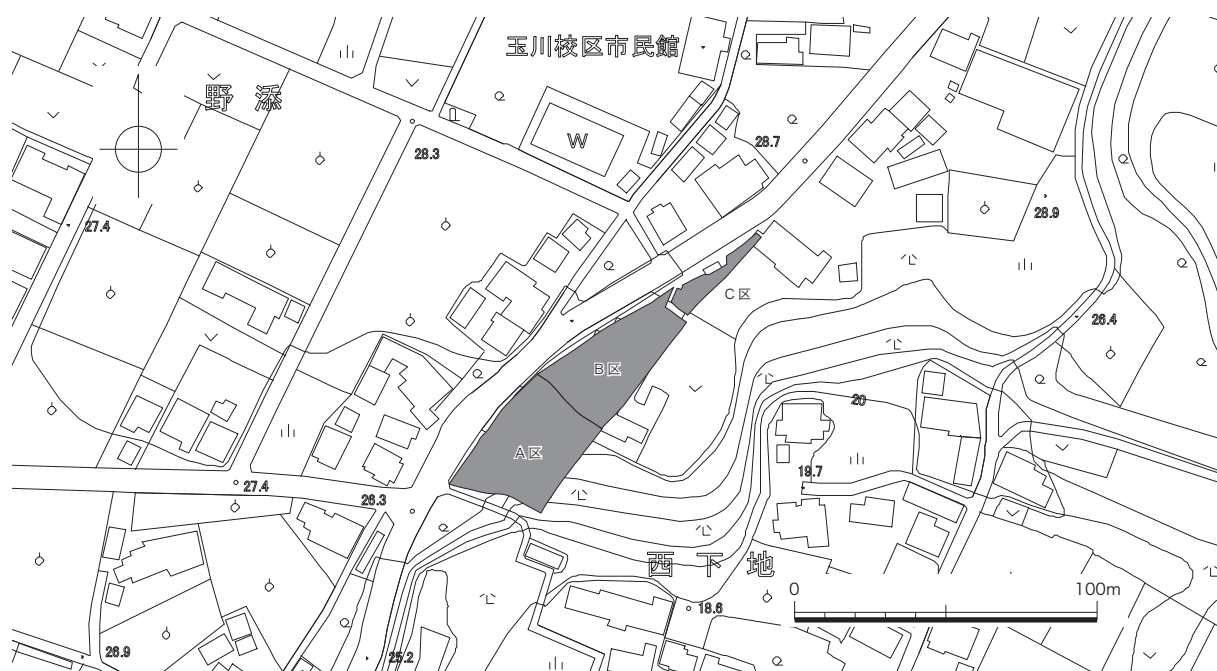
中世以降の遺跡としては、先述した東下地遺跡にて、中世の土壇墓、掘立柱建物跡が検出されている。調査地点から南へ約0.7kmの位置には、室町時代の掘立柱建物跡が確認された神ヶ谷遺跡が所在する。野添遺跡から南西側に約2.8km、豊川と眼鏡川にはさまれた段丘上には、弥生時代の遺跡として述べた西側遺跡が所在するが、こちらでは15～16世紀に営まれた可能性の高い地下式坑群も

確認された。この西側遺跡の北東約0.3kmの位置には、12世紀末～15世紀代の中世墓群で、塚墓、土墳墓、集石墓などから構成される西側古墓が所在する。調査地点から南東に約2.3kmの位置には、石巻山中腹に、延喜式神名帳にも記載される石巻神社奥宮が所在する。この山頂を含む東西の尾根周辺には、中世の高井氏居城と伝えられる石巻山城址が所在する。さらに、弥生時代などの遺跡として述べた東屋敷遺跡では、戦国時代以降の掘立柱建物、溝の地割りなどが多く検出されており、屋敷地が形成されていたことが確認された。

第3節 調査区

野添遺跡の調査区は、県道改良工事の事前調査として工事予定地内に設定された。主要地方道東三河環状線は、新しく建設されるバイパスへの接続として、旧来の県道東三河環状線とバイパスが交差する周辺の道路改良が必要となった。工事予定地点では、遺跡確認のための試掘調査が行われた。この結果が協議され、野添遺跡の発掘調査が実施されることとなった。

調査地は豊川とその支流によって形成された河岸段丘上で、調査地点を含む周辺の旧態は宅地および畑地である。遺構検出面や遺構基底部からの湧水は、雨天直後を除けば認められなかった。調査地点の排水処理は雨水のみで、調査区端でのトレンチを利用した。表土の除去は、機械（バックホウ）掘削によって行った。排土の処理にはベルトコンベヤーを配し、調査予定地をA・B・C区として三分割し、調査中の排土を隣接する調査区側に送り、埋め戻しまで仮置きした。



第4図 調査区配置図

第 III 章 遺構

第 1 節 基本層序

調査地点は、豊橋市北部の石巻山西部に所在し、豊川左岸の河岸段丘上位面の縁辺部に位置する。調査地点は宅地及び畑地であったが、造成によって整備されたもので、旧地形はこの造成によって大部分が削平されており、基盤層より上層が残存している部分の方が少なく、旧態をとどめていない。調査地点付近は台地の縁辺で、南東側から南西側に広がる低地に向かってゆるやかに傾斜している。この傾斜部に削平と盛土が施され、住宅地及び畑地として平地が確保されている。まず傾斜地に対して、水平を意識した削平が部分的に行われ、この削土を水平部を延長するように傾斜地に盛って、この上に耕作地用、住宅用といった目的に合わせた客土を搬入して整地が行われたものと思われる。調査地点の標高は、C 区北端にて 28.4m を測り、A 区南端は 25.7m を測る。

野添遺跡における基本層序を東側の壁にて概観すると、第 5 図のような状況がみてとれる。調査区が設定された河岸段丘高位面は、旧態が削平、及び盛土によって改変されていて、部分的に様子が異なっているため、一様ではない。したがって調査区の層序は、どのような改変部分かによって、近接する地点でも異なる様相が見られた。ここでは A・B・C 区に共通した堆積状況を中心に、地層のまとまりごとに説明する。この他に特徴的な堆積状況が観察された地点については、個別の遺構ごとに層序を図示する。

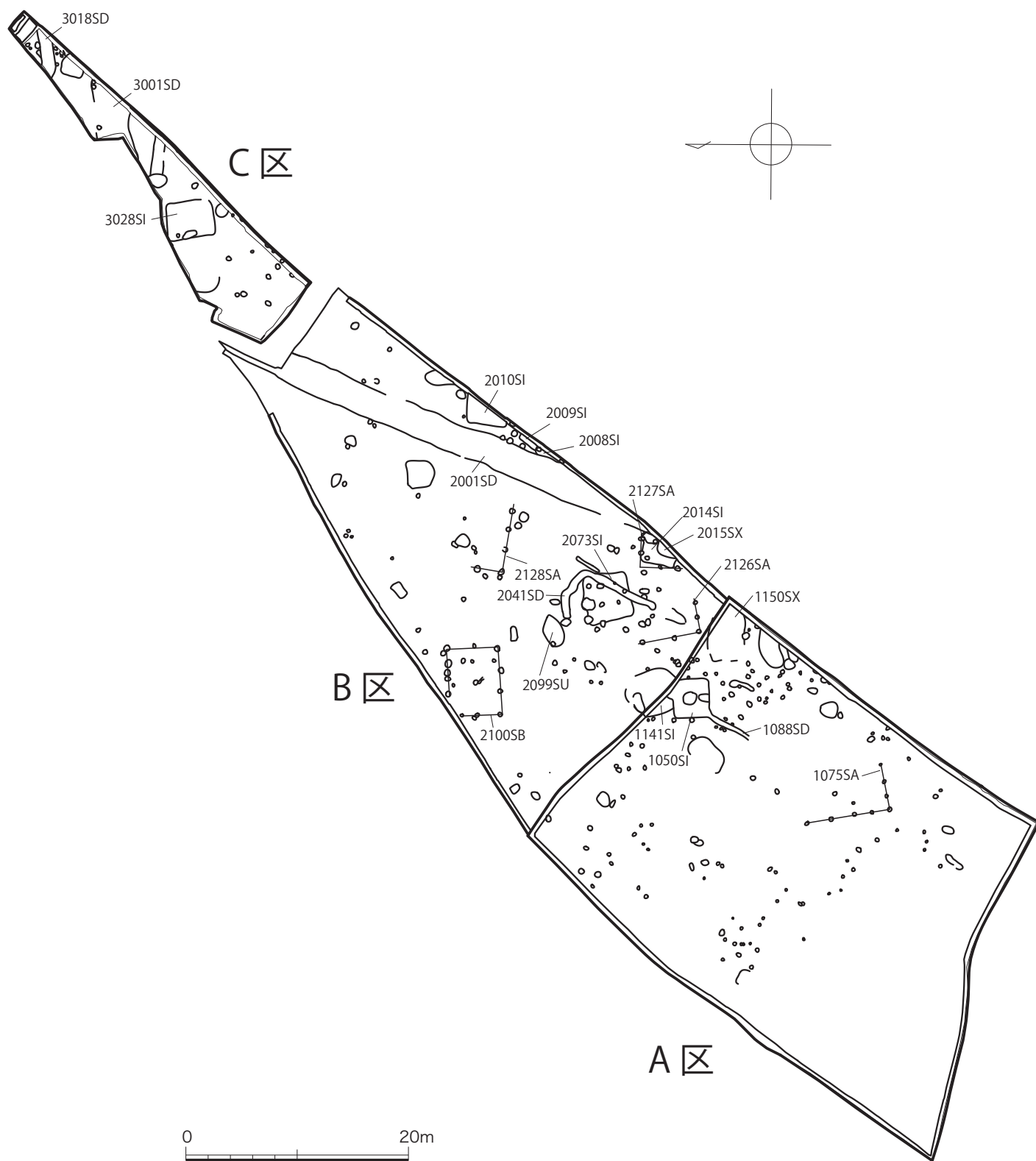
以下で説明する表土、盛土は人為的な堆積で、それ以下は自然堆積土層である。

表土 A 区から C 区にわたって観察され、調査地点のほぼ全体を覆っていたものと考えられる。現代の整地層と思われる堆積層より上位に位置するため、人為的な堆積土で、褐灰色（7.5Y 5 / 1）シルトを基調とする。しまりは弱いため、耕作を目的として搬入された土だと考えられる。

盛土 A 区にて表土の下位にて観察される。A 区は南側に向かって傾斜する河岸段丘端部で、傾斜面に平地を確保するため、上位を削平し下位に盛土を行ったことが断面にて観察できる。したがって、傾斜地を削平した土が盛土に使用され、テラス状の平坦面が段を成して設けられている。A 区南端に集中して見られ、黒褐色シルトを基調とし、シルトブロックおよび基盤層の径 5 ～ 20mm の角礫を含む。

自然堆積土 表土、整地層の下位には、黒褐色（7.5YR 3 / 1）シルトが 0.1 ～ 0.2m 堆積する。調査区の東壁では、A 区南端を除いて調査区全体にわたって観察される。この下位にて、厚さ約 0.2m の黒褐色（10YR 3 / 2）シルトの堆積が多く観察され、古代から中世の遺物が含まれた。径 2 ～ 5 mm の角礫を含み、調査区では遺物包含層として捉えた。この下位では、無遺物層であるにぶい黄褐色（10YR 6 / 3）シルトが調査区全体にて観察され、これを基盤層として捉えて直上にて遺構検出面として作業を行った。また、傾斜角度が急になる A 区南端では、基盤層の下位にて明黄褐色（2.5Y 7 / 6）シルト、褐灰色（10YR 5 / 1）シルトなども観察された。

第 5 図 調査区土層断面図



第 6 図 野添遺跡遺構位置図 (1 : 500)

第2節 遺構

第1項 概要

今回の調査地点で検出された遺構は、総数312となった。これらの遺構は、土坑（SK）283、溝（SD）7、竪穴建物跡（SI）9、掘立柱建物跡（SB）1、柵列（SA）4、遺物集中箇所（SU）1、不明または不定形遺構（SX）6などであった。この中で最も多いのは土坑で、検出総数の9割を占める。これらの遺構は、その検出総数、検出密度に対して、遺物を伴うものが限定的であった。また、調査地点の大部分が、基本層序の説明でも述べたように、自然堆積土層まで削平を受けていた。遺物包含層と判断できるものは、旧地形における微凹地や削平面より低い部分のみであった。今回の調査地点全体で確認できた時期を概観すると、古墳時代後期～平安時代初期、中世に大別できそうである。

遺構の時代別比較では古代が主体ではあるが、ほとんどの遺構は残存する基底部の検出である。特に古代のものは、掘削深度の大きなもの以外、削平により滅失したものと思われる。調査区内では、竪穴建物跡、掘立柱建物跡などが検出されているため、生活空間であった時期が想定できるが、集落の規模、変遷を検討できるほどの成果は得られていない。以下では、時期の判断できる遺物を伴った遺構を中心として、調査区ごとに説明を述べる。

第2項 主要遺構

・A区

A区は調査地点を三分割した南西側にあたり、調査区の東側は石巻本町西下地、南側は東下地に位置する。A～C区の中では、河岸段丘の落ち際に位置するため、地形の傾斜が最も大きい調査区である。調査区内は、B、C区とは異なり傾斜地に平坦面を設けるため、削平と盛土による造成が施されていて、南～南西方向に向けたテラス状の平坦地で段を成していた。このため、盛土を除去した上で遺構検出作業を始めたが、削平箇所が多く、検出された遺構はB区に近い部分を除くと少なかった。

1050SI A区北端に位置する。平面形態は方形を呈するものと思われ、検出高は27.0～27.1mを測る。下端における南北径は2.9m、東西径3.3m、残存する深さは0.3mを測り、上部は削平されて基底部に近い部分が検出された竪穴建物と思われる。埋土は暗褐色シルトを基調とし、重複関係では1141SIを切っている。平面形における主軸の方向は、N—1°—Wを示す。支柱穴、壁溝は明確に検出されず、南西角の位置にて排水溝の可能性を有する1088SDを検出する。1088SDは、1050SIとの重複関係確認に注意したが明確な新旧関係は確認できず、1050SIと1088SDは排水溝付竪穴建物の可能性が高いと判断した。建物北辺の中央やや東側には、カマドと考えられる突出部が検出された。煙道及びカマドの基底部が残存し、上部は削平されたものと思われ、煙道部は北に向かって突出していたものと思われる。遺物は8世紀後葉と考えられる須恵器などが出土しているが、埋土に含まれた炭化材の分析では、暦年代は8世紀後半～10世紀後半という測定結果であった。

1088SD A区北側に位置し、1050SIの南西角部分より南西方向に伸びる溝状遺構である。断面形態は船底形を呈している。底部検出高は26.8～26.6mを測る。残存幅は最大0.5m、検出長4.0m、残存する深さは0.2mを測り、現代のカクランにより端部は確認できず、上部は削平されたものと思

われる。平面形態における主軸の方向は、S—30°—Wを示す。埋土は暗褐色シルトを基調とする。検出状況では、切り合い関係が明確に観察できないことから、1050SIと併存した排水溝の可能性が考えられる。

1075SA A区中央やや南東側に位置する。南北に5基、東西では4基の小穴が「L」字状に並ぶ配置を、土坑列と捉えた。1005～1011SK、1097SKはいずれも楕円または不整円形を呈し、各土坑の検出高は26.7～26.8mを測る。直径は0.1～0.3mで、検出高からの深さは、0.1～0.3m前後を測る。埋土は黒褐色シルトを基調とするものが多く、断面の状況ではいずれも明確な柱痕は認められなかった。列の主軸は、南北列N—10°—W、東西列W—11°—Sを示す。規模は1005SKから1009SKの長さが7.5mで、1009SKから1097SKの長さが4.1mである。土坑間の寸法は1.3～2.2mを測る。土坑の中には遺物がわずかに含まれているものも見られたが、土器、須恵器の小片で掘削時期を確定するまでにはいたらなかった。各土坑は、検出高からの深さが浅く、さらに上位から掘削されているものと思われる。土坑列はほぼ直角に交わるが、検出状況、断面観察などから、建物までを想定することはできなかった。

1150SX A区北東端に位置する。平面形態は長方形を呈するものと思われ、検出高は27.1mを測る。下端における南北径は2.5m、残存する深さは0.2mを測り、上部は削平されて基底部に近い部分が検出されたものと思われる。埋土は暗褐色シルトを基調とし、重複関係では1135SKに切られている。平面形における主軸の方向は、東西方向の長径でW—1°—Sを示す。支柱穴、壁溝、カマドなどは明確に検出されていないが、埋土最下層はシルトブロックを多く含む締まりの強い斑土で、竪穴建物の可能性も考えられる。遺物は、8世紀後葉を主体とした土師器甕、須恵器碗、蓋などが一定量出土している。埋土に含まれた炭化材の分析では、暦年代は8世紀前半～9世紀後半という測定結果であった。

・B区

B区は調査地点を三分割した中央にあたり、河岸段丘端部であるため、調査区の南東側から南側にかけては神田川に向かって地形が大きく下がっている。A区と違い全体的に平坦で、古代の竪穴建物、掘立柱建物、中世の大溝などが検出され、台地縁辺部の居住域などが想定できる結果となった。

1141SI A区北端からB区にかけての境界部に位置する。平面形態は不整形を呈するものと思われ、検出高は27.0mを測る。下端における南北径、東西径は、ともに3.5m、残存する深さは0.3mを測り、上部は削平されて基底部に近い部分が検出された竪穴建物と思われる。埋土は黒褐色、暗褐色シルトを基調とし、重複関係では1050SI、2066SK、2101SKに切られている。平面形における主軸の方向は、N—15°—Wを示す。支柱穴、壁溝は明確に検出されず、建物北辺は現代のカクランによって消失しているため、カマドの存在は不明である。埋土最下層は、シルトブロックを多く含む締まりの強い斑土で、床面と判断し竪穴建物と判断した。遺物は、8世紀と考えられる土師器甕、碗とともに、床面中央やや南東側から鉄製のU字形刃先が出土している。

2008SI B区南東端に位置する。東側は調査区外に続き、明瞭に平面形態が捉えられなかったが、方形を呈するものと思われ、検出高は27.4mを測る。残存する深さは0.35mを測り、上部は削平されて基底部に近い部分が検出されたものと思われる。埋土は褐灰色シルトを基調とし、重複関係では

2009SI を切っている。残存部から推定した平面形における主軸の方向は、N—22°—E を示す。埋土最下層は、シルトブロックを多く含む締まりの強い斑土で、堅穴建物の可能性が考えられる。遺物は、8世紀代と考えられる土師器坏が出土している。

2009SI B区南東端に位置する。東側は調査区外に続き平面形態は、明瞭に捉えられなかったが方形を呈するものと思われ、検出高は27.4mを測る。残存する深さは0.2mを測り、上部は削平されて基底部に近い部分が検出されたものと思われる。埋土は黒褐色シルトを基調とし、重複関係では2008SIに切られている。埋土最下層は、シルトブロックを多く含む締まりの強い斑土で、堅穴建物の可能性が考えられる。

2010SI B区中央東端に位置する。東側は調査区外に続き全容が捉えられなかったが、平面形態は方形を呈するものと思われ、検出高は27.4mを測る。下端における南北径は3.4m、深さは0.4mを測り、上部は削平されたものと思われる。埋土は灰黄褐色、褐灰色シルトを基調とする。平面形における主軸の方向は、南北方向でN—8°—Eを示す。支柱穴、壁溝、カマドなどは明確に検出されていないが、埋土最下層はシルトブロックを多く含む締まりの強い斑土で、堅穴建物の可能性が考えられる。遺物は、8世紀後葉と考えられる土師器甕、須恵器甕、坏などが一定量出土している。

2014SI B区南側の東端に位置する。東側は調査区外に続き全容が捉えられなかったが、平面形態は方形を呈するものと思われ、検出高は27.1mを測る。下端における南北径は2.8m、残存する深さは0.1mを測り、上部は削平されて基底部に近い部分が検出されたものと思われる。埋土は暗褐色シルトを基調とし、重複関係では、2015SX、2123～2025SK、2086SKに切られている。平面形における主軸の方向は、南北方向でN—11°—Eを示す。支柱穴、壁溝などは明確に検出されていないが、北辺の東側でカマドと思われる炭化物、焼土が検出された。埋土最下層はシルトブロックを多く含む締まりの強い斑土で、堅穴建物の可能性が考えられる。遺物は、8世紀代と考えられる土師器甕が出土している。

2073SI B区中央やや南側に位置する。平面形態は方形を呈し、検出高は27.1mを測る。下端における南北径は3.9m、残存する深さは0.1mを測り、上部は削平されて基底部に近い部分が検出されたものと思われる。埋土は明黄褐色シルトを基調とし、重複関係では、2041SD、2115～2120SK、2091、2097SKに切られている。平面形における主軸の方向は、南北方向でN—10°—Wを示す。検出状況は明瞭ではなかったが、2115～2117SK、2119SKは支柱穴の可能性も考えられる。壁溝は明確に検出されていないが、北辺の東側でカマドと思われる炭化物、焼土が検出された。埋土最下層はシルトブロックを多く含む締まりの強い斑土で、堅穴建物の可能性が考えられる。遺物は、8世紀代と考えられる土師器甕が出土している。

2100SB B区中央西端に位置する。平面形態が、小規模な円・楕円・不整円形を呈する複数の掘り込みは、「口」の字状に並ぶ配置を掘立柱建物と捉えた。各柱穴の検出高は26.9～27.1mを測る。直径は0.3～0.5mで、検出高からの深さは0.3～0.4mを測る。埋土は黒褐色、暗褐色シルトを基調とするものが多く、断面の状況では2056、2075SKに柱痕が認められた。列の配置から想定した主軸の方向は、東西方向W—1°—S、南北方向N—2°—Wを示す。規模は梁行4.5m、桁行6.1mで、柱穴と思われる掘り込みの柱間寸法は1.9～2.4mを測る。2間×3間で、南北方向に比較して東西

方向が長い側柱建物を想定した。推定面積は27.45㎡である。各柱穴には遺物が含まれていないため、掘削時期を確定するまでにはいたらなかった。主軸方向から、方位に合わせた配置であることが想定される。東辺から約7m 東側には、柱間寸法の近似した土坑列で、東西の主軸方向がやや南に振る2128SA が位置し、南辺から約13m 南側では、南北の主軸方向がやや西に振る2126SA が位置する。

2126SA B区中央やや南端に位置する。南北に3基、東西3基の小穴が「L」字状に並ぶ配置を、土坑列と捉えた。2053、2062、2065、2094、2096SK はいずれも不整円形を呈し、各土坑の検出高は27.0～27.1m を測る。直径は0.3～0.4m で、検出高からの深さは、0.1～0.2m 前後を測る。埋土は暗褐色シルトを基調とするものが多く、断面の状況ではいずれも明確な柱痕は認められなかった。列の主軸は、南北列 N—11°—W、東西列 E—11°—N を示す。規模は2065SK から2096SK の長さが5.2m で、2053SK から2065SK の長さが2.6 m である。土坑間の寸法は1.3～2.9m を測る。各土坑の中には遺物が含まれておらず、掘削時期を確定するまでにはいたらなかった。各土坑は、検出高からの深さが浅く、さらに上位から掘削されているものと思われる。土坑列はほぼ直角に交わるが、検出状況、断面観察などから、建物までを想定することはできなかった。

2127SA B区南側の東端に位置する。南北に2基、東西3基の小穴が「L」字状に並ぶ配置を、土坑列と捉えた。2007、2086、2122、2129SK は不整円・楕円形を呈し、各土坑の検出高は27.1m を測る。直径は0.4～0.6m で、検出高からの深さは、0.1～0.2m 前後を測る。埋土は暗褐色シルトを基調とするものが多く、断面の状況ではいずれも明確な柱痕は認められなかった。重複関係では、2086SK は2014SI を切り、2007SK は2005SK に切られている。列の主軸は、南北列 N—1°—W、東西列 W—1°—S を示す。規模は2129SK から2122SK の長さが3.2m で、2129SK から2007SK の長さが2.5 m である。土坑間の寸法は1.2～3.1m を測る。各土坑の中には遺物が含まれておらず、掘削時期を確定するまでにはいたらなかった。主軸方向から、方位に合わせた配置であることが想定される。各土坑は、検出高からの深さが浅く、さらに上位から掘削されているものと思われる。土坑列はほぼ直角に交わるが、検出状況、断面観察などから、建物までを想定することはできなかった。

2128SA B区中央に位置する。南北に2基、東西4基の小穴が「L」字状に並ぶ配置を、土坑列と捉えた。2004、2130、2131、2028、2026SK は不整円・楕円形を呈し、各土坑の検出高は27.1m を測る。直径は0.4～0.6m で、検出高からの深さは、0.1～0.3m 前後を測る。埋土は暗褐色シルトを基調とするものが多く、断面の状況ではいずれも明確な柱痕は認められなかった。列の主軸は、南北列 N—9°—E、東西列 W—10°—N を示す。規模は2026SK から2028SK の長さが2.2m で、2028SK から2004SK の長さが5.6 m である。土坑間の寸法は1.7～2.2m を測る。各土坑の中には遺物が含まれておらず、掘削時期を確定するまでにはいたらなかった。各土坑は、検出高からの深さが浅く、さらに上位から掘削されているものと思われる。土坑列はほぼ直角に交わるが、検出状況、断面観察などから、建物までを想定することはできなかった。

2001SD B区東側に位置し、南北方向に伸びる大型溝状遺構である。断面形態は逆台形を呈している。遺構の重複関係では、2103、2104SK、2008、2014SI を切り、2114SK に切られている。検出高は27.3m を測る。幅は最大3.1m、検出長43.2m、検出高からの深さは1.0m を測る。平面形

態における主軸の方向はN—22°—Eを示すが、北側のC区で検出された同規模、同形態の溝3001SDでは主軸方向がE—0°—Sと東西方位を示し、仮に2001SDと一体のものであるならば、北側の調査区外にて東側に向きを変えていることになる。埋土は黄灰色、黒褐色シルトなどを基調とし、断面観察においては東側からの堆積が顕著であった。遺物は、13世紀中葉の渥美産と思われる山茶碗が、基底部直上から出土している他に、下層からは須恵器、灰釉陶器、山茶碗、上層からは近世陶磁器、土器が出土しており、長期間にわたり窪みが残っていた可能性も考えられる。

2099SU B区中央やや西側に位置し、南北約1.4m、東西約1.8mの範囲に遺物が集中して検出された地点で、この範囲に明瞭な掘り込みを有する平面、断面形態が捉えられなかったため、遺物集積の類とした。暗褐色シルト層に遺物が大量に含まれ、出土遺物の検出高はおおよそ27.0～27.2mを測る。検出地点は、B区側の中央にてゆるやかに上がっており、削平を免れて部分的に残存した自然堆積土層に、廃棄された遺物が集積していたものと考えられる。8世紀後葉を主体とした須恵器甕、盤、土師器甕などがまとまって出土している。共伴した炭化材の分析では、暦年代は8世紀後半～9世紀末という測定結果であった。

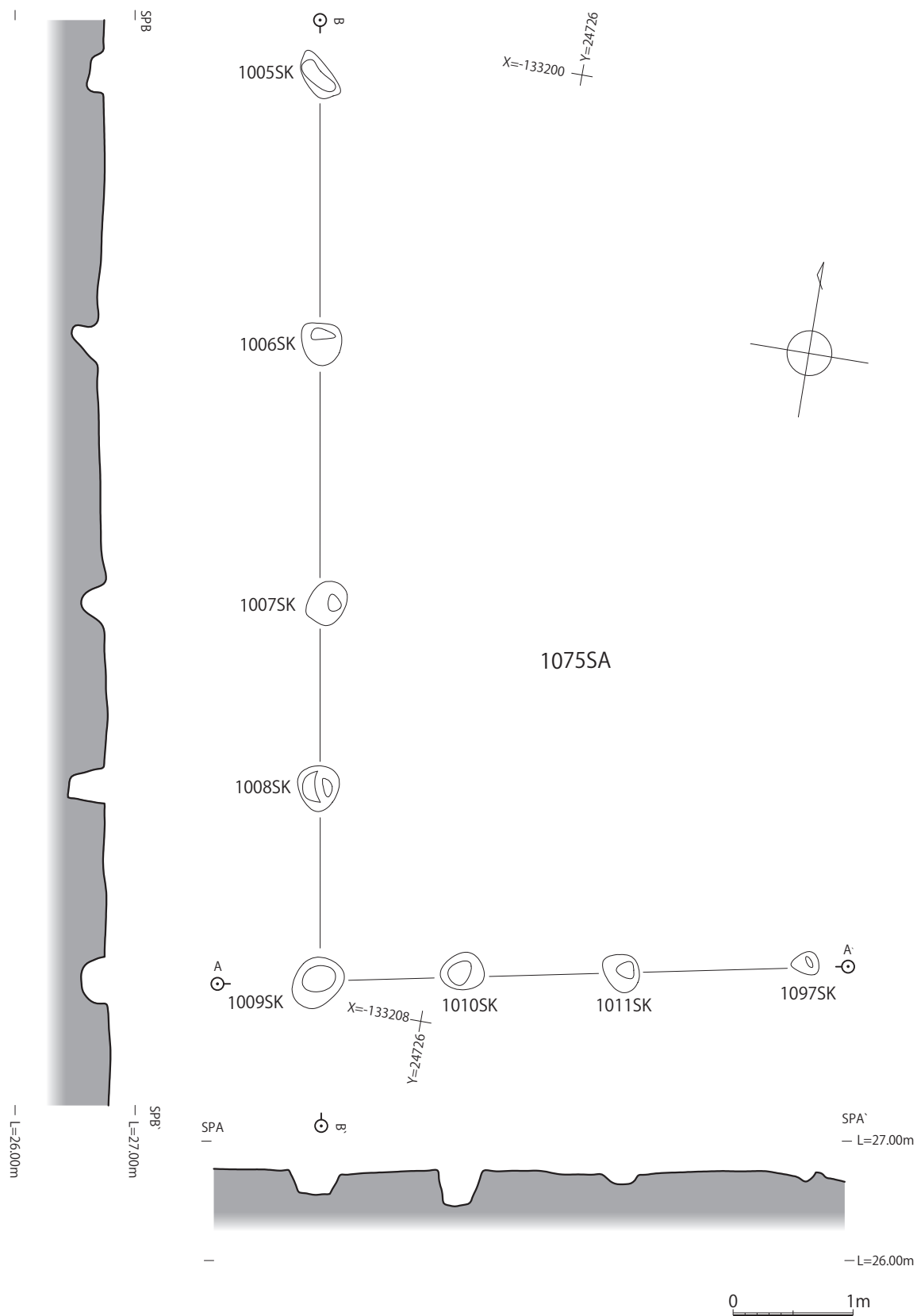
・C区

C区は調査地点を三分割した北東側にあたり、住宅と道路にはさまれた細長い調査区である。A・B区と違い、C区は全体的に基盤層まで削平された後に整地され、締まった客土で覆われていた。竪穴建物、B区の大溝とは方向の違う同規模、同形態の大溝などが検出され、居住域の変遷、大溝の囲郭状況などを推察する資料となった。

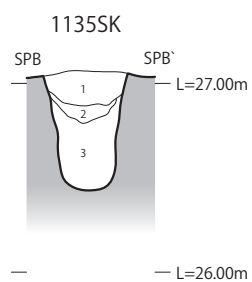
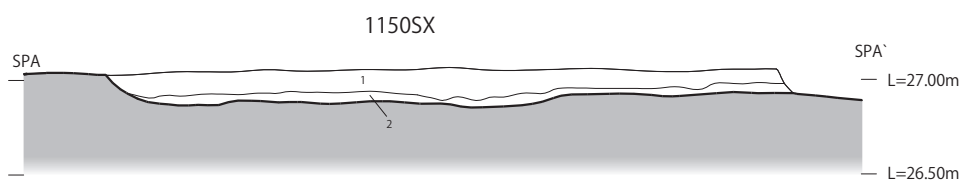
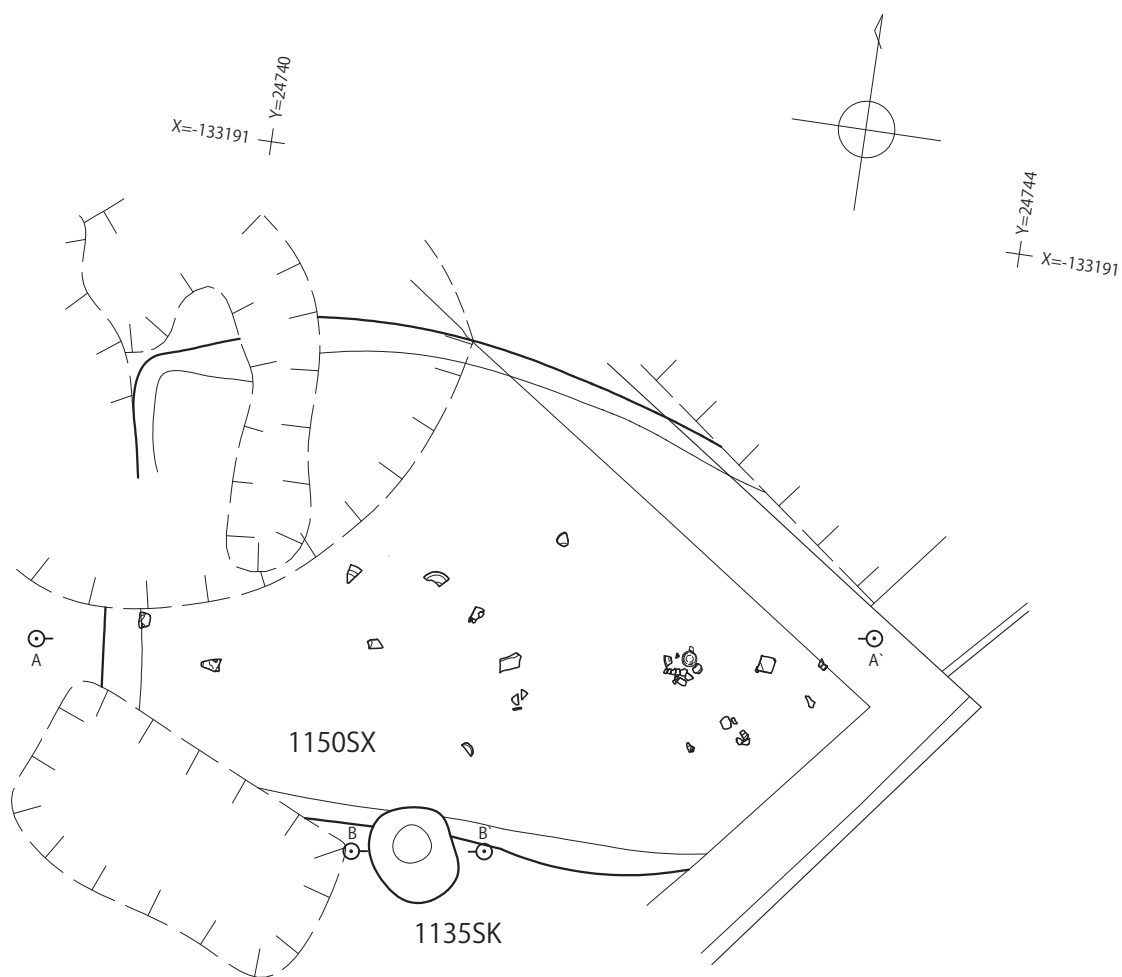
3028SI B区中央やや西側に位置する。平面形態は長方形を呈し、検出高は27.4～27.5mを測る。下端における南北径は3.9m、東西径は3.1mを測る。残存する深さは0.1mを測り、上部は削平されて基底部に近い部分が検出されたものと思われる。埋土は暗褐色シルトを基調とする。平面形における主軸の方向は、南北方向でN—10°—Wを示す。支柱穴、壁溝、カマドは明確に検出されていないが、埋土下層はシルトブロックを多く含む締まりの強い斑土で、竪穴建物の可能性が考えられる。3029SKは、3028SI埋土の下層を切って掘削されているが、上層には覆われていた。竪穴建物の内部構造の可能性も考えられる。遺物は未検出であった。

3001SD C区中央やや北側に位置し、東西方向に伸びる大型溝状遺構である。断面形態は逆台形を呈している。遺構の重複関係では、3032、3034、3035SKに切られている。検出高は27.4～27.5mを測る。幅は最大3.2m、検出長7.7m、検出高からの深さは1.0mを測る。平面形態における主軸の方向はE—0°—Sと東西方位を示すが、南側のB区で検出された同規模、同形態の溝2001SDでは主軸方向がN—22°—Eを示す。3001SDは、規模、形態の近似性から2001SDと一体のものであるならば、北側の調査区外にて向きを変えていることになる。埋土は灰黄色、黒褐色シルトなどを基調とし、遺物は、渥美産と考えられる山茶碗が出土している。

3018SD C区北東端に位置し、東西方向に伸びる溝状遺構である。断面形態は船底形を呈し、検出高は27.4mを測る。残存幅は最大1.2m、検出長4.5m、残存する深さは0.4mを測り、東西端部は調査区外に伸びており、上部は削平されたものと思われる。平面形態における主軸の方向は、W—17°—SからW—13°—Nに弧を描く。埋土は暗褐色シルトを基調とし、3008SKを切っている。



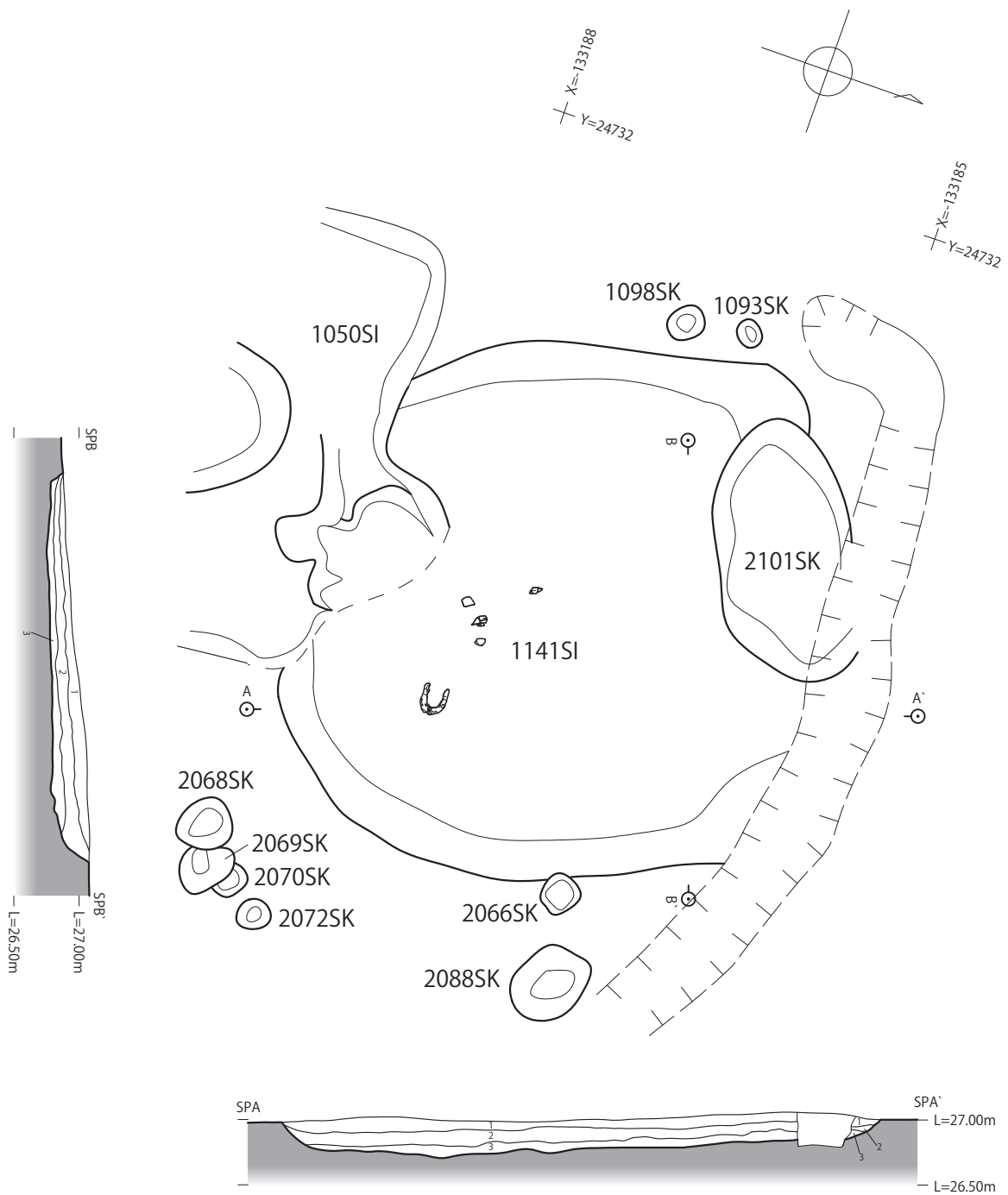
第8図 1075SA 平面・断面図



- 1150SX**
 1. 10YR3/3 暗褐色シルト粘性やや有り
 2. 10YR6/2 灰黄褐色シルト(2.5Y8/3 淡黄色シルトブロック含む)
- 1135SK**
 1. 10YR3/3 暗褐色シルト
 2. 2.5Y5/3 黄褐色シルト
 3. 2.5Y6/2 灰黄色シルト

0 1m

第 9 図 1150SX・1135SK 平面・断面図

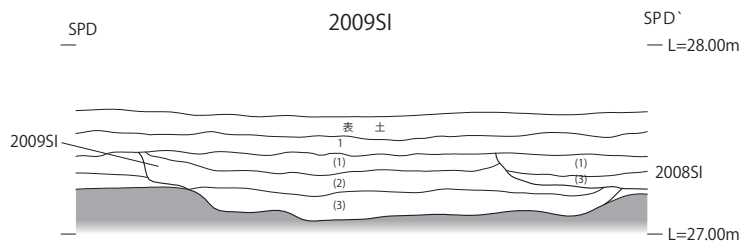
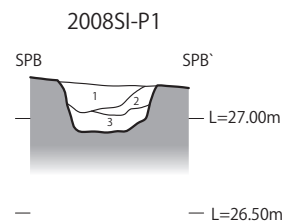
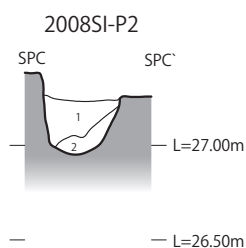
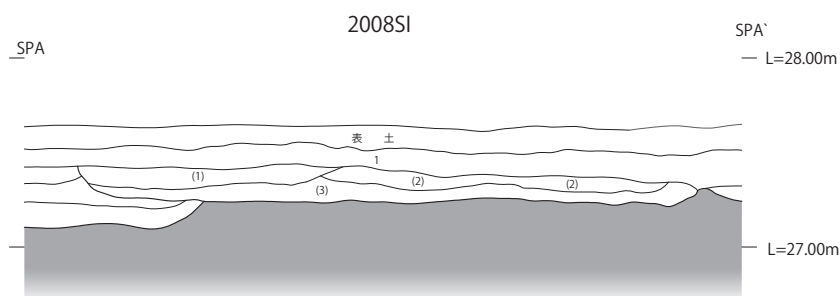
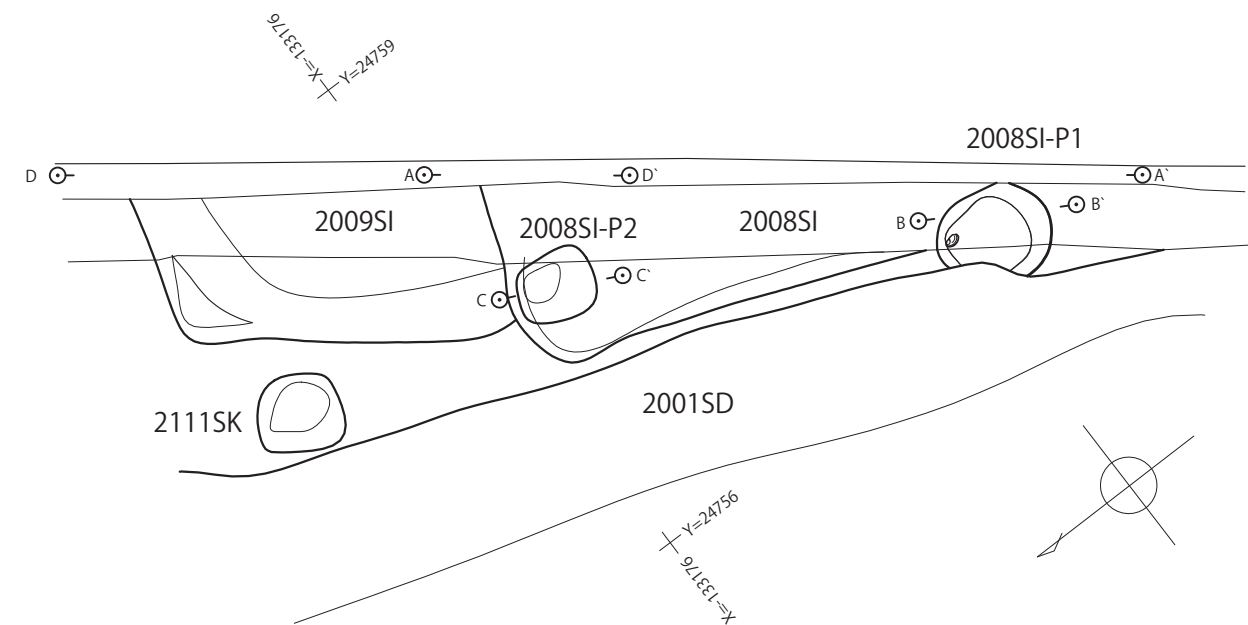


1141SI

1. 7.5YR3/1 黒褐色シルト
2. 10YR3/3 暗褐色シルト
3. 2.5Y7/6 明黄褐色シルト(10YR3/3暗褐色シルトブロック多く含む)貼床

0 1m

第10図 1141SI 平面・断面図



2008SI

1. 5YR4/1 褐灰色シルト
2. 10YR3/3 暗褐色シルト
3. 5YR5/1 褐灰色シルト(10YR7/3にぶい黄橙色シルトのブロックを多く含む)

2008SI-P1

1. 7.5YR5/2 灰褐色シルト
2. 7.5YR5/1 褐灰色シルト
3. 5YR5/1 褐灰色シルト(10YR7/3にぶい黄橙色シルトのブロックを多く含む)

2008SI-P2

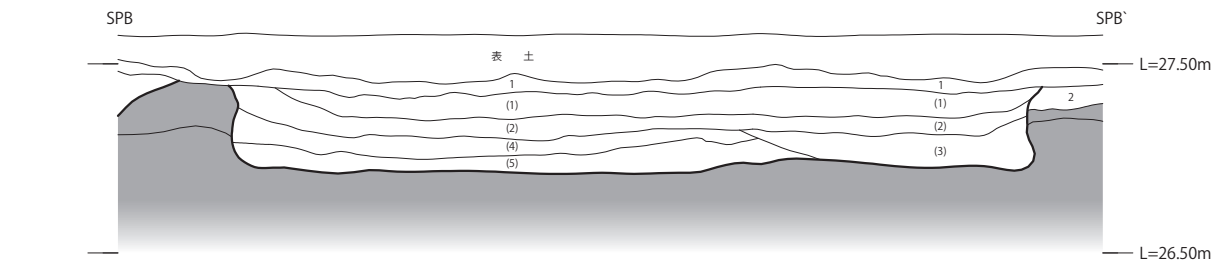
1. 7.5YR5/2 灰褐色シルト
3. 5YR5/1 褐灰色シルト(10YR7/3にぶい黄橙色シルトのブロックを多く含む)

2009SI

- (1). 7.5YR3/1 黒褐色シルト
- (2). 7.5YR4/1 褐灰色シルト
- (3). 7.5YR5/2 灰褐色シルト(10YR7/3にぶい黄橙色シルトのブロックを多く含む)

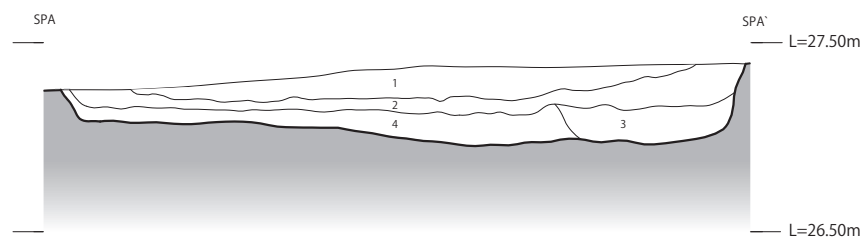
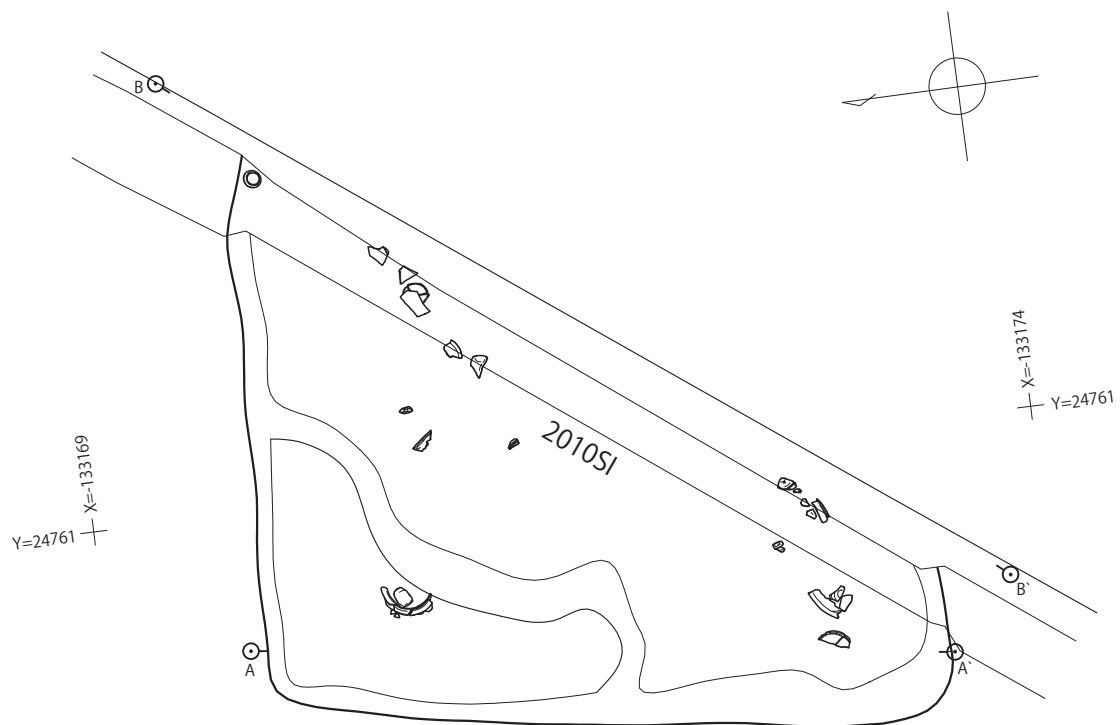
0 1m

第11図 2008SI・2009SI 平面・断面図



2010SI

- (1). 10YR4/2 灰黄褐色シルト
- (2). 7.5YR4/1 褐灰色シルト
- (3). 7.5YR3/1 黒褐色シルト
- (4). 10YR6/2 灰黄褐色シルト(2.5Y8/3淡黄色シルトブロック含む)
- (5). 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト

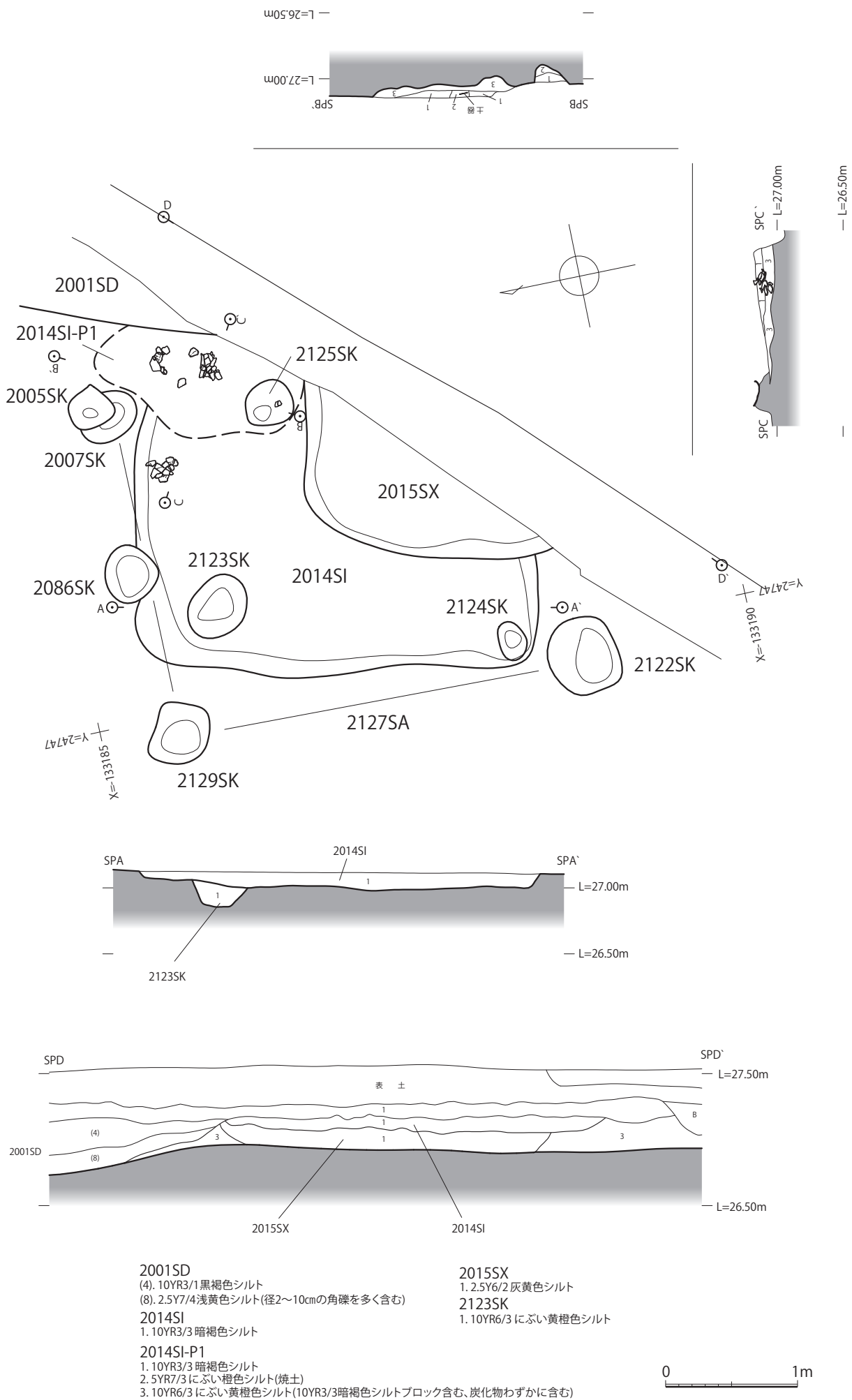


2010SI

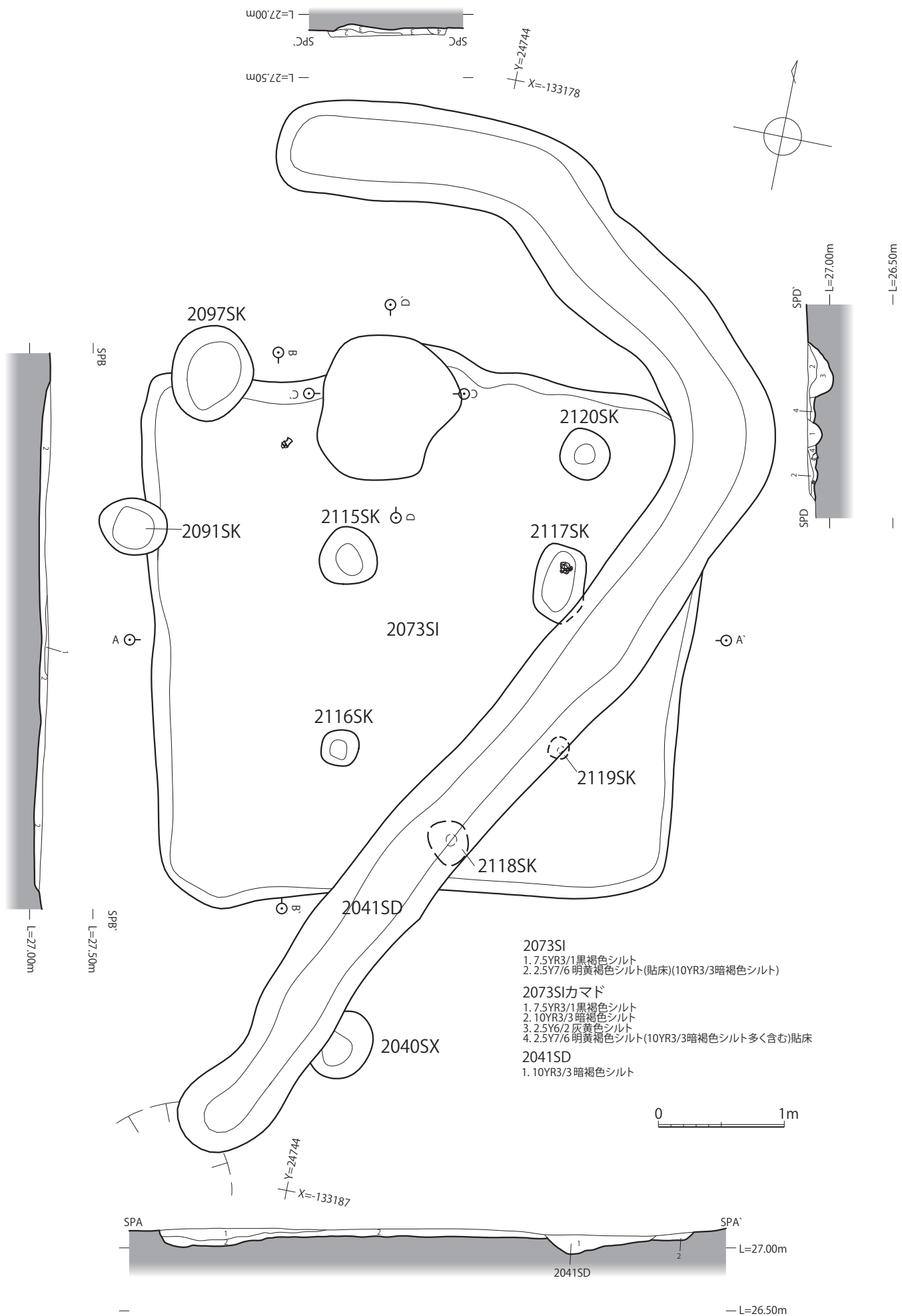
1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト
2. 7.5YR4/1 褐灰色シルト
3. 7.5YR3/1 黒褐色シルト
4. 10YR6/2 灰黄褐色シルト(2.5Y8/3淡黄色シルトブロック含む)

0 1m

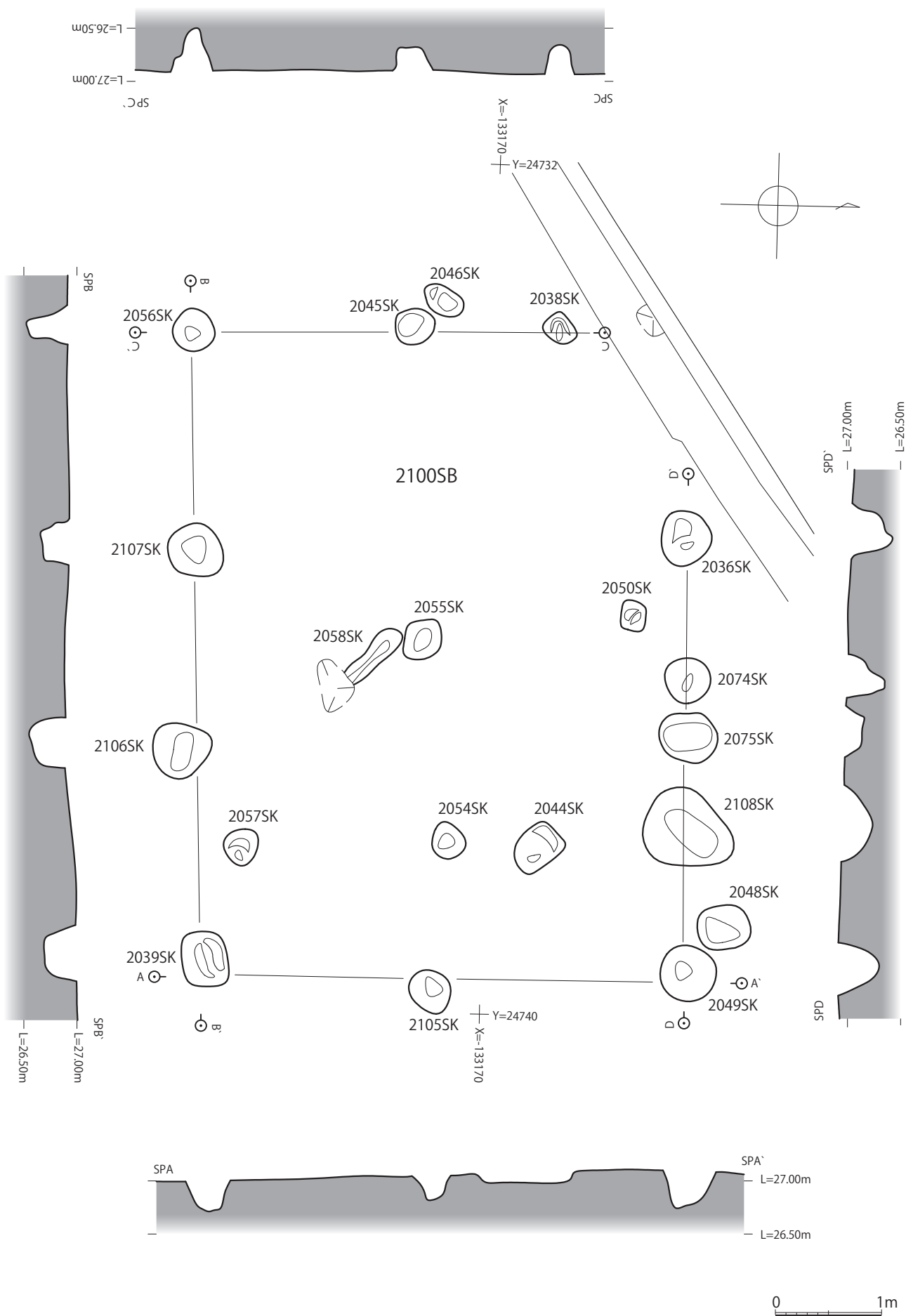
第12図 2010SI 平面・断面図



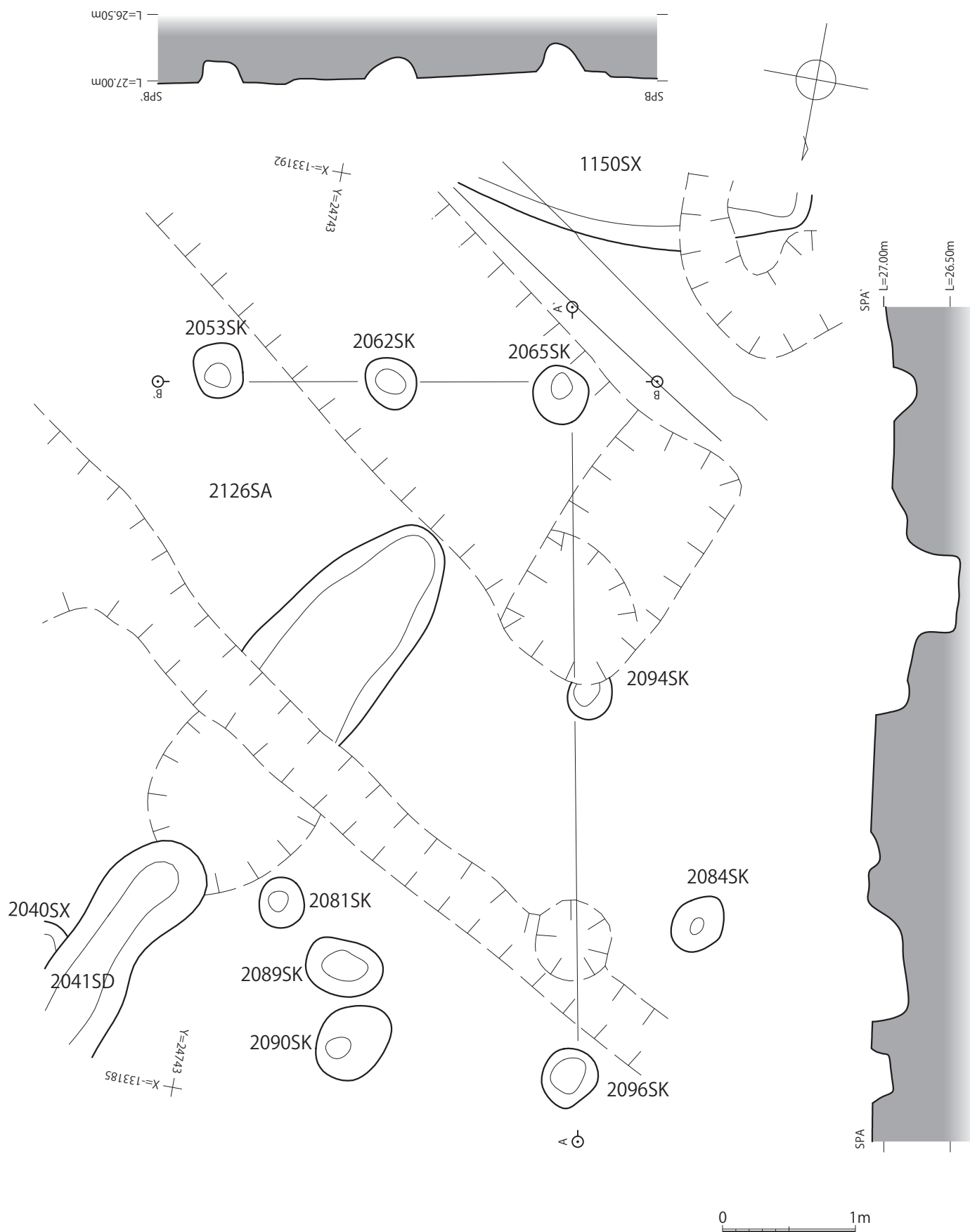
第13図 2014SI 平面・断面図



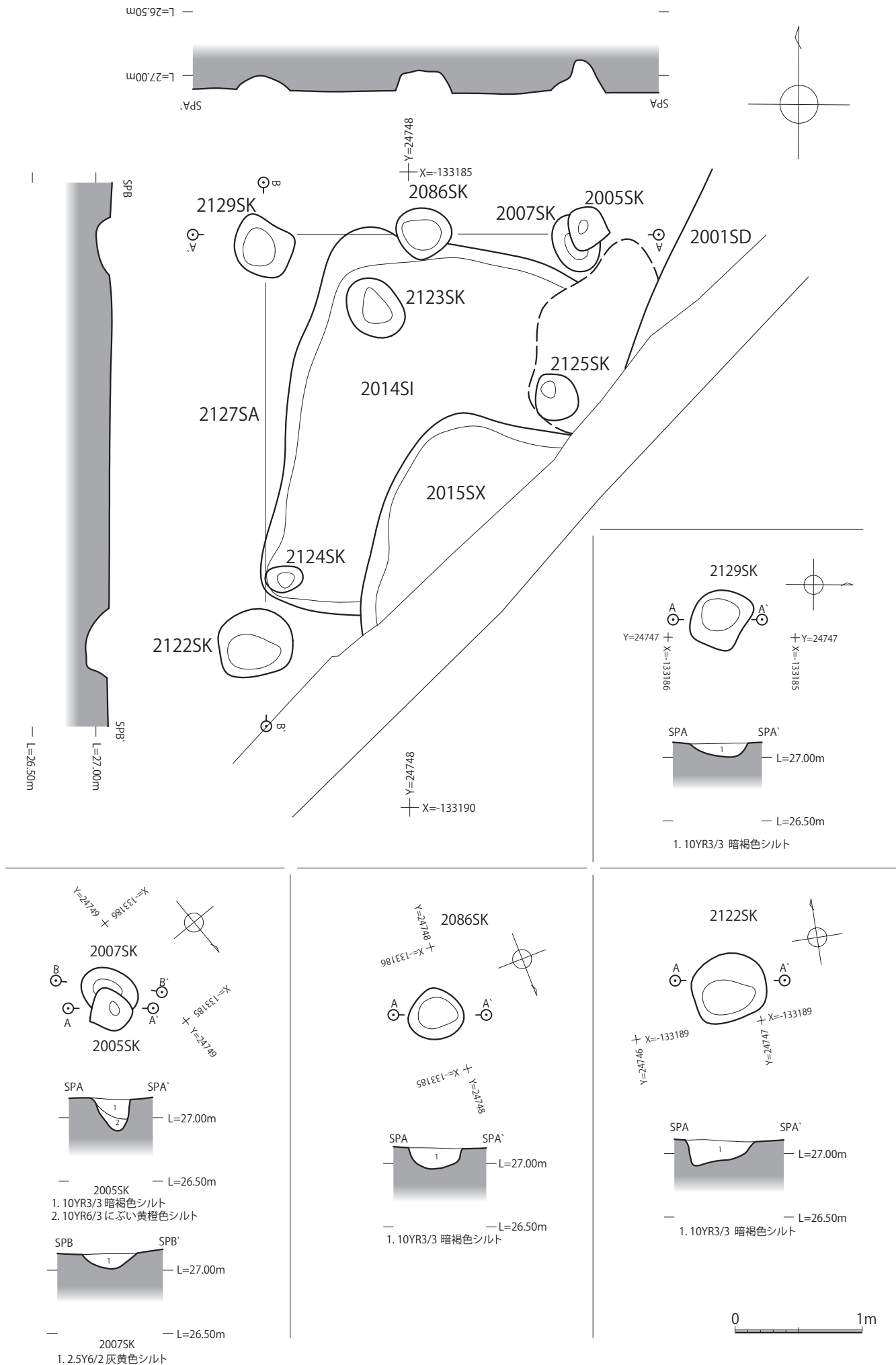
第14図 2073SI・2041SD 平面・断面図



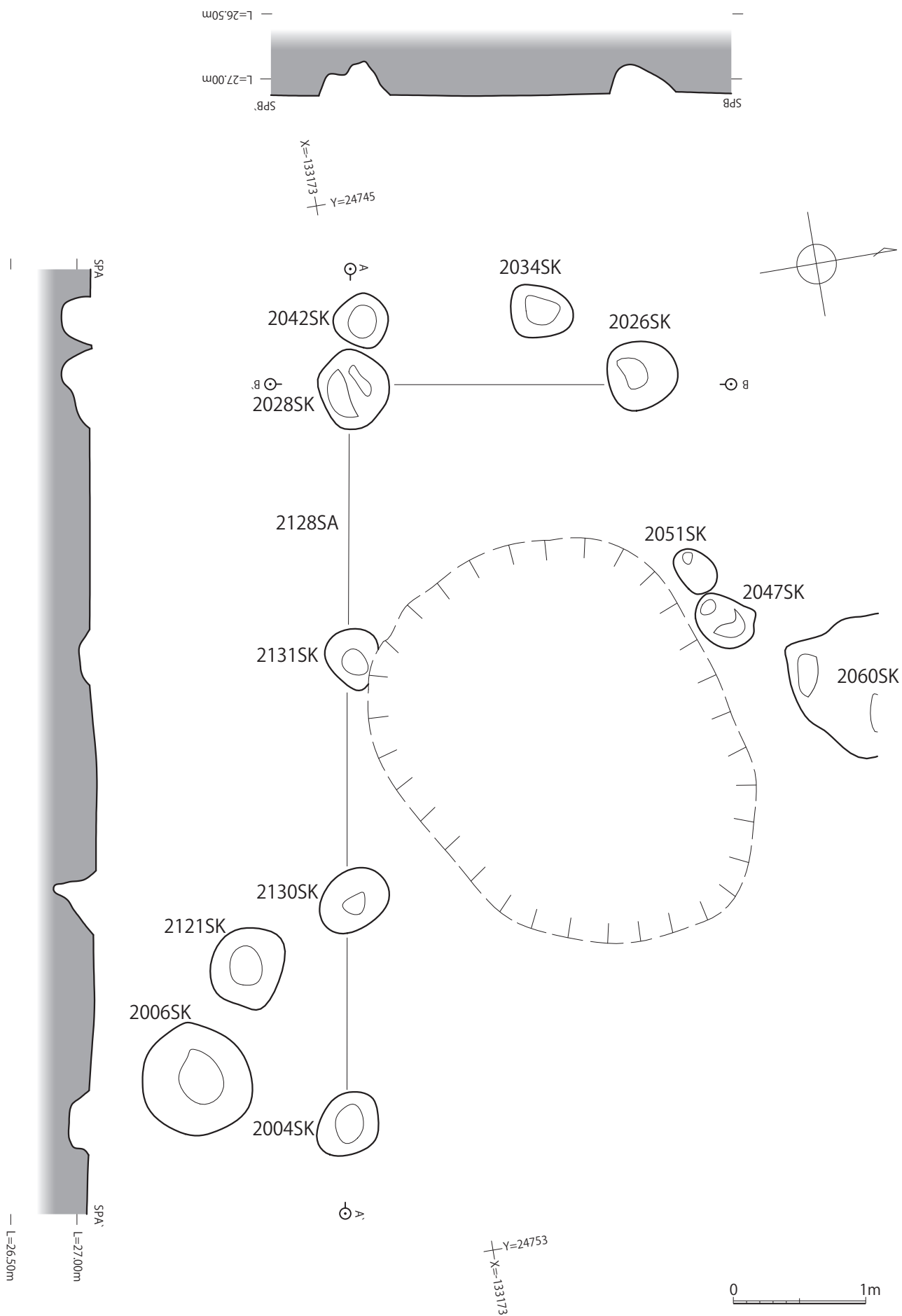
第15図 2100SB 平面・断面図



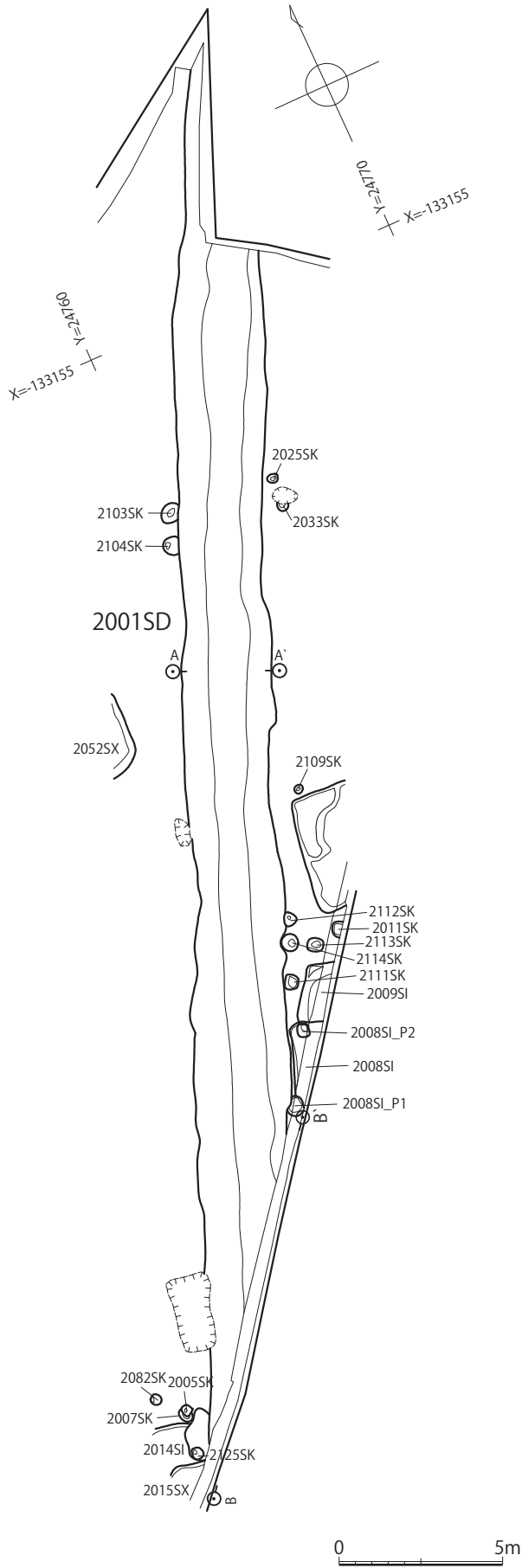
第16図 2126SA 平面・断面図



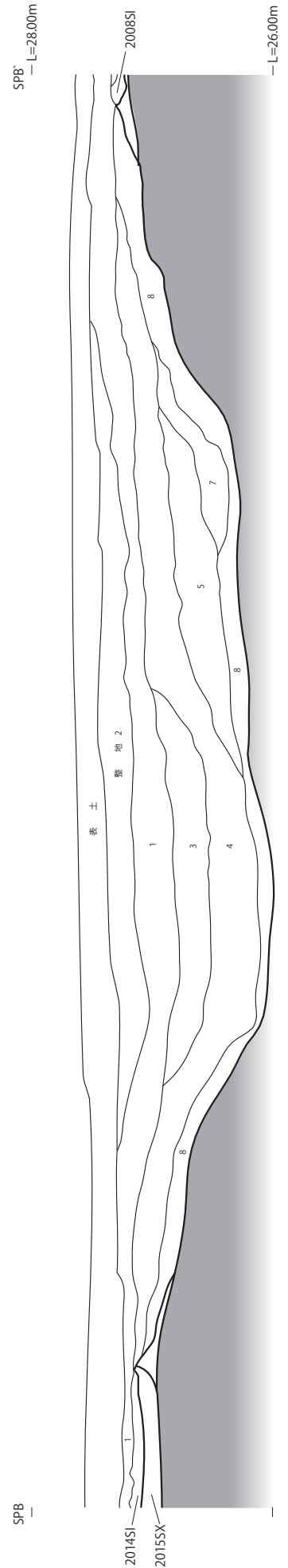
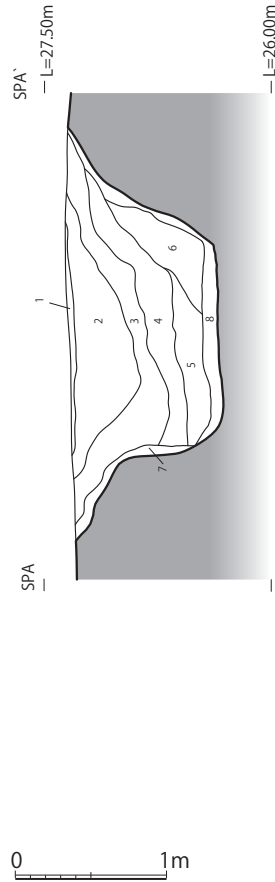
第17図 2127SA 平面・断面図



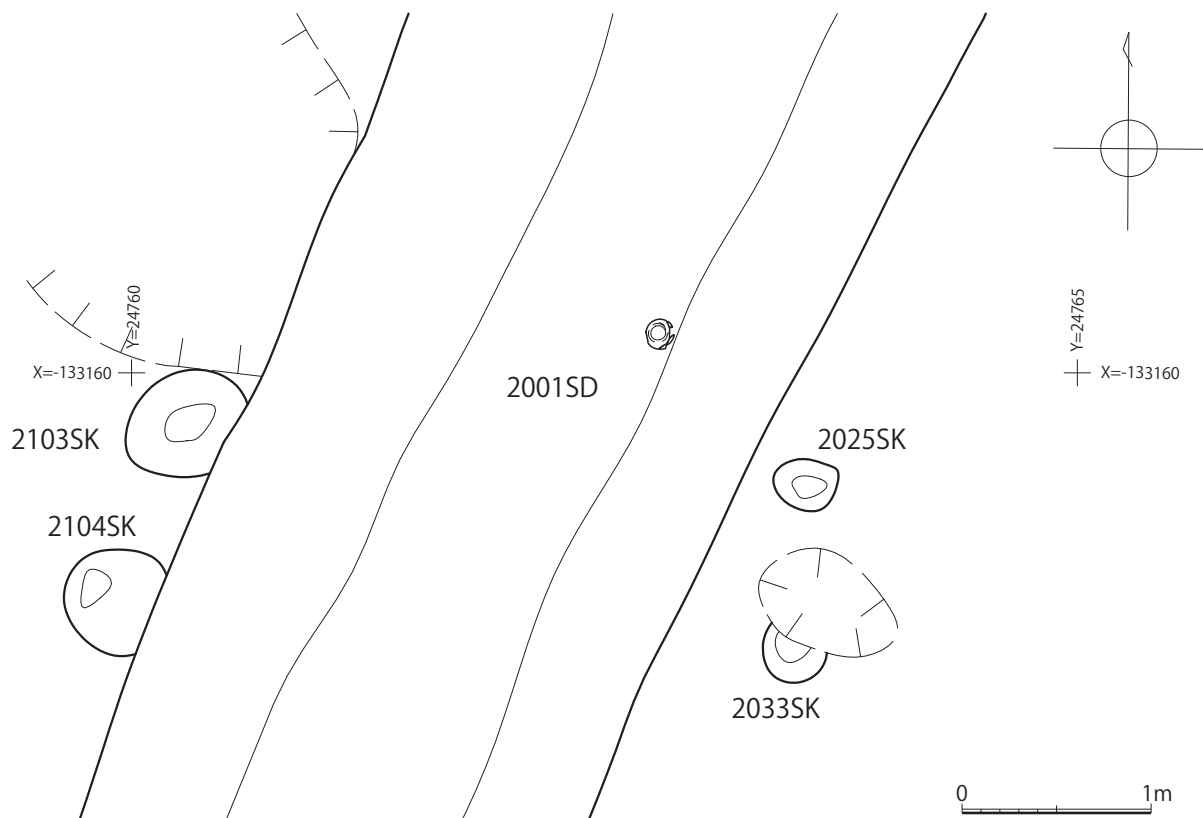
第18図 2128SA 平面・断面図



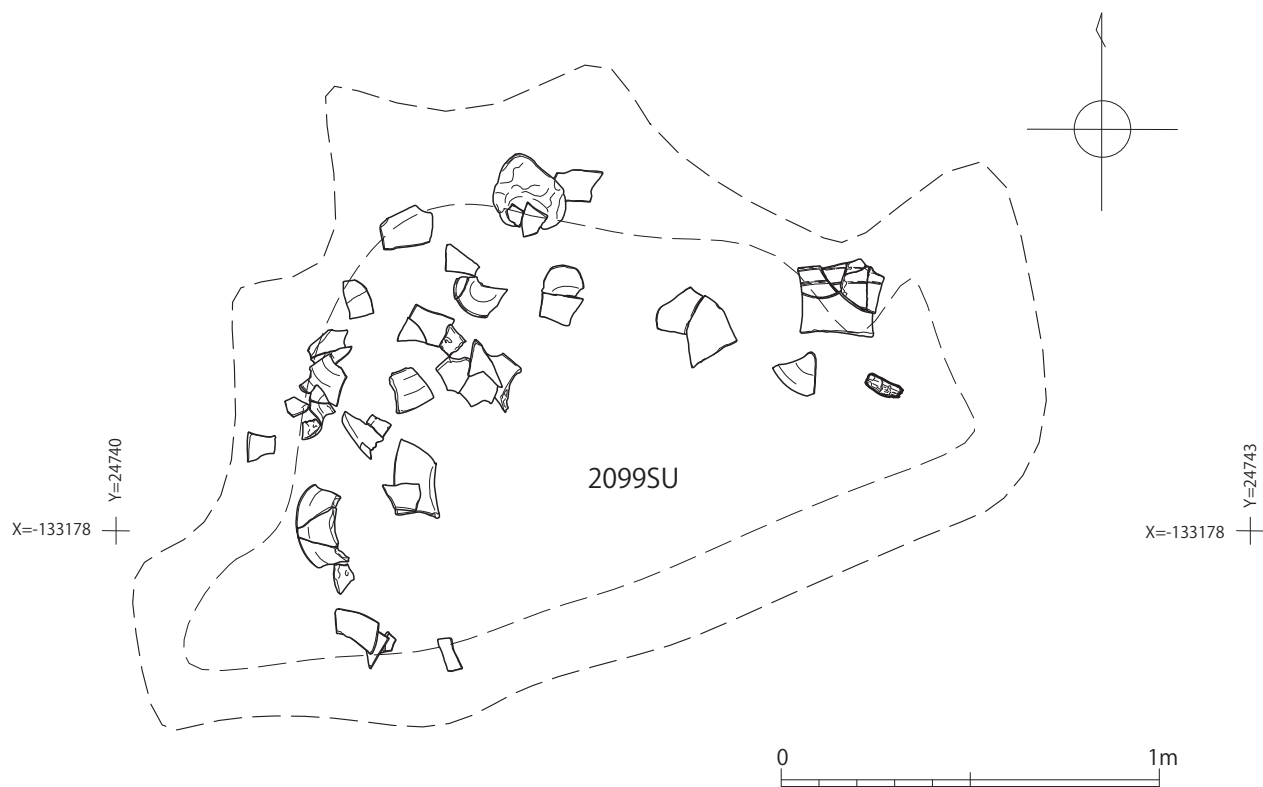
- 2001SD
1. 10YR7/3にぶい黄褐色粘質土
 2. 10YR4/1褐灰色シルト(径2~4cmの角礫を含む)
 3. 2.5Y4/1黄灰色シルト(径1~2cmの角礫をわずかに含む)
 4. 10YR3/1黄褐色シルト
 5. 2.5Y5/1黄灰色シルト(径2~5cmの角礫を多く含む)
 6. 2.5Y7/2灰黄色シルト(径3~8cmの角礫を多く含む)
 7. 2.5Y5/2暗灰黄色シルト(径1~3cmの角礫を含む)
 8. 2.5Y7/4浅黄色シルト(径2~10cmの角礫を多く含む)



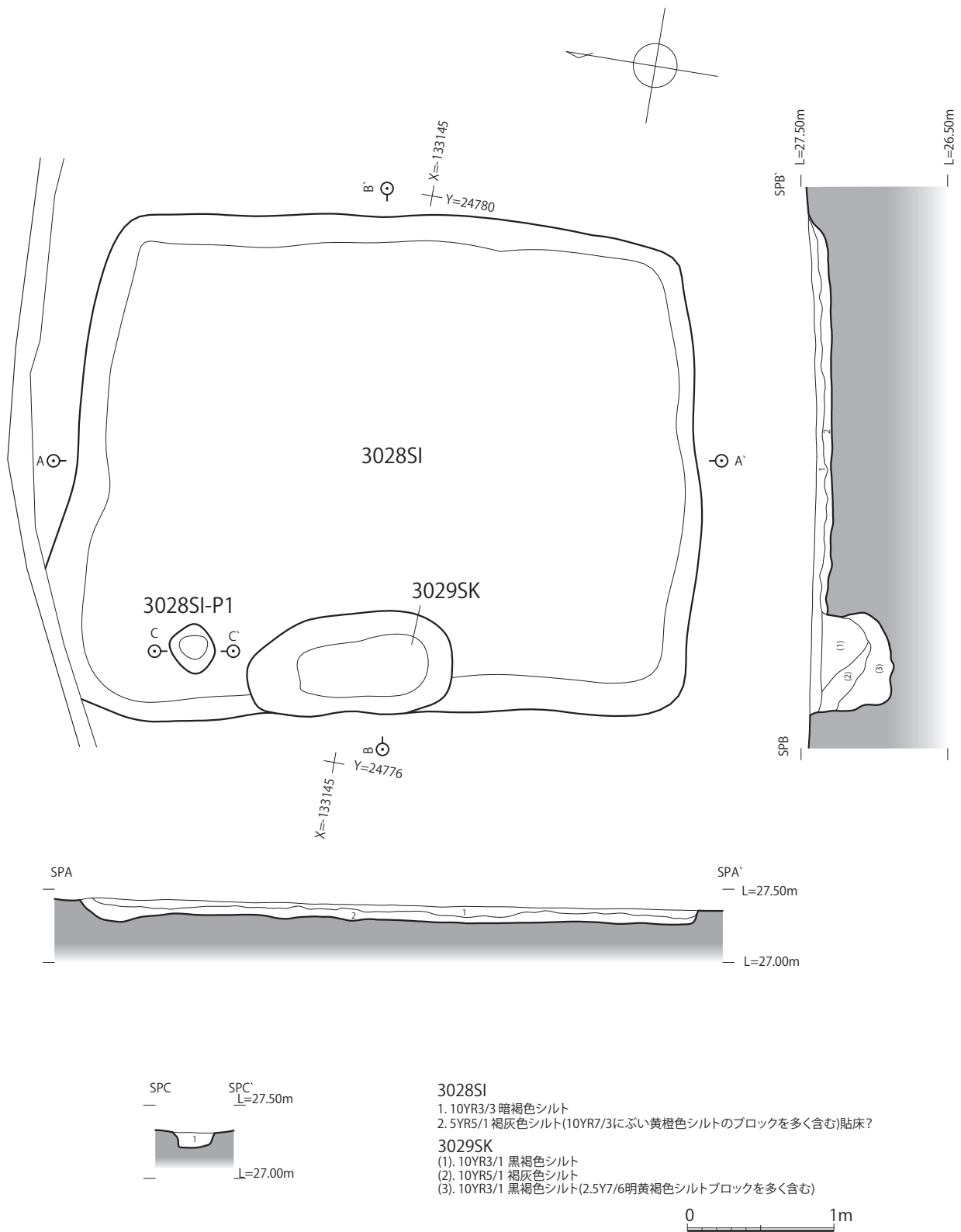
第19図 2001SD 平面・断面図



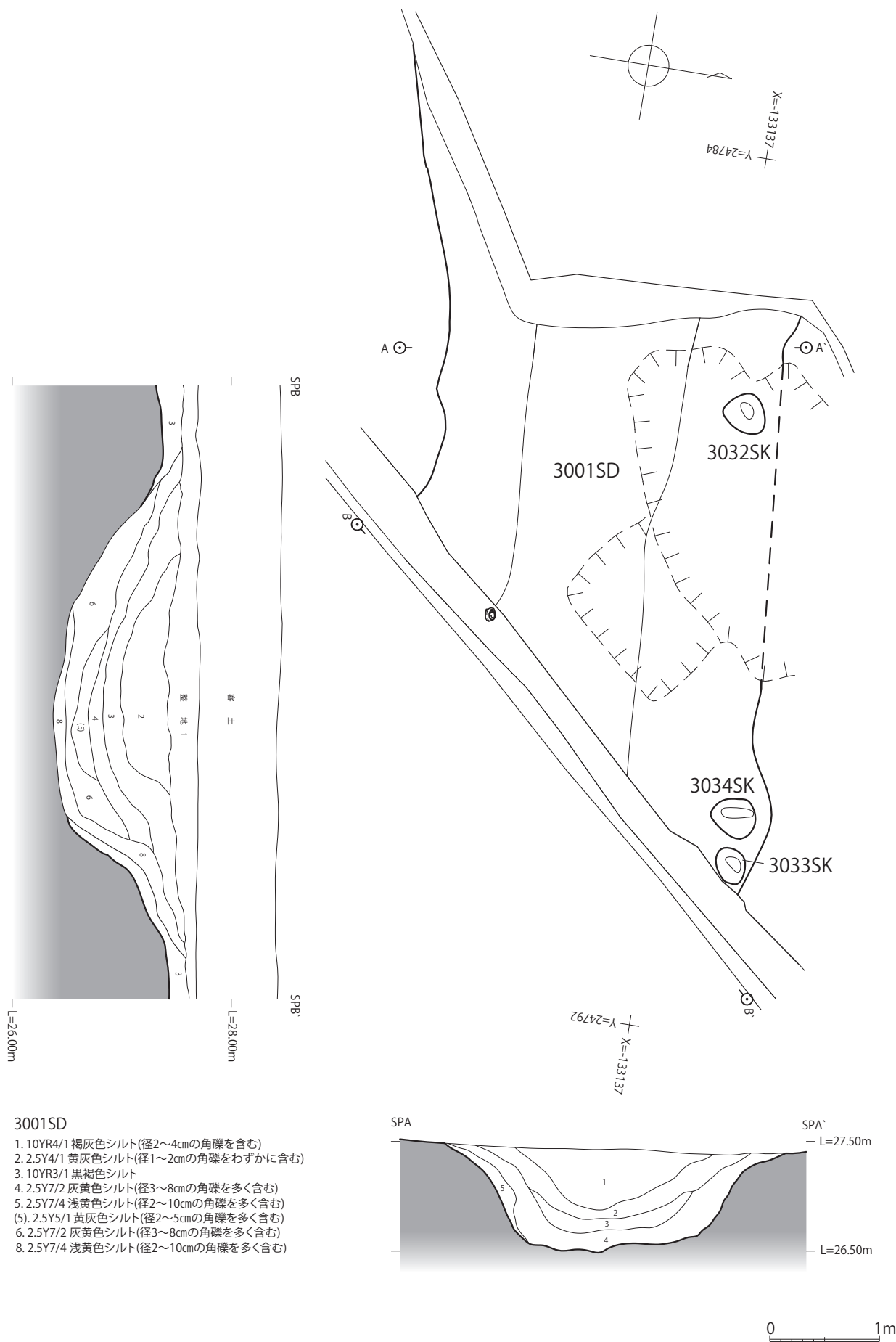
第20図 2001SD 遺物出土状態図



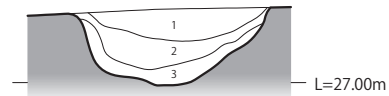
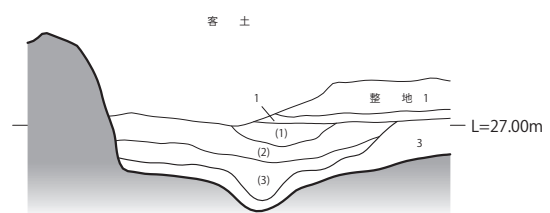
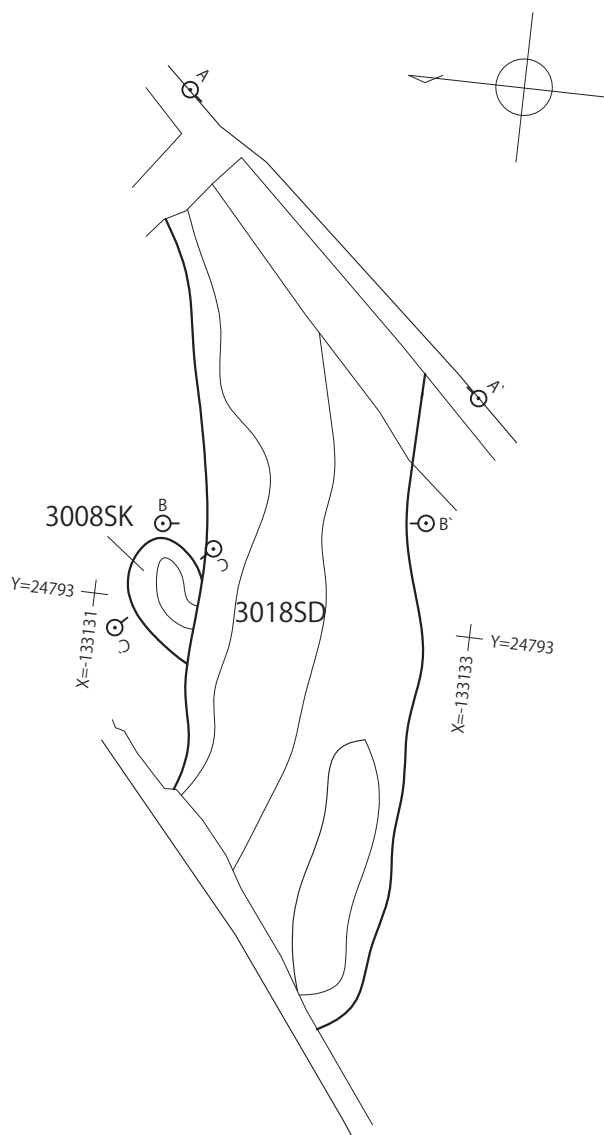
第21図 2099SU 遺物出土状態図



第22図 3028SI・3029SK 平面・断面図

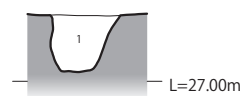
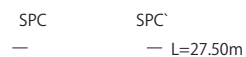


第23図 3001SD 平面・断面図



3018SD

1. 10YR3/3 暗褐色シルト
2. 10YR3/3 暗褐色シルト(2.5Y7/6明黄褐色シルトブロックを含む)
3. 2.5Y6/2 灰黄色シルト(2.5Y7/6明黄褐色シルトブロックを多く含む)



3008SK

1. 10YR3/3 暗褐色シルト



第24図 3018SD・3008SK 平面・断面図

第 IV 章 遺物

第 1 節 遺物の記述

遺物番号の前には焼き物は E、石製品は S などの遺物記号が付けられるが、本報告書では省略して記述している。縮尺については、掲載頁内に明記した。

各遺物の中で主要な時期については、下記の文献の分類・型式・時期区分を参照した。また石製品の石材については本センター 堀木真美子氏から教示を得た。

・古墳時代後期～平安時代：

城ヶ谷和広2010「第1章総論 第3節 編年及び編年表 土師器・須恵器・施釉陶器（緑釉・灰釉）」『愛知県史 資料編 4 考古 4 飛鳥～平安』

・鎌倉時代～室町時代：

中野晴久1994「赤羽・中野「生産地における編年について」」『「中世常滑焼をおって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所

中野晴久2012「第1章総論 第3節常滑窯」『愛知県史 別編 窯業 3 中世・近世 常滑系』

藤澤良祐1990「付論 2 山茶碗と中世社会」『尾呂一愛知県瀬戸市 定光寺カントリークラブ増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

藤澤良祐2007「第1章総論 第2節 灰釉陶器から山茶碗生産へ」「第1章総論 第3節 古瀬戸生産の成立と展開」『愛知県史 別編 窯業 2 中世・近世 瀬戸系』

安井俊則2012「第1章総論 第2節渥美窯」『愛知県史 別編 窯業 3 中世・近世 常滑系』

第 2 節 出土遺物

・A 区

1050SI 1～3は須恵器である。1は短頸壺で、口縁部から内面に掛けて丸みがあり、胎土はやや粗めである。2、3は無台坏で、いずれも底部はヘラ削り調整されており、在地産と思われ、形態的特徴から猿投窯編年の O-10号窯期併行期にあたるものと思われる。

1019SK 4は猿投窯編年の O-53号窯期併行期の灰釉陶器碗。

1140SK 5は美濃の丸石 2号窯産と思われる灰釉陶器碗。

1117SX 6は猿投窯編年の O-10号窯期と考えられる須恵器無台碗。

1068SK・1019SK 7は猿投窯編年の I-25号窯期の須恵器甕で、口縁部はやや丸みを帯びた雑な作りで、黄土が薄く塗られている。

1150SX 8、9は土器甕で、いずれも小型丸底の三河型甕と思われる。10～18は須恵器で、10は猿投窯編年の O-10号窯期と考えられる短頸壺である。11、12は坏蓋で、口縁部は短く折り返されており、猿投窯編年の O-10号窯期に比定される。13～18は在地産と考えられる須恵器である。13は無台坏で、口縁端部内側に段状のくぼみが見られ、猿投窯編年の O-10号窯期併行期にあたるも

のと思われる。14は浅い碗で、高台がていねいに作られ、仏具の銅鉢を写した製品と考えられ、猿投窯編年の K-7 号窯期併行期にあたるものと思われる。15、16は無台皿で、15は口縁部内側の作りが廻をもたせたていねいな作りで、猿投窯編年の O-10号窯期併行期にあたるものと思われる。17は有台盤で、内側に焼きぶくれが認められる。作りのていねいな14・15・17は、使用にあたりセット関係も想定される。18は回転ヘラ削りが外側に観察できないため、脚付き盤と想定した。19は灰釉陶器碗で、混入品の可能性が考えられる。

トレンチ・検出 20～40は、A 区壁トレンチ出土および検出遺物である。22～24、35は土器で、22は口縁部が短く鋭角的に折り返された三河型甕である。23は外面にハケ調整が見られ、口縁端部が摘み上げられた伊勢型甕である。24は、三河型甕に比して器壁が厚く、清郷型鍋と考えられる。20、21、25～27、29、36～38は須恵器である。28、30～34、39、40は灰釉陶器碗である。28は形態的特徴から猿投窯編年の K-90号窯期に比定され、高台内側底部に墨書が認められるが、明瞭には判読できなかった。□千とも読めるが、□は単なる墨付きの可能性も考えられる。34は高台の断面形態が角形を呈し、三叉トチン痕が認められ、猿投窯編年の K-14号窯期に比定される。

・B 区

1141SI 44、45は須恵器である。44は焼成が悪い広口の鉢と思われ、45は底部まで残存していないが、糸切り痕がみられる平底の坏と思われる。形態的特徴から、8世紀代の可能性が考えられる。M-1は鉄製の U 字形刃先である。木製の土掘り具に鉄製の刃先を装着する、農具の部品と思われる。竪穴建物跡と考えられる本遺構の床面直上から出土しており、全体の形状は U 字形を呈し、刃縁は外側にわずかに張りが見られ、下側に弧を描く外湾刃である。刃縁は、U 字形刃先の長軸に対して左右対称からわずかに偏りが認められるが、本来の左右対称から使用状況などの結果、形状変化した可能性が考えられる。刃の断面形状は Y 字形を呈し、刃先部縦断面は楔形を呈するものと思われ、内縁にそって V 字溝がめぐっている。U 字形の両端である耳端部は、弧を描く。耳端部の片側は、V 字溝の切れ込みが不均等である。

2008SI 46は土師器である。体部の断面は屈曲がやや丸く、内外面には赤色塗布が認められ、ミガキ調整が施された畿内系土師器の坏である。形態的特徴から、8世紀代の可能性が考えられる。

2010SI 48～53は土器である。いずれも、口縁部が鋭角的に折り返された三河型甕である。48は小型甕で、49～53は長胴甕である。50には口縁部に化粧土が残っている。54は大型長胴甕である。口縁部の形態的特徴から、8世紀後葉を主体とした時期に否定される。54～59は須恵器である。54は有台の盤と思われ、55～57は坏蓋である。55にはススの付着が認められる。56は猿投窯編年の O-10号窯期、55、57は在地産の猿投窯編年 O-10号窯期併行期に比定される。58は猿投窯編年の O-10号窯期にあたる無台坏で、59は同時期の長頸瓶である。59は大型でもミニチュアでもない中間的サイズで、口頸部を欠いており、鉢に加工転用した可能性も考えられる。本遺構の主要となる出土遺物は、猿投窯編年の O-10号窯期併行期にあたるものと思われるが、54、60のように10世紀代と考えられる混入品も含まれた。

2014SI 61、62は土器である。61の長胴甕は、器壁が厚手で、底部内面は有段を削った後に指押さえによる整形が施されていて、濃尾型甕の技法を取り入れた在地型の可能性も考えられる。62は

61に比べて外側のハケ目調整が粗くない。内側の頸部から口縁部にかけてハケ目調整が横方向に施されており、濃尾型または伊勢型の影響を受けた甕の可能性も考えられる。61、62の甕は、その形態的特徴から8世紀以降のものと考えられる。63は須恵器無台坏で、在地産の猿投窯編年 O-10号窯期併行期と考えられる。

2073SI 64は須恵器長頸瓶である。体部を欠いているが、なで肩でフラスコ形の体部に伴うものだとすれば、8世紀代の製品と考えられる。S-1は凝灰岩製の砥石で、本遺構のカマドの可能性が考えられる位置から出土している。

2001SD 65～83は、B区にて検出された大溝、2001SDの出土遺物である。出土遺物は古代、中世、近世、近代の時期が見られ、長期間にわたって窪みが残っていた可能性が考えられるが、基底部にて出土したほぼ完形の山茶碗は13世紀代の製品であった。65は須恵器長頸瓶の底部である。66は灰釉陶器皿、66は同碗で、66の高台断面は角形を呈しており、いずれも猿投窯編年 O-53号窯期と考えられる。71は灰釉陶器碗で、高台の断面形態は三日月形を呈し、猿投窯編年 K-90号窯期と考えられる。72は猿投窯編年 O-53号窯期と考えられる灰釉陶器皿で、73は猿投窯編年 H-72号窯期と考えられる灰釉陶器碗である。68～70、74、75は山茶碗で、68は渥美窯 1b 型式期、69は渥美窯 3a 型式期、70は渥美窯 3b 型式期、74、75は渥美窯 2b 型式期に比定される。本遺構の基底部から伏せた状態で出土したのは70の山茶碗で、無台の平底である。76は土器焙烙で、浅い体部の外面にはススが付着しており、口縁端面、口縁端部外側に凹線状の窪みがみられ、形態的特徴から18世紀代の製品と思われる。77は19世紀代と考えられる常滑産の赤もの火鉢、78は17世紀代と考えられる常滑産の真焼深鉢である。80は施釉などの特徴から、いわゆる「尾呂茶碗」といわれる陶器碗で、美濃登窯第6小期と考えられる。79、81～83は磁器染付碗で、79は絵付けの特徴などから、近代の製品と思われる。81～83は肥前産と考えられる磁器染付碗で、いずれも器壁は丸腰、厚手のいわゆる「くらわんか茶碗」で、体部外面には草花紋が施され、81の高台内には「福」くずし、82の高台内には「大明年製」くずしが描かれていて、18世紀代の製品と考えられる。

2099SU 84～94は、遺物集中部からの出土である。84、85は土器で、いずれも、口縁部が鋭角的に折り返された三河型甕である。84は小型甕で、85は長胴甕である。断面形態の特徴などから、8世紀代の可能性が考えられる。86～94は須恵器である。86は短頸壺で、胎土の特徴などから在地産の可能性が考えられる。87は甕で、タタキが同心円ではなく斜状に施されている。87、88は、胎土の特徴などから在地産の可能性が考えられる。89は口縁部の作りが簡略で、形態的特徴から猿投窯編年の O-10号窯期と考えられる。90は大型の甕で、口縁の折り返し部はつまみ出されており、口縁部外側脇には櫛状工具で波状紋が施されていて、装飾意識が強く、特殊な使用も想定される。胎土の特徴などから在地産の可能性が考えられる。91、92は、坏蓋である。いずれも形態的特徴から猿投窯編年の I-25号窯期と考えられる。92は、口縁端部内側に細かい当て具痕が認められる。93は盤で、口縁端部は折り返されており、形態的特徴から猿投窯編年の O-10号窯期と考えられる。94は脚付き盤で、胎土の特徴などから在地産の可能性が考えられる。脚部は欠損しているが、切り込みが施された長方形の透かしを有する高い脚が伴うものと考えられる。猿投窯編年の O-10号窯期併行期にあたるものと思われる。

トレンチ・検出 95～99は、B区壁トレンチ出土および検出遺物である。95は、2010SIの調査区壁側トレンチから出土した土錘である。96、97は須恵器である。96は焼きの悪い坏蓋で、97は無台皿である。98、99は山茶碗である。高台の形態的特徴から、98は渥美窯2b型式期に、99は渥美窯2a型式期に比定される。

・C区

3002SK 100は須恵器碗である。胎土、断面形態の特徴などから、猿投窯編年のO-10号窯期と考えられる。

3017SK 101は土器である。口縁部が折り返された三河型甕と思われるが、折り返しは緩めで、体部は厚く、三河型甕では終末期の可能性が考えられる。

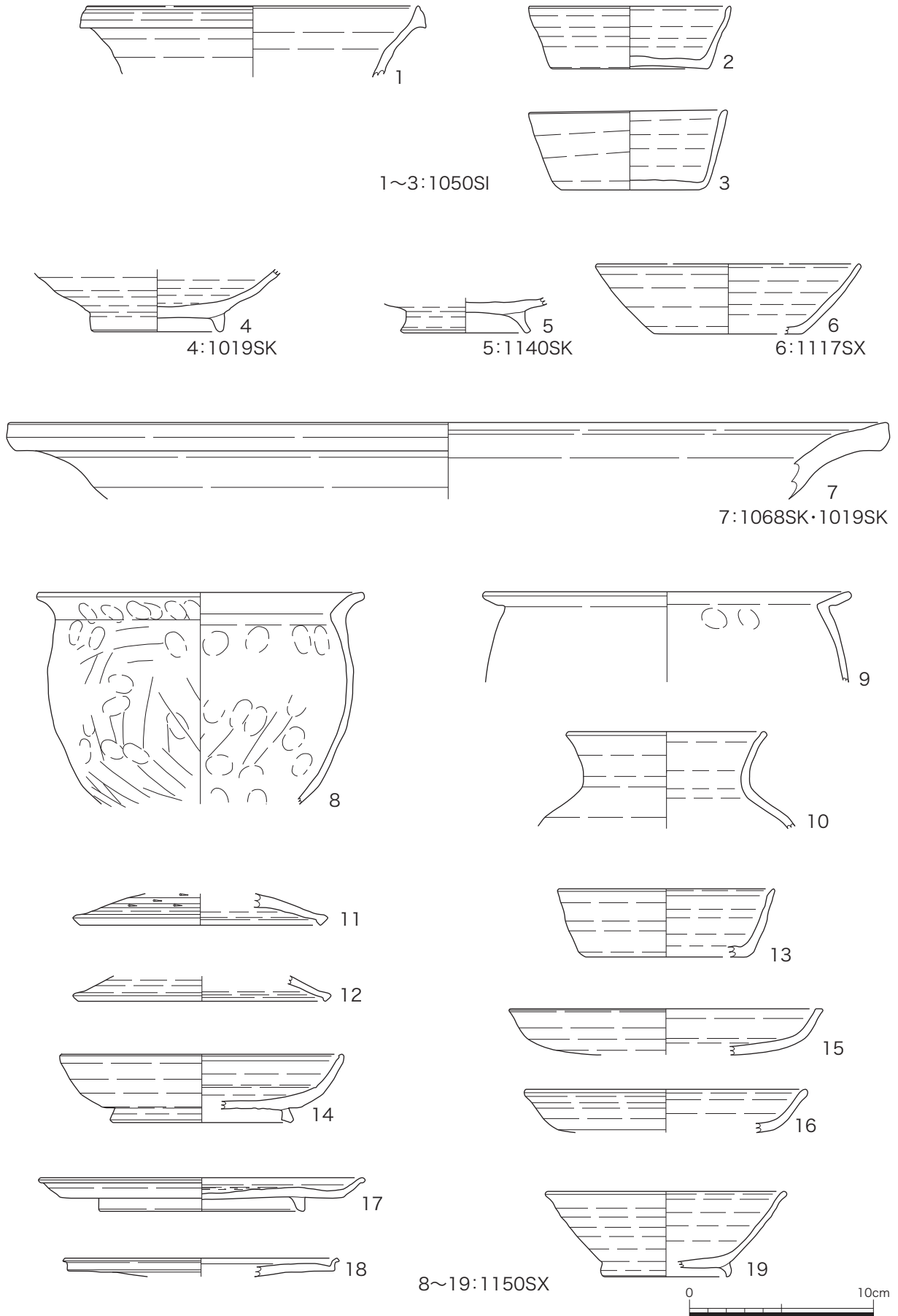
3021SK 102、103は山茶碗である。高台の形態的特徴から、102は渥美窯2a型式期に、103は渥美窯3a型式期に比定される。本遺構からは、これらとは別に、104の肥前産磁器碗が出土しており、混入品と思われる。

3001SD 105～114は3001SD出土遺物である。105は土器である。断面形態などから、15～16世紀に遠江から東三河地域に分布する、「く」の字形内耳鍋と考えられる。106は灰釉陶器碗で、形態的特徴から、猿投窯編年のH-72号窯期併行期にあたるものと思われる。107は灰釉陶器小碗で、器壁は薄く、猿投窯編年のH-72号窯期併行期にあたるものと思われる。108の陶器碗は、高台は低いがモミ痕は見られず、尾張型山茶碗の第3型式期併行期の可能性が考えられる。109～114は山茶碗で、形態的特徴から109は渥美窯2a型式期、110は渥美窯3a型式期、111～113は渥美窯2a型式期、114は渥美窯3c型式期にあたるものと思われる。B区における2001SDと同規模、同断面形状の溝状遺構で、出土遺物の時期的な共通性なども考慮すると、調査区内での接続は確認できなかったが、2001SDから連なる溝の可能性が考えられる。

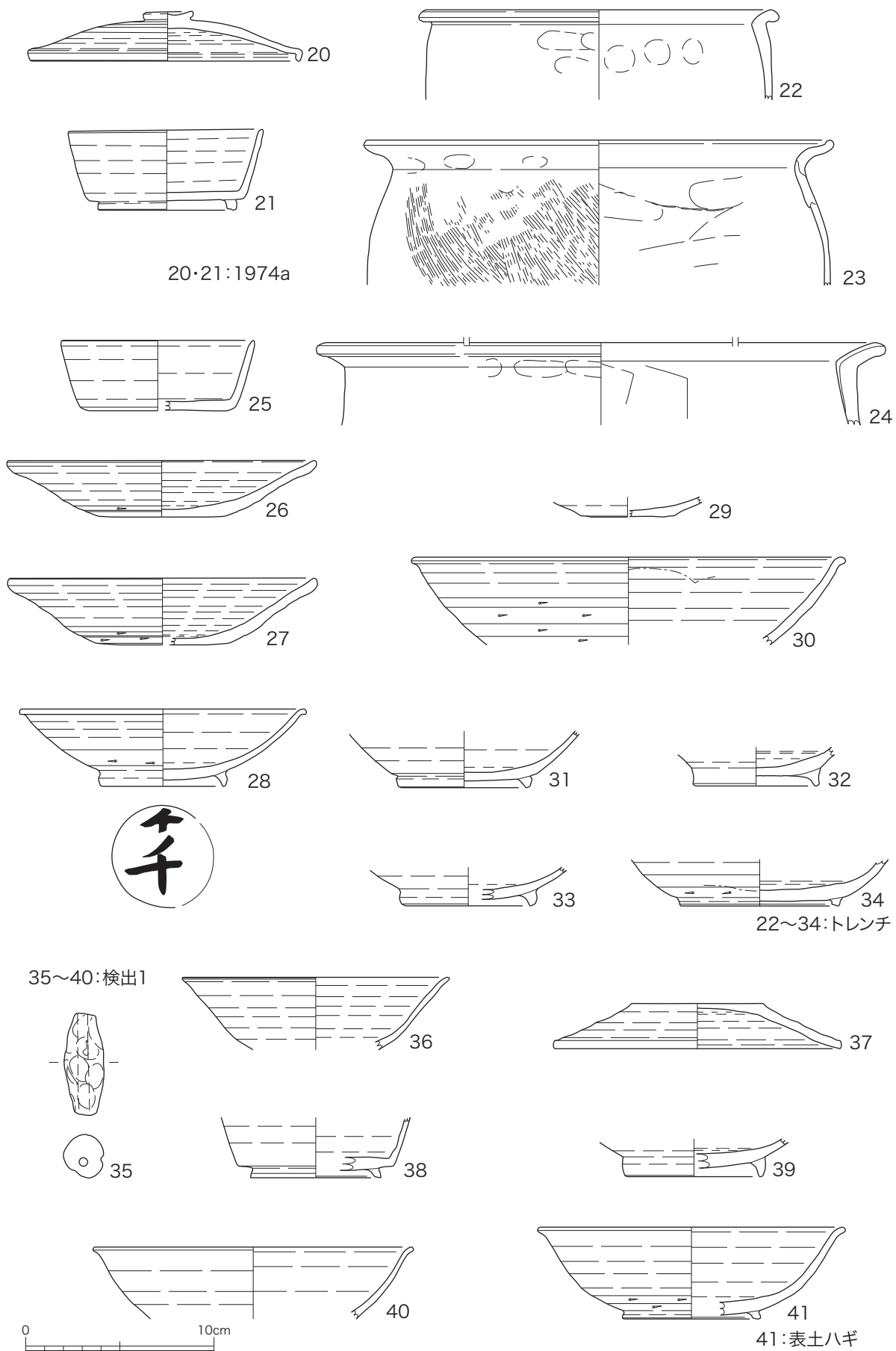
3019SD 115は土器鍋で、口縁端部は折り返されている。

検出 116、117は、C区壁検出遺物である。116は灰釉陶器の蓋で、焼成前に穿孔されている。117は土器で、器壁は厚く、口縁端部は短く直角に曲がっていて稜をもつ清郷型鍋と思われる。

攪乱 118は製塩土器の脚部で、知多式4類と思われる。119は陶器插鉢で、瀬戸登窯第9小期と考えられる。



第25図 出土遺物実測図(1) ※ 縮尺は1/3

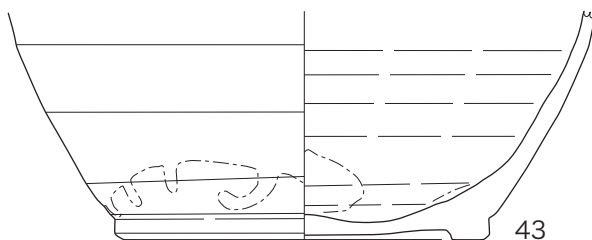


第26図 出土遺物実測図(2) ※ 縮尺は 1/3

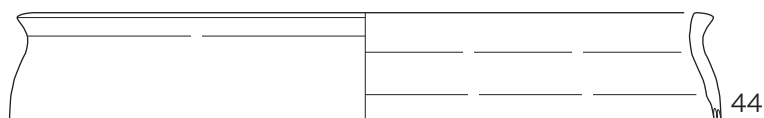
42・43:攪乱



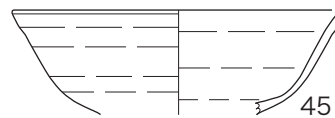
42



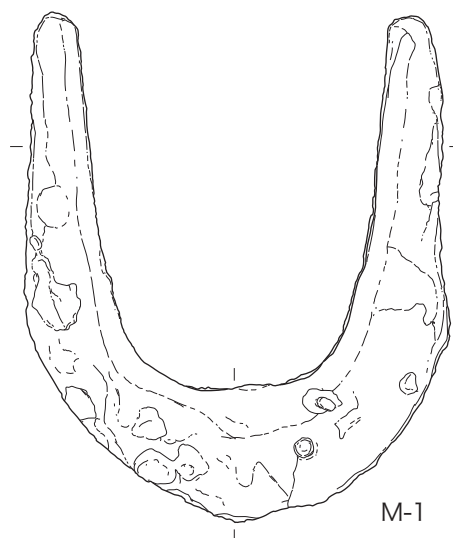
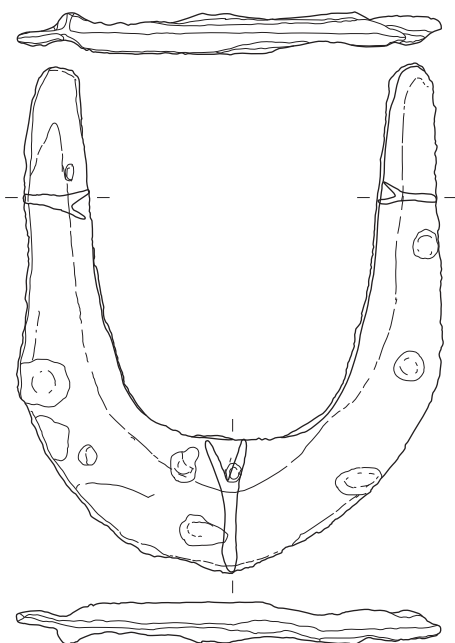
43



44



45



M-1

44・45・M-1:1141SI



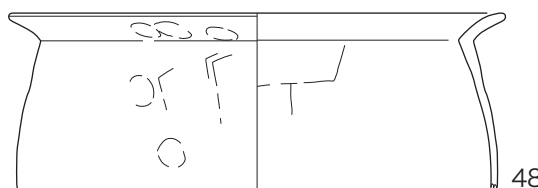
46

46:2008SI

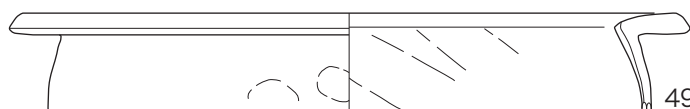


47

47:2009SI



48



49

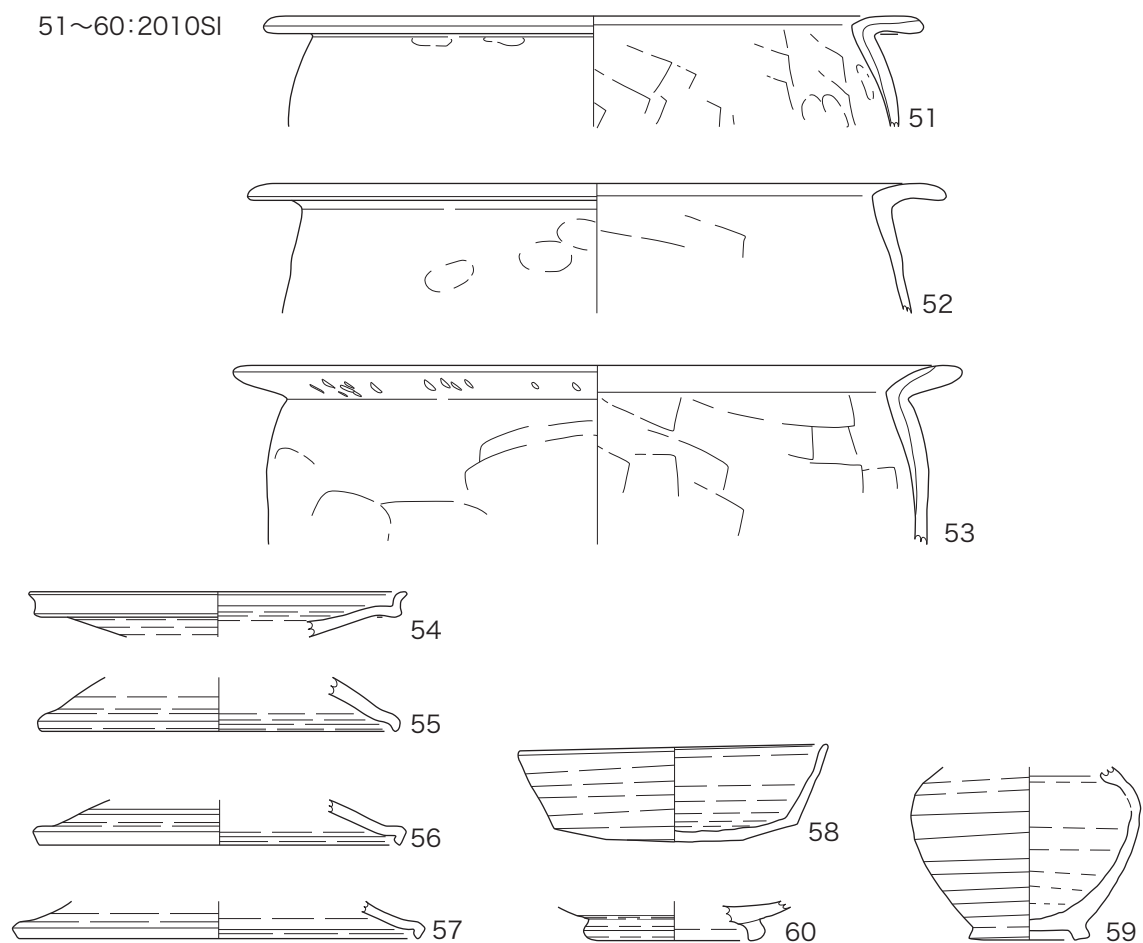


50

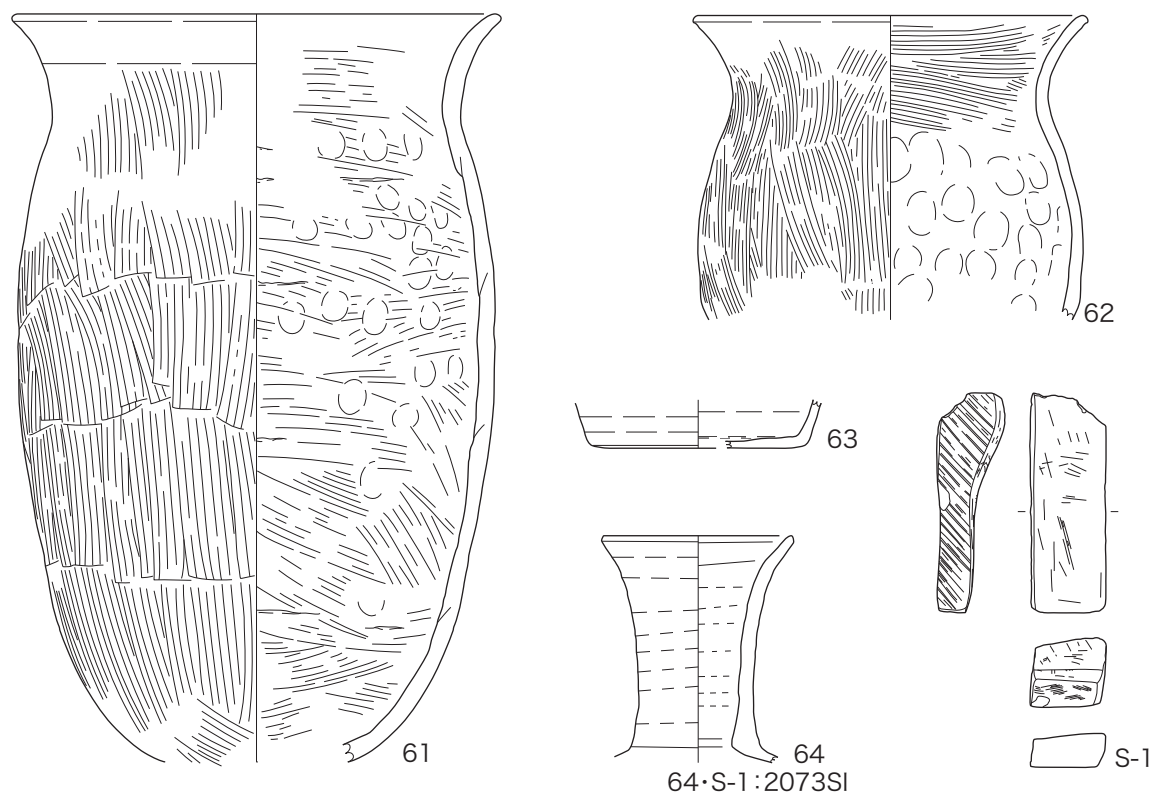
48~50:2010SI

第27図 出土遺物実測図(3) ※ 縮尺は1/3

51~60:2010SI

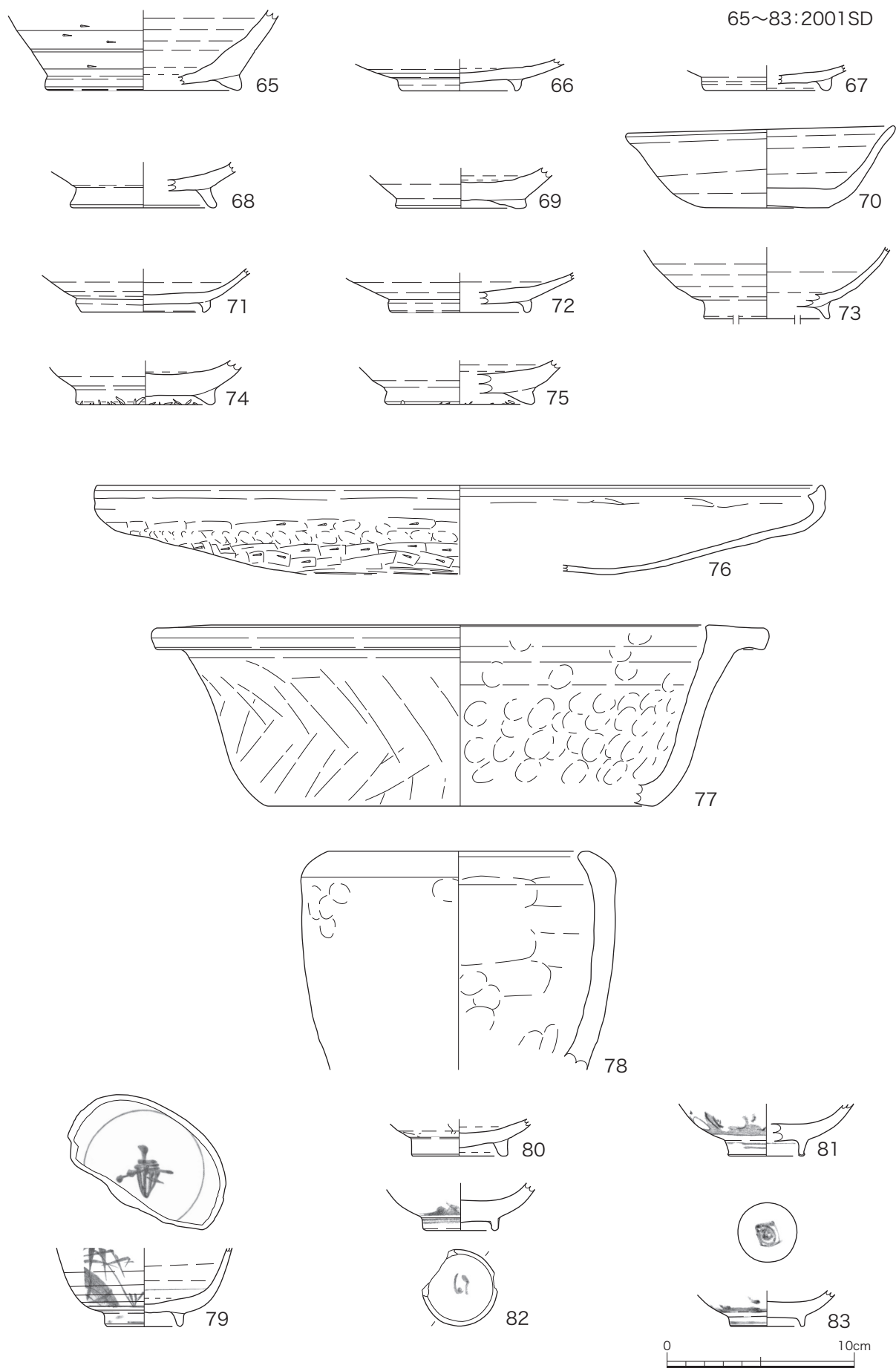


61~63:2014SI



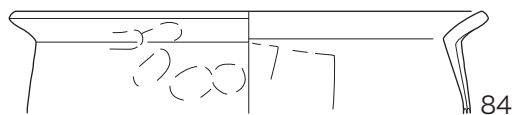
第28図 出土遺物実測図(4) ※ 縮尺は 1/3





第29図 出土遺物実測図(5) ※ 縮尺は1/3

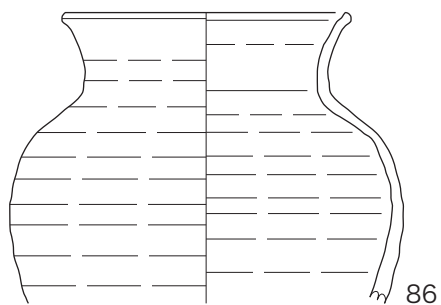
84~90:2099SU



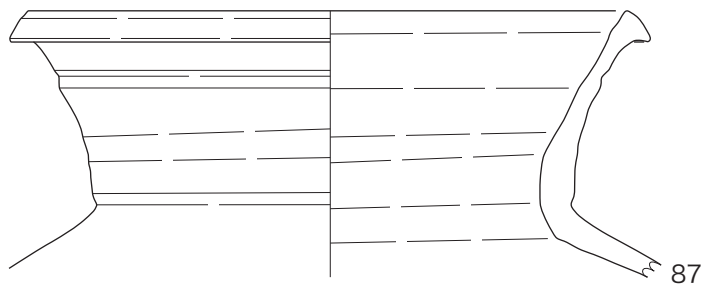
84



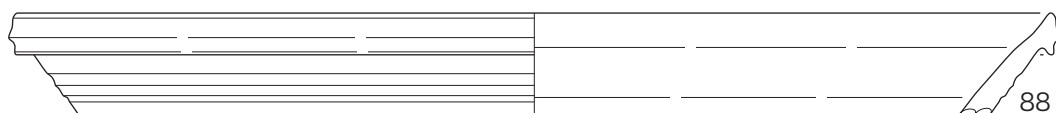
85



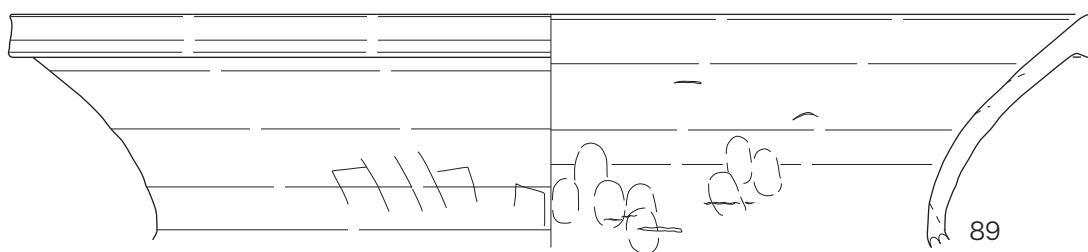
86



87



88



89

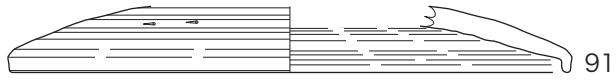


90

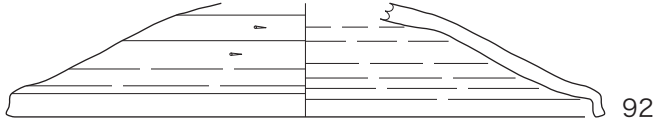


第30図 出土遺物実測図(6) ※ 縮尺は 1/3

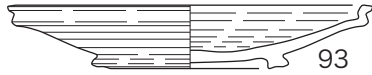
91~94:2099SU



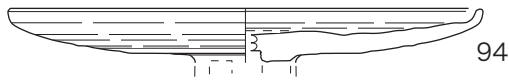
91



92



93



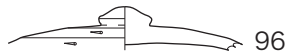
94



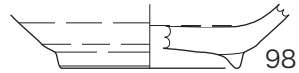
95

95:トレンチ

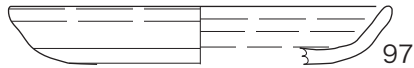
96~99:検出1



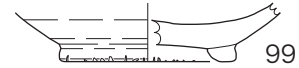
96



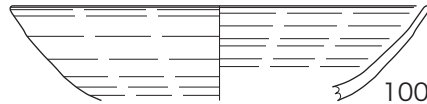
98



97

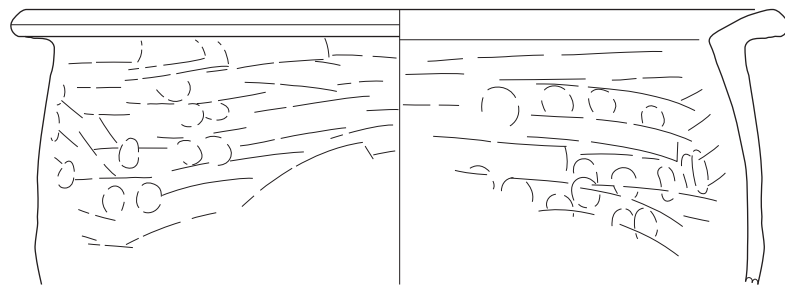


99



100

100:3002SK



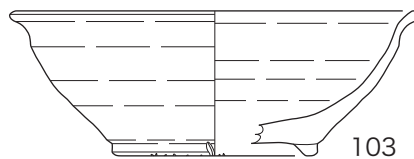
101

101:3017SK

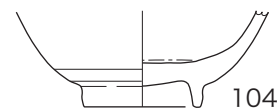
102~104:3021SK



102



103

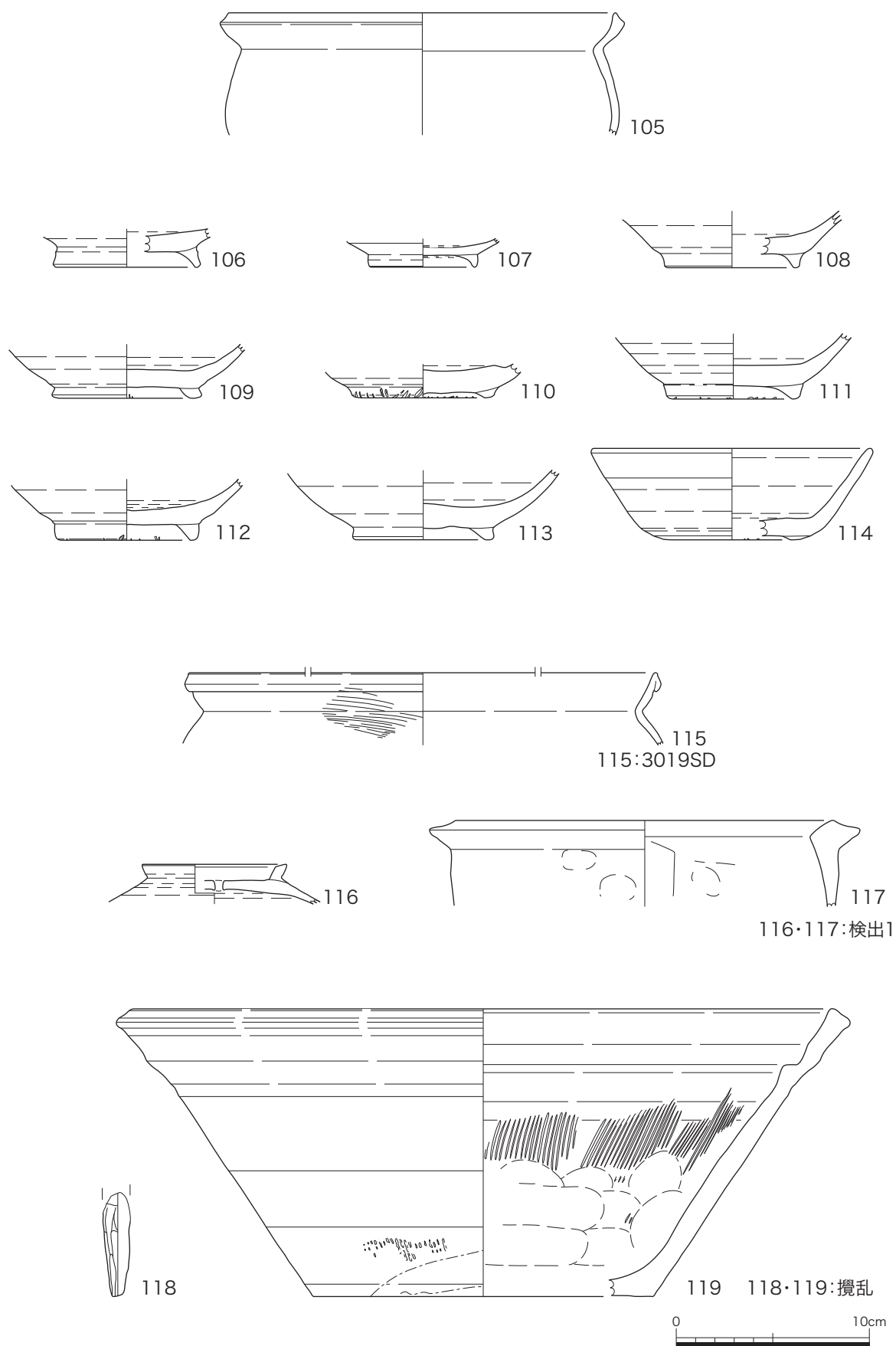


104



第31図 出土遺物実測図(7) ※縮尺は1/3

105~114:3001SD



第32図 出土遺物実測図(8) ※ 縮尺は 1/3

第 V 章 自然科学的分析

第 1 節 炭化材の樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

1. はじめに

豊川左岸の河岸段丘上に立地する野添遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行った。また、同一試料を用いて放射性炭素年代も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

2. 試料と方法

試料は、住居跡である1050SI から 1 点（試料 No. 1）、不明遺構である1150SX から 1 点（試料 No. 2）、土器集中である2099SU から 1 点（試料 No. 3）、計 3 点の出土炭化材である。放射性炭素年代測定の結果、試料 No. 1 は奈良時代～平安時代中期、試料 No. 2 と試料 No. 3 は奈良時代～平安時代前期の暦年代を示した。

各試料について、残存半径と残存年輪数の計測を行なった。残存半径は試料に残存する半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径内の年輪数を計測した。

炭化材の樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柃目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子（株）製 JSM-5900LV）にて検鏡および写真撮影を行なった。

3. 結果

同定の結果、いずれもコナラ属クヌギ節であった。また年輪の計測では、試料 No. 2 は残存半径 1.9cm 内に 5 年輪、試料 No. 3 は残存半径 1.5cm 内に 4 年輪がみられた。試料 No. 1 については年輪の計測ができなかった。同定結果を表 1 に示す。

表 1 出土炭化材の樹種同定結果一覧

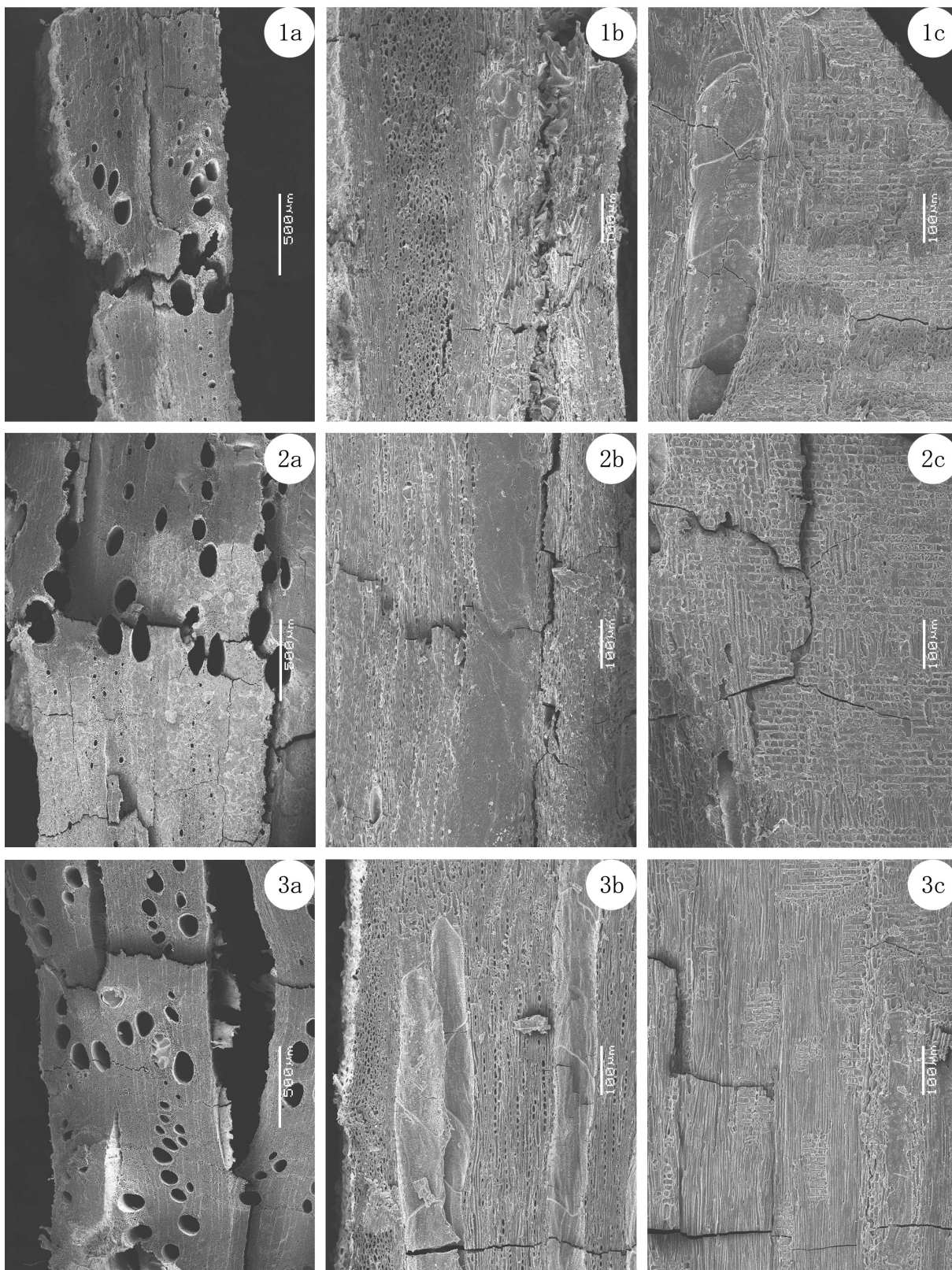
試料 No.	調査区	グリッド	出土遺構	樹種	残存半径 (cm)	残存年輪数	年代測定番号
1	13A区	1873d	1050SI	コナラ属クヌギ節	-	-	PLD-29288
2	13A区	1974a	1150SX	コナラ属クヌギ節	1.9	5	PLD-29289
3	13B区	1774c	2099SU	コナラ属クヌギ節	1.5	4	PLD-29290

次に、同定された材の特徴を記載し、第33図に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 図版 1 1 a-1 c (No. 1)、2 a-2 c (No. 2)、3 a-3 c (No. 3)

年輪のはじめに大型の道管が 1～2 列並び、晩材部では急に径を減じた、厚壁で丸い道管が、接線状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で切削などの加工はやや困難である。



第33図 出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1 a- 1 c. コナラ属クヌギ節 (No. 1)、2 a- 2 c. コナラ属クヌギ節 (No. 2)、

3 a- 3 c. コナラ属クヌギ節 (No. 3)

a : 横断面、b : 接線断面、c : 放射断面

4. 考察

住居跡である1050SIの炭化材（試料No.1）、不明遺構である1150SXの炭化材（試料No.2）、土器集中である2099SUの炭化材（試料No.3）は、いずれもクヌギ節であった。試料は焼けた建築材や燃料材の残渣などである可能性が考えられるが、詳細は不明である。クヌギ節は堅硬な樹種で建築材に適しており、燃料材としてみると火持ちが良く長時間燃焼するため、薪炭材としての利用も多い（伊東ほか，2011）。クヌギ節は、愛知県域に普通に生育する樹種であり（伊東ほか，2011）、遺跡周辺に生育していたクヌギ節が伐採利用されていたと考えられる。

引用・参考文献

平井信二（1996）木の大百科－解説編－，642p，朝倉書房。

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌，238p，海青社。

伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学，449p，海青社。

第2節 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一

Zaur Lomtadze・小林克也

1. はじめに

愛知県豊橋市に位置する野添遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。同一試料を用いて樹種同定も行われている（樹種同定の項参照）

2. 試料と方法

試料は、13A区の住居跡である1050SIから出土した炭化材（試料No.1：PLD-29288）と、不明遺構である1150SXから出土した炭化材（試料No.2：PLD-29289）、13B区の土器集中である2099SUから出土した炭化材（試料No.3：PLD-29290）の、計3点である。試料No.1と試料No.3は最終形成年輪が残っていたが、試料No.2は最終形成年輪が残っていなかった。樹種同定の結果では、いずれもコナラ属クヌギ節であった。測定試料の情報、調製データは表2のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度は同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表2 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-29288	調査区：13A グリッド：1873d 遺構：1050SI 試料No.1	種類：炭化材（コナラ属クヌギ節） 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1.0N，塩酸：1.2N）
PLD-29289	調査区：13A グリッド：1974a 遺構：1150SX 試料No.2	種類：炭化材（コナラ属クヌギ節） 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1.0N，塩酸：1.2N）
PLD-29290	調査区：13B グリッド：1774c 遺構：2099SU 試料No.3	種類：炭化材（コナラ属クヌギ節） 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1.0N，塩酸：1.2N）

3. 結果

表3に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、第34図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めない値で、今後暦年較正曲線が更新の際にはこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.2 (較正曲線データ: IntCal13) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 考察

以下、 2σ 暦年代範囲 (確率95.4%) に着目して結果を整理する。13A区の1050SIから出土した試料No.1 (PLD-29288) は776-793 cal AD (8.5%)、801-907 cal AD (51.1%)、915-968 cal AD (35.7%) で、8世紀後半～10世紀後半の暦年代を示した。これは、奈良～平安時代中期に相当する。試料No.1は最終形成年輪の測定で、測定結果は伐採もしくは枯死年代を示している。

1150SXから出土した試料No.2 (PLD-29289) は721-741 cal AD (7.9%) および766-885 cal AD (87.5%) で、8世紀前半～9世紀後半の暦年代を示した。これは、奈良～平安時代前期に相当する。試料No.2には最終形成年輪が残っていない。木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほ

表3 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

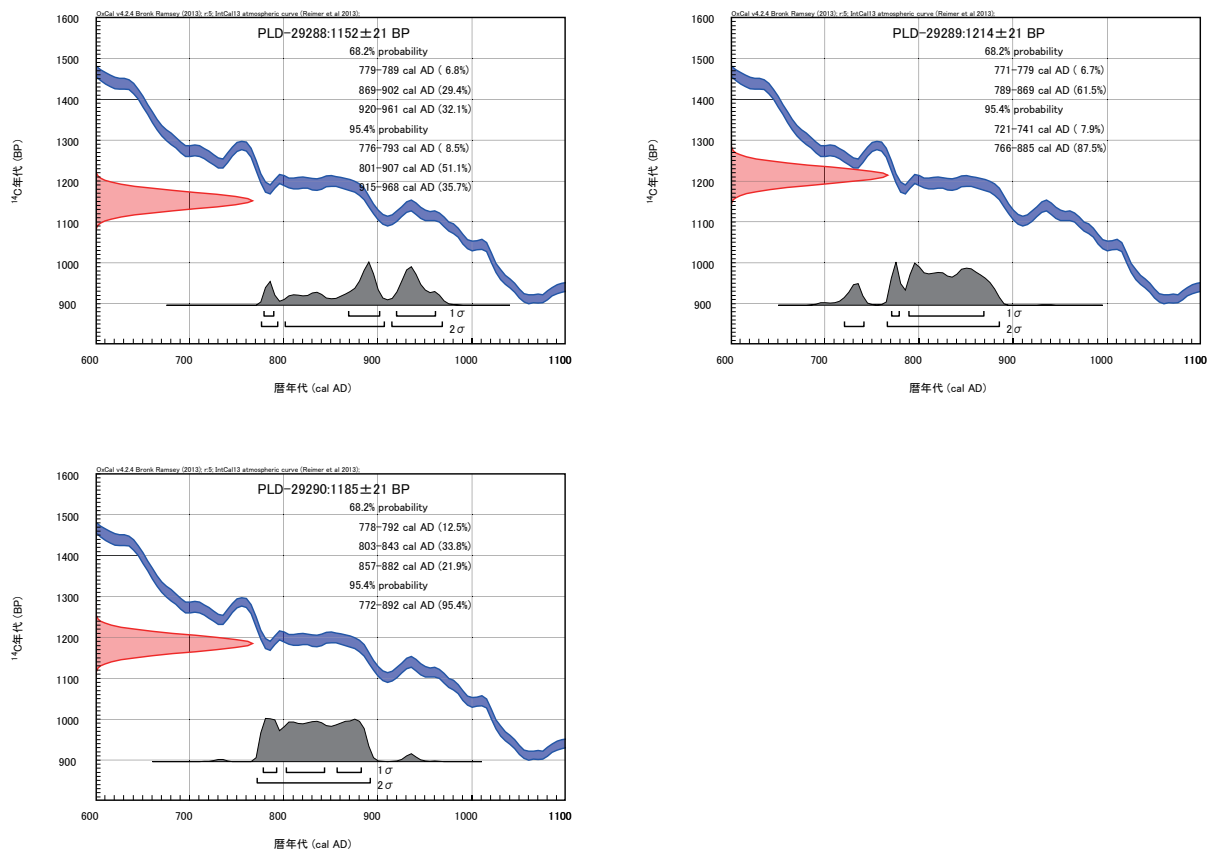
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-29288 1050SI 試料No.1	-28.47 ± 0.22	1152 ± 21	1150 ± 20	779-789 cal AD (6.8%) 869-902 cal AD (29.4%) 920-961 cal AD (32.1%)	776-793 cal AD (8.5%) 801-907 cal AD (51.1%) 915-968 cal AD (35.7%)
PLD-29289 1150SX 試料No.2	-28.41 ± 0.22	1214 ± 21	1215 ± 20	771-779 cal AD (6.7%) 789-869 cal AD (61.5%)	721-741 cal AD (7.9%) 766-885 cal AD (87.5%)
PLD-29290 2099SU 試料No.3	-28.40 ± 0.20	1185 ± 21	1185 ± 20	778-792 cal AD (12.5%) 803-843 cal AD (33.8%) 857-882 cal AD (21.9%)	772-892 cal AD (95.4%)

ど古い年代が得られる（古木効果）。試料 No. 2 は古木効果の影響を受けている可能性があり、その場合、実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりも新しい年代と考えられる。

13B 区の土器集中である2099SU から出土した試料 No. 3（PLD-29290）は772-892 cal AD（95.4%）で、8 世紀後半～9 世紀末の暦年代範囲を示した。これは、奈良～平安時代前期に相当する。試料 No. 3 は最終形成年輪を測定しており、測定結果は伐採もしくは枯死年代を示している。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1) , 337-360.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C 年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C 年代」: 3 -20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafliðason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0 -50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55 (4) , 1869-1887.



第34図 暦年較正結果

第 3 節 出土土器の胎土材料

藤根 久・米田恭子（パレオ・ラボ）

1. はじめに

野添遺跡は、豊橋市石巻本町西下地に所在する遺跡で、豊川左岸の河岸段丘上の縁辺部に立地する。調査では、古代の土坑と竪穴建物、中世の溝等が検出された。このうち、竪穴建物の可能性が考えられる遺構は 8 基以上検出された。

ここでは、野添遺跡および隣接する遺跡から出土した甕等について、土器薄片の偏光顕微鏡観察を行い、粘土の種類および砂粒組成について検討を行った。

2. 試料と方法

試料は、野添遺跡から出土した甕などが18点、比較試料の大海津遺跡（豊橋市牟呂地区）から出土した甕など 6 点、西側遺跡（豊橋市牛川町西側）から出土した甕 2 点、東側遺跡（豊橋市牛川町東側）から出土した甕などが 4 点の、合計30点である（表 4）。

分析方法としては、土器薄片の偏光顕微鏡観察を行い、胎土中の粘土および砂粒の特徴について調べた。各土器片は、土器薄片を作製して観察した（第36図、他の顕微鏡写真は付属 CD-ROM 中に収録）。薄片の作製および分類群の特徴については、藤根・米田（2015）を参照されたい。

3. 結果および考察

以下に、土器胎土薄片の顕微鏡観察結果について述べる。
胎土中の粒子組成については、微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下に、粒度組成や0.1mm 前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成、計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、表 5 における不等号は、おおまかな量比を示す。

表 4 胎土分析を行った試料と詳細

分析No.	遺跡名	器種	調査区	遺構	試料No.	時期	報告書図版名	備考	切断面胎土の色調	切断面の肉眼的特徴
1	野添遺跡	甕	A	1150SX	実No. 9	8世紀後半		三河型	黄灰色 (2.5Y 5/1)	細粒絹雲母 (白雲母) やや多く含む
2		甕	A	トレンチ	実No. 35				にぶい黄褐色 (10YR 6/3)	褐色斑または粒子目立つ
3		甕	A	1150SX	実No. 49	8世紀後半			黒褐色 (2.5Y 3/1)	細粒絹雲母 (白雲母) 含む
4		甕	B	2010S1	実No. 47	8世紀後半		三河型	灰白色 (10YR 8/2)	細粒絹雲母 (白雲母) 含む
5		甕	B	2010S1	実No. 51	8世紀後半		三河型	灰黄褐色 (10YR 6/2)	細粒絹雲母 (白雲母) やや多く含む
6		甕	B	2010S1	実No. 53	8世紀後半		三河型	灰白色 (10YR 7/1)	細粒絹雲母 (白雲母) やや多く含む
7		甕	B	2014S1カマド	実No. 99	7世紀～			明褐色 (7.5Y 5/6)	褐色粒子含む
8		甕	B	2014S1カマド	実No. 100	7世紀～			褐色 (5YR 6/6)	褐色粒子含む
9		甕	C	3001SD土層	実No. 109				黒色 (N 2/), 外面: にぶい黄褐色 (10YR 7/2)	細粒絹雲母 (白雲母) 含む
10		甕	C	3017SR	実No. 114	8世紀後半		三河型	灰褐色 (7.5YR 6/2)	細粒絹雲母 (白雲母) 含む
11		甕	A	1150SX	DOT. No. 23				灰白色 (N 8/)	細粒絹雲母 (白雲母) 含む
12		甕	A	1141S1	DOT. No. 91	8世紀前半			灰黄色 (2.5Y 7/2)	細粒絹雲母 (白雲母)・金雲母含む
13		甕	B	2010S1	DOT. No. 78			三河型	灰黄色 (2.5Y 7/2)	細粒絹雲母 (白雲母) 含む
14		甕	B	2014S1	DOT. No. 46	7世紀～			明赤褐色 (5YR 5/6)	褐色粒子含む
15		甕	B	2014S1カマド	DOT. No. 97	7世紀～			にぶい黄褐色 (10YR 5/4)	褐色粒子含む
16		甕	B	2073S1	DOT. No. 44				にぶい黄褐色 (10YR 6/4)	大型金雲母多く含む
17		甕	C	3002SR	DOT. No. 106	8世紀後半～9世紀前半			灰黄褐色 (10YR 5/2)	細粒絹雲母 (白雲母) 含む
18		甕	C		DOT. No. 99				暗灰色 (N 3/) 外面: 灰黄褐色 (10YR 6/2)	細粒質、細粒絹雲母 (白雲母) 含む
19	大海津遺跡	長胴甕	A-3地区	SX-4	遺物No. 29	7世紀中葉	大海津遺跡 (Ⅱ) 第12図	ナデ	にぶい黄褐色 (10YR 4/3)	大型砂粒、褐色粒子含む
20		長胴甕			遺物No. 30	7世紀中葉	大海津遺跡 (Ⅱ) 第12図		褐灰色 (10YR 4/1)、外面: にぶい黄色 (2.5Y 6/4)	細粒絹雲母 (白雲母) 少量含む
21		甕			遺物No. 31	7世紀中葉	大海津遺跡 (Ⅱ) 第12図		にぶい黄色 (2.5Y 6/3)	砂粒少ない、細粒絹雲母 (白雲母) 少量含む
22		長胴甕	B-2地区	SD-1	遺物No. 12	8世紀中葉	大海津遺跡 (Ⅱ) 第30図	三河型B	灰白色 (N 7/)	砂粒少ない、細粒絹雲母 (白雲母)・金雲母含む
23		丸底甕			遺物No. 39		大海津遺跡 (Ⅱ) 第31図		黒褐色 (2.5Y 3/1)	細粒絹雲母 (白雲母) 含む
24		甕			遺物No. 40		大海津遺跡 (Ⅱ) 第31図	三河型B	黄灰色 (2.5Y 4/1)	細粒絹雲母 (白雲母) 含む
25	西側遺跡	長胴甕	—	SB-27	遺物No. 200	6世紀末～7世紀前半?	西側遺跡 (Ⅱ) 第32図	ハケ	褐色 (7.5YR 4/3)	赤色粒子含む
26		長胴甕	A3区	1500SK	遺物No. 215	6世紀後半～7世紀	西側遺跡 (Ⅵ) 遺物実測図24	ハケ	明赤褐色 (5YR 5/6)	褐色粒子含む
27	東側遺跡	甕	—	SB-1	遺物No. 4	7世紀中葉	東側遺跡 (Ⅰ) 第11図		褐色 (5YR 6/6)	赤色粒子含む
28		鉢?	—	SB-5	遺物No. 20	8世紀	東側遺跡 (Ⅰ) 第13図		にぶい黄褐色 (10YR 6/3)	細粒絹雲母 (白雲母) 含む
29		長胴甕	—	SB-10	遺物No. 29	8世紀前～中	東側遺跡 (Ⅰ) 第13図		にぶい褐色 (7.5YR 7/4)	金雲母多く含む
30		長胴甕	—	SB-12	遺物No. 198	～8世紀半ば	東側遺跡 (Ⅰ) 第2図		赤褐色 (2.5YR 4/6)	赤褐色粒子含む

3.1. 微化石類による粘土材料の分類

表 5 胎土中の微化石類と砂粒物の特徴

分析No.	遺跡	器種	粒度	最大粒径	微化石類の特徴	砂粒物岩石・鉱物組成
1	野添遺跡	甕	150 μm - 500 μm	1.55mm	珪藻化石(淡水種 <i>Emotia biaroefera</i> 、 <i>Cymbella</i> 属、 <i>Emotia</i> 属多産、不明種)、骨針化石(5)、植物珪酸体化石多産、胞子化石	石英・長石類 ガラス質、雲母類 斜方輝石、斜長石(双晶)、ジルコン、複合石英類(大型)、カリ長石(パーサイト)、角閃石類
2		甕	50 μm - 150 μm	0.53mm	植物珪酸体化石、胞子化石	石英・長石類 雲母類 複合石英類(微細)、角閃石類、斜長石(双晶)、ジルコン、複合石英類(中型)
3		甕	100 μm - 480 μm	1.24mm	骨針化石(49)、植物珪酸体化石多産、胞子化石	石英・長石類 雲母類 複合石英類(大型)、斜長石(双晶)、ジルコン、ガラス質、斜方輝石、複合石英類(微細)、カリ長石(パーサイト)、角閃石類
4		甕	130 μm - 600 μm	1.03mm	珪藻化石(淡水種 <i>Emotia biaroefera</i> 、 <i>Emotia</i> 属)、骨針化石(2)、植物珪酸体化石多産	石英・長石類 ガラス質 複合石英類(大型)、斜長石(双晶)、斜方輝石、ジルコン、雲母類、カリ長石(パーサイト)
5		甕	150 μm - 580 μm	1.61mm	珪藻化石(淡水種 <i>Emotia</i> 属、陸生種 <i>Montschia amphioxys</i>)、植物珪酸体化石多産	石英・長石類 雲母類、ガラス質 複合石英類(大型)、斜長石(双晶)、カリ長石(パーサイト)、ジルコン
6		甕	130 μm - 550 μm	1.48mm	珪藻化石(淡水種 <i>Emotia biaroefera</i> 、 <i>Aulacoseira</i> 属、 <i>Cymbella</i> 属、 <i>Pinnularia</i> 属、 <i>Emotia</i> 属)、骨針化石(3)、植物珪酸体化石多産、胞子化石	石英・長石類 雲母類、複合石英類(微細)、複合石英類(大型) 片理複合石英類、ガラス質、斜長石(双晶)、斜方輝石、ジルコン
7		甕	50 μm - 130 μm	1.45mm	珪藻化石(陸生種 <i>Pinnularia borealis</i>)、植物珪酸体化石、胞子化石、植物細胞片	片理複合石英類 複合石英類、石英・長石類 ガラス質、複合石英類(微細)、角閃石類、雲母類、斜方輝石
8		甕	80 μm - 450 μm	3.03mm	植物珪酸体化石、胞子化石	石英・長石類 複合石英類(大型)、ガラス質 複合石英類(微細)、複合石英類(大型) 片理複合石英類、ガラス質、斜長石(双晶)、斜方輝石、ジルコン
9		甕	70 μm - 200 μm	0.68mm	珪藻化石(淡水種 <i>Pinnularia</i> 属、 <i>Emotia</i> 属、不明種)、骨針化石(1)、植物珪酸体化石多産、胞子化石、植物細胞片	石英・長石類 複合石英類(大型)、ガラス質、複合石英類(微細)、角閃石類、雲母類、斜方輝石
10		甕	130 μm - 750 μm	1.63mm	珪藻化石(淡水種 <i>Emotia biaroefera</i> 、 <i>Pinnularia</i> 属、 <i>Emotia</i> 属、不明種)、骨針化石(3)、植物珪酸体化石多産、胞子化石	石英・長石類 複合石英類(大型)、ガラス質、複合石英類(微細)、複合石英類(大型) 片理複合石英類、ガラス質、斜長石(双晶)、斜方輝石、ジルコン
11		甕	100 μm - 420 μm	1.38mm	珪藻化石(淡水種 <i>Emotia biaroefera</i> 、 <i>Emotia</i> 属多産、 <i>Pinnularia</i> 属、 <i>Cymbella</i> 属)、骨針化石(9)、植物珪酸体化石多産、胞子化石	石英・長石類 複合石英類(微細)、斜長石(双晶)、片理複合石英類、片麻岩質
12		甕	150 μm - 650 μm	1.45mm	珪藻化石(淡水種 <i>Emotia</i> 属、 <i>Cymbella</i> 属)、骨針化石(20)、植物珪酸体化石多産	石英・長石類 複合石英類(大型)、ガラス質 雲母類、角閃石類、斜長石(双晶)、カリ長石(パーサイト)、斜方輝石、ジルコン
13		甕	150 μm - 450 μm	1.33mm	珪藻化石(淡水種 <i>Emotia biaroefera</i>)、骨針化石(7)、植物珪酸体化石多産	複合石英類(小型)、片理複合石英類 複合石英類(微細)、複合石英類(大型)、石英・長石類 角閃石類、ガラス質、斜長石(双晶)、斜長石(微帯)、雲母類
14		甕	100 μm - 500 μm	3.30mm	植物珪酸体化石、胞子化石	複合石英類(微細)、片理複合石英類 複合石英類(大型) ガラス質、雲母類 角閃石類、斜長石(双晶)、ジルコン、カリ長石(パーサイト)、斜方輝石
15		甕	150 μm - 750 μm	2.78mm	骨針化石(1)、植物珪酸体化石、胞子化石、植物細胞片	複合石英類(微細)、片理複合石英類 複合石英類(大型) 石英・長石類、角閃石類、ガラス質、斜方輝石、雲母類、斜長石(双晶)
16		甕	150 μm - 550 μm	1.40mm	植物珪酸体化石	角閃石類 片理複合石英類、複合石英類(小型) 石英・長石類、複合石英類(微細)、複合石英類(大型)、斜長石(双晶)、斜長石(微帯)、雲母類、斜方輝石
17		甕	120 μm - 380 μm	2.03mm	骨針化石(2)、植物珪酸体化石多産	石英・長石類 複合石英類(微細)、複合石英類(大型) 複合石英類(中型)、ガラス質、雲母類、角閃石類、斜長石(双晶)、カリ長石(パーサイト)、斜方輝石、ジルコン
18		甕	80 μm - 250 μm	1.33mm	珪藻化石(淡水種 <i>Pinnularia</i> 属)、骨針化石(2)、植物珪酸体化石多産、植物細胞片	石英・長石類 複合石英類(微細)、複合石英類(中型)、複合石英類(大型)、カリ長石(パーサイト)、斜方輝石、雲母類、斜長石(双晶)、複合石英類(小型)、角閃石類、ジルコン
19	大海津遺跡	長胴甕	100 μm - 550 μm	2.46mm	骨針化石(1)、植物珪酸体化石多産、胞子化石、植物細胞片	片理複合石英類、複合石英類(小型) 複合石英類(大型)、ガラス質、複合石英類(微細)、角閃石類、斜長石(双晶)、カリ長石(パーサイト)、斜方輝石、雲母類
20		長胴甕	120 μm - 550 μm	2.86mm	珪藻化石(不明種)、骨針化石(4)、植物珪酸体化石多産、胞子化石、植物細胞片	石英・長石類 片理複合石英類、複合石英類(小型) 複合石英類(大型)、ガラス質、複合石英類(微細)、角閃石類、斜長石(双晶)、カリ長石(パーサイト)
21		甕	50 μm - 180 μm	3.68mm	珪藻化石(海水種 <i>Campylodiscus</i> 属、汽水種 <i>Navicula yurensis</i> 多産、淡水種 <i>Emotia biaroefera</i> 、 <i>Cymbella</i> 属、不明種)、骨針化石(27)、植物珪酸体化石、胞子化石、植物細胞片	石英・長石類 角閃石類、ガラス質 複合石英類(中型)、複合石英類(小型)、複合石英類(微細)、複合石英類(大型)、カリ長石(パーサイト)、雲母類、凝灰岩質、斜長石(双晶)
22		長胴甕	120 μm - 550 μm	1.20mm	珪藻化石(淡水種 <i>Emotia biaroefera</i> 、 <i>Emotia</i> 属多産、 <i>Cymbella</i> 属)、骨針化石(7)、植物珪酸体化石多産、胞子化石	石英・長石類 ガラス質、複合石英類(大型) 雲母類、角閃石類、複合石英類(中型)、斜長石(双晶)、カリ長石(パーサイト)、斜方輝石
23		丸底甕	80 μm - 500 μm	2.05mm	珪藻化石(海水種 <i>Cocconeidiscus</i> 属、 <i>Thalassiosira</i> 属、淡水種 <i>Cymbella</i> 属、 <i>Emotia</i> 属、 <i>Pinnularia</i> 属、不明種)、骨針化石(5)、植物珪酸体化石多産、胞子化石	石英・長石類 ガラス質、斜方輝石、斜方輝石、複合石英類(大型)、角閃石類、凝灰岩質、雲母類、斜長石(双晶)、カリ長石(パーサイト)、ザクロ石
24		甕	100 μm - 550 μm	1.95mm	珪藻化石(淡水種 <i>Aulacoseira penaeolae</i> 、沼沢地付着生指標種群 <i>Cymbella aspera</i> 、 <i>Cymbella</i> 属、 <i>Emotia</i> 属、不明種)、骨針化石(4)、植物珪酸体化石多産、胞子化石	石英・長石類 ガラス質、複合石英類(大型) 雲母類、斜長石(双晶)、カリ長石(パーサイト)、斜方輝石、角閃石類
25	西側遺跡	長胴甕	150 μm - 450 μm	1.96mm	植物珪酸体化石、胞子化石	片理複合石英類、複合石英類(小型) 複合石英類(大型)、複合石英類(微細)、石英・長石類、ガラス質、角閃石類、斜方輝石、カリ長石(パーサイト)、斜長石(双晶)
26		長胴甕	150 μm - 700 μm	5.45mm	珪藻化石(不明種)、植物珪酸体化石、胞子化石	片理複合石英類、複合石英類(大型) 複合石英類(微細)、角閃石類、角閃石類、石英・長石類、ガラス質、斜方輝石、斜長石(双晶)、雲母類
27		丸底甕	120 μm - 550 μm	2.10mm	植物珪酸体化石、胞子化石	複合石英類(小型)、片理複合石英類、複合石英類(微細) 複合石英類(大型)、角閃石類、石英・長石類、ガラス質、斜方輝石、雲母類、斜長石(双晶)
28	東側遺跡	鍋?	200 μm - 650 μm	2.10mm	珪藻化石(淡水種 <i>Emotia</i> 属)、骨針化石(2)、植物珪酸体化石、植物細胞片	石英・長石類 雲母類、複合石英類(大型) 角閃石類、斜方輝石、ガラス質、複合石英類(中型)、カリ長石(パーサイト)、ザクロ石
29		長胴甕	130 μm - 420 μm	0.73mm		石英・長石類、複合石英類(微細) 角閃石類、複合石英類(大型) 複合石英類(中型)、カリ長石(パーサイト)、斜方輝石、複合石英類(小型)、斜長石(双晶)、カリ長石(パーサイト)、斜方輝石、雲母類、ジルコン
30		長胴甕	100 μm - 480 μm	2.82mm	植物珪酸体化石、胞子化石	複合石英類(微細)、複合石英類(大型) 石英・長石類、複合石英類(中型)、複合石英類(小型)、角閃石類、斜長石(双晶)、カリ長石(パーサイト)、雲母類、ガラ

各土器の薄片全面を観察した結果、珪藻化石や骨針化石などの微化石類が検出された。微化石類の大きさは、珪藻化石が10～数百 μm 、骨針化石が10～100 μm 前後である(植物珪酸体化石が10～50 μm 前後)。一方、碎屑性堆積物の粒度は、粘土が約3.9 μm 以下、シルトが約3.9～62.5 μm 、砂が62.5 μm ～2mmである(地学団体研究会・地学事典編集委員会, 1981)。主な堆積物の粒度分布と微化石類の大きさの関係から、微化石類は土器の粘土材料中に含まれると考えられ、粘土材料中に含まれている植物珪酸体化石以外の微化石類の特徴は、粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれてはいるものの、土器製作の場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

土器胎土は、粘土中の微化石類により、a) 海成粘土を用いた粘土、b) 淡水成粘土を用いた粘土、c) 水成粘土、d) その他粘土、の4種類に分類された(表6)。表6において、●は極端に多い、◎は非常に多い、○は多い、△は検出、空欄は未検出であることを示す。以下では、分類された粘土の特徴について述べる。なお、淡水成粘土には海水種珪藻化石も含まれている。

表 6 土器胎土中の粘土および砂粒組成の特徴

分析No.	遺跡	器種	粘土の特徴							砂粒の特徴							鉱物の特徴							備考	その他の特徴				
			種類	放射虫化石	珪藻化石	珪藻化石	不明種	骨針化石	胞子化石	分類	片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ	石英	(双晶・黒帯 斜長石・ ペーサイト)	ジルコン	角閃石類	輝石類	雲母類			植物珪酸体化石			
1	野添遺跡	甕	淡水成		●	△	○	△	B		○					△	◎	△	△	△	○	△	○	●	三河型				
2		甕	その他						○	C		○					◎	△	△	△	△	○	△			細粒質			
3		甕	水 成					◎	△	B		○	△			△	◎	△	△	△	△	△	○	◎			砂粒多い、骨針化石多い		
4		甕	淡水成			△			B	B	○					△	◎	△	△	○		△	△	◎	◎	三河型			
5		甕	淡水成						B	B	○					△	◎	△		○	△	△	○	◎	◎	◎	三河型		
6		甕	淡水成			○		△	△	B	B					△	◎	△	△	△	△	△	◎	◎	◎	◎	三河型		
7		甕	その他				△		△	C	△	△	○			△	◎	△			◎	○	○	○			片岩類含む		
8		甕	その他							○	Ca	○	△	○			△	○	△			○	○	△	△			片岩類多く含む	
9		甕	淡水成		△	△		△	○	C	△	△	○			△	◎	△	△	△	◎	△	△	◎	◎	◎		細粒質、片岩類含む	
10		甕	淡水成		△			△	△	B	△	○	△			△	◎	△	△	△	△	◎	◎	◎	◎	◎	三河型	片麻岩類含む	
11		甕	淡水成		○		○	△	△	B		○	△			△	◎			○	△	○	◎	◎	◎	◎			
12		甕	淡水成		△		◎			B		○	△			△	◎	△	△	△	△	△	○	◎	◎	◎		砂粒多い	
13		甕	淡水成		△		○			B	B	○				△	◎	△	△	△	△	△	◎	◎	◎	◎	◎	三河型	
14		甕	その他					△	△	Ca	○	△	○				△	○	△			○	△	○				片岩類多く含む	
15		甕	水 成					△	△	Ca	○	△					△	○	△			○	△	○				片麻岩類含む、片岩類多く含む	
16		甕	その他							Ca	○	△	○	△			△	○	○	△	◎	○	△	○				片岩類多く含む、火山岩類含む	
17		甕	水 成							B		○	△				△	◎	△	△	△	△	△	◎					
18		甕	淡水成		△			△		C		△	○				△	◎	△	○	△	△	△	◎	◎	◎		細粒質	
19	大海津遺跡	長胴甕	水 成					△	△	Ca	○	△	○				△	○	△			△	△	○	ナデ		片岩類多く含む		
20		長胴甕	水 成			△		△	C	C	△	○					△	◎	△		○	△	◎	◎	◎	◎		片岩類含む	
21		甕	海～淡水成	○	○		◎	△	(C)		△	△		△			△	◎	△	△	△	○	△	△	◎	◎		汽水成珪藻化石多い	
22		長胴甕	淡水成		◎		○	△	B		○	△				△	◎	△	△		△	△	◎	◎	◎	◎	◎	三河型B	
23	西側遺跡	丸底甕	淡水成		△	○	△	△	△	B		○		△			△	◎			○	△	△	◎	◎	◎		ザクロ石含む	
24		甕	淡水成		○	○	△	△	B		○					△	◎	△	△	△	△	△	◎	◎	◎	◎	◎	三河型B	
25	東側遺跡	長胴甕	その他						Ca	○	△	○				△	○	△	△		○	△	△	△	△	△		ハケ	
26		長胴甕	水 成			△			△	Ca	○	△	○			△	○	△			◎	○	△	△	△	△	△	ハケ	
27	東側遺跡	甕	その他						△	Ca	○	△	○				△	○	△			◎	○	△	○				
28		鍋?	水 成		△			△		B		○	△				△	◎		△		○	○	○				ザクロ石含む、植物細胞片含む	
29		長胴甕	その他							B		○	△				△	◎	○	○	○	◎	△	△					
30		長胴甕	その他						△	Cb		○	◎				△	○	○	△	△	○	△	△				斜長石（たわみ）	

a) 海～淡水成粘土（1 試料）

大海津遺跡の甕（No.21）の土器胎土中には、海水種珪藻化石、汽水種珪藻化石、淡水種珪藻化石が含まれていた。汽水種珪藻化石の *Navicula yarrensensis* が特徴的に多く含まれ、利用されている粘土は海水～淡水域で堆積した粘土である。

b) 淡水成粘土（13 試料）

淡水成粘土が用いられている土器の胎土中には、淡水種珪藻化石が含まれていた。野添遺跡の土器胎土中には、淡水種 *Eunotia biareofera* や *Eunotia* 属を特徴的に多く含む粘土が利用されている。同様の粘土は、大海津遺跡の甕にも見られた。

c) 水成粘土（7 試料）

水成粘土が用いられている土器の胎土中には、不明種珪藻化石や骨針化石が含まれていた。

d) その他粘土（9 試料）

上記以外の粘土が用いられている土器の胎土中には、堆積環境を指標するような珪藻化石や骨針化石は含まれていなかった。

3.2. 土器胎土中の砂粒組成による分類

本稿で設定した分類群は、土器の胎土を構成する鉱物種や構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比ができない。そのため、各胎土中の鉱物と岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。特に、深成岩類の可能性のある複合石英類の場合、構成する鉱物の粒度が大きく、細粒質の砂粒からなる土器胎土の場合には深成岩類と推定するのが困

表 7 岩石片の起源と組み合わせ

			第1出現群						
			A	B	C	D	E	F	G
			片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ
第2出現群	a	片岩類		Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga
	b	深成岩類	Ab		Cb	Db	Eb	Fb	Gb
	c	堆積岩類	Ac	Bc		Dc	Ec	Fc	Gc
	d	火山岩類	Ad	Bd	Cd		Ed	Fd	Gd
	e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De		Fe	Ge
	f	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef		Gf
	g	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Eg	Fg	

難となる。

以下に、胎土中の砂粒組成について述べる。なお、推定した起源岩石は、表 7 の組み合わせに従って分類した。

1) 主に深成岩類からなる B 群 (15 試料)

胎土中の砂粒組成は、大型結晶で構成される複合石英類からなり、堆積岩類を僅かに含む。なお、野添遺跡の分析 No.10 は、片岩類を僅かに伴う。この岩石組成は、主に花崗岩が分布する地域の特徴と考えられ、東海地域では東濃地域～瀬戸猿投山地域、豊田市～岡崎市の東側地域に広く分布する領家花崗岩類などが起源と考えられる。

2) 主に堆積岩類からなる C 群 (6 試料)

胎土中の砂粒組成は、主に堆積岩類からなる。なお、野添遺跡の分析 No. 7 と分析 No. 9、大海津遺跡の分析 No.20 は片岩類を僅かに伴っており、Ca 群に近い組成である。

3) 主に堆積岩類と片岩類からなる Ca 群 (8 試料)

胎土中の砂粒には、主に堆積岩類や片岩類が多く含まれている。このうち片岩類は、豊川上流などの中央構造線の北側に分布する領家変成岩類の縞状片麻岩や片状ホルンフェルス、また中央構造線の南側に分布する三波川変成岩類の黒色片岩や緑色片岩が起源と考えられる。

4) 主に堆積岩類と深成岩類からなる Cb 群 (1 試料)

胎土中の砂粒には、主に堆積岩類や深成岩類が多く含まれている。

3.3. 各遺跡から出土した土器材料の特徴

土器薄片の偏光顕微鏡観察を行った結果、粘土中に含まれていた微化石類により、粘土は、a) 海～淡水成粘土 (1 試料)、b) 淡水成粘土 (13 試料)、c) 水成粘土 (7 試料)、d) その他粘土 (9 試料) の 4 種類に分類された。

一方、砂粒組成は、岩石種の組み合わせに従って、1) 主に深成岩類からなる B 群 (15 試料)、2) 主に堆積岩類からなる C 群 (6 試料)、3) 主に堆積岩類と片岩類からなる Ca 群 (8 試料)、4) 主に堆積岩類と深成岩類からなる Cb 群 (1 試料) の 4 種類に分類された。

以下では、各遺跡における土器材料の特徴について述べる。なお、各遺跡の器種ごとに、砂粒組成および粘土の種類について表 8 にまとめた。

【野添遺跡】

砂粒組成が深成岩類からなる B 群で淡水成粘土を用いた胎土は 8 試料と多く、同じく B 群で水成粘土を用いた胎土は 2 試料である。これらの胎土は、灰色系の色調を呈し、細粒絹雲母 (白雲母) を含む。

砂粒組成が堆積岩類からなる C 群で、淡水成粘土を用いた胎土は 2 試料である。これらの胎土は、明褐色あるいはにぶい黄橙色などの色調を示し、細粒絹雲母 (白雲母) を含む。なお、分析 No. 7 と No. 9 の胎土中には片岩類が含まれていた。

砂粒組成が堆積岩類と片岩類からなる Ca 群で、その他の粘土や水成粘土を用いた胎土は 4 試料である。これらの胎土は、橙色あるいはにぶい黄橙色の色調を示し、褐色粒子を含む。

【大海津遺跡】

砂粒組成が深成岩類からなる B 群で、淡水成粘土を用いた胎土は 3 試料である。これらの胎土は、灰色系などの色調を呈し、細粒絹雲母（白雲母）を含む。なお、いずれの胎土も淡水種珪藻化石を特徴的に多く含む。

砂粒組成が堆積岩類からなる C 群で、海～淡水成粘土または水成粘土を用いた胎土は各 1 試料である。これらの胎土は、にぶい黄橙色またはにぶい黄色を呈し、細粒絹雲母（白雲母）を含む。

【西側遺跡】

砂粒組成が堆積岩類と片岩類からなる Ca 群で、その他の粘土や水成粘土を用いた胎土は 2 試料である。これらの胎土は、橙色あるいは赤褐色を呈し、赤色または褐色粒子を含む。

【東側遺跡】

砂粒組成が深成岩類からなる B 群で淡水成粘土を用いた胎土で、淡水成またはその他粘土を用いた胎土は各 1 試料である。これらの胎土は、にぶい黄橙色またはにぶい橙色を呈し、細粒絹雲母（白雲母）または金雲母を含む。

砂粒組成が堆積岩類と片岩類からなる Ca 群で、その他の粘土を用いた胎土は 1 試料である。この胎土は、橙色を呈し、赤色粒子を含む。

砂粒組成が堆積岩類と深成岩類からなる Cb 群で、その他粘土を用いた胎土は 1 試料である。この胎土は赤褐色を呈し、やや赤味の強い赤褐色粒子を含む。

3.4. 平安時代の土器材料の特徴

野添遺跡から出土した土器は、主に 7 世紀～8 世紀の土器であり、三河型と呼ばれる土器群が含まれている。多くの土器は、砂粒組成が深成岩類からなる B 群で淡水成粘土を用いた胎土が多く、三河型はその典型的な材料の特徴を示す。こうした傾向は、新城市の加原遺跡の三河型鍋においても共通して見られる特徴である（藤根・米田，2015）。なお、砂粒組成が堆積岩類と片岩類からなる Ca 群、堆積岩類からなる C 群（片岩類を僅かに含む）も見られ、片岩類を含む点において豊川流域の砂粒組成を示す。

大海津遺跡の分析 No.21 の甗の胎土は、砂粒組成が堆積岩類からなる C 群で、海～淡水成粘土を用いた胎土であるが、汽水種珪藻化石 *Navicula yarrensii* を特徴的に多く含み、角閃石類も多い。これは、岩倉市の御山寺遺跡の清郷型鍋（藤根・米田（2015）の分析 No.12）の胎土と類似しており、西尾市旧吉良町の斑れい岩類分布域の特徴である可能性が考えられている（藤根・米田、2015）。なお、汽水種珪藻化石 *Navicula yarrensii* は、熱田海進（14 万年～10 万年前）に伴う海～淡水成堆積物である可能性が考えられる。

東側遺跡の分析 No.30 の長胴甗は、堆積岩類と深成岩類からなる Cb 群で、その他粘土を用いた胎土であり、在地材料が用いられている可能性はあるが、他の土器の胎土材料の特徴とは異なっている。

表 8 各器種の砂粒組成と粘土の種類

砂粒	粘土	野添遺跡	大海津遺跡				西側遺跡	東側遺跡			合計
		甕	丸底甕	甗	長胴甕	甕	長胴甕	甗	長胴甕	鍋?	
B (深成岩類)	その他								1		1
	水 成	2								1	3
	淡水成	8	1		1	1					11
C (堆積岩類)	その他	2									2
	水 成				1						1
	淡水成	2									2
	海～淡水成			1							1
Ca (堆積岩類&片岩類)	その他	3					1	1			5
	水 成	1			1		1				3
Cb (堆積岩類&深成岩類)	その他								1		1
合 計		18	1	1	3	1	2	1	2	1	30

4. おわりに

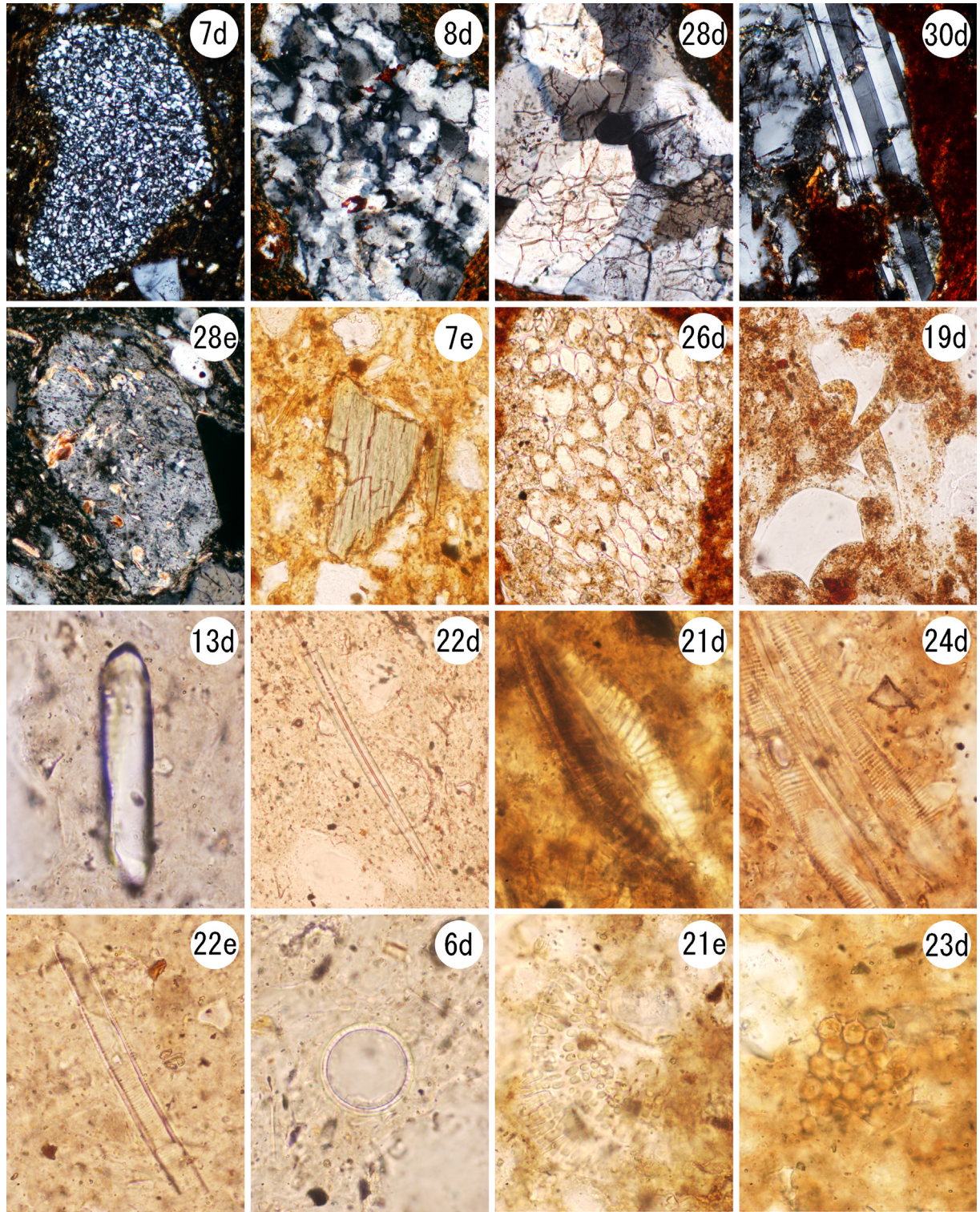
野添遺跡から出土した甕などと、比較試料の大海津遺跡や西側遺跡、東側遺跡から出土した甕などについて、土器薄片の偏光顕微鏡観察を行った。その結果、粘土中に含まれていた微化石類により、粘土が4種類、砂粒組成が4種類に分類された。これらの土器胎土は、一部の土器を除いて在地的な砂粒組成を示すと理解された。

引用文献

地学団体研究会・地学事典編集委員会編（1981）増補改訂 地学事典，1612p，平凡社。

藤根 久・米田恭子（2015）第1節 古代土師器甕の胎土分析と年代測定，愛知県埋蔵文化財センター編「第194集 加原遺跡」：58-78，公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター。

牧本 博・山田直利・水野清秀・高田 亮・駒澤正夫・須藤定久（2004）20万分の1地質図幅「豊橋及び伊良湖岬」，地質調査総合センター。



第36図 胎土の偏光顕微鏡写真

(スケール ; 7 d-28e, 26d: 100 μ m、 7 e, 19d, 22d: 50 μ m、 13d, 21d-23d: 20 μ m)

7 d. 複合石英類 (微細) 8 d. 複合石英類 (中型) 28d. 複合石英類 (大型) 30d. 斜長石 (双晶)

28d. カリ長石 (バーサイト) 7 e. 角閃石類 26d. ガラス質 19d. ガラス質

13d. ジルコン 22d. 骨針化石 21d. 珪藻化石 *Navicula yarrensii*

24d. 珪藻化石 *Cymbella aspera* 22e. 珪藻化石 *Eunotia* 属 6 d. 珪藻化石 *Aulacoseira* 属

21e. 珪藻化石 *Campylodiscus* 属 23d. 珪藻化石 *Coscinodiscus* 属 / *Thalassiosira* 属

第4節 鉄製 U 字形刃先の解析

— X 線 CT 断面画像による —

日鉄住金テクノロジー（株）八幡事業所

鈴木瑞穂

1. 調査方法（X 線 CT による断面画像測定）

使用機器：ニコンインステック社製 STH450

X 線 CT 装置を用いて、U 字形刃先の縦・横・厚さ 3 方向の断面画像を 0.1mm 間隔で撮影した。これらの画像をもとに断面の形態や内部の金属鉄の残存状況、錆化に伴う割れの状態などを精査し、刃先の製作法を検討した。

2. 調査結果

Photo. 1 に U 字形刃先の外観写真（左上）、および X 線 CT による三次元画像（右上）と断面像（中～下段：a～i）を示した。風呂部や耳部先端、刃部の外側面は錆化が進んでいるが、内部の比較的厚手の部分では、広範囲に金属鉄（明白色部）が残存する。

今回の調査では、風呂部の製作法を調査するため、特に耳部の横断面を細かく観察した（b～H）。内側の V 字溝部分から断面中央部にかけて、明瞭な鍛接の痕跡（鍛打により展伸した形状の非金属介在物や、接着部の錆化に伴う隙間など）は、各断面ともみられない。錆化に伴って層状の割れが生じている箇所もあるが、その多くが V 字溝の中央からずれた位置にある。U 字形に鉄器を成形する前の鉄素材に折り返し鍛錬が施されており、その鍛接線に沿って腐食が進行した可能性が高い。

また刃先表面には円形の凸部が数か所みられる。これらの箇所は断面では層状の隙間が観察されるため、錆膨れと判断される。

3. 考察・結論

U 字形刃先の風呂部（内側側面の V 字溝）の成形に関しては、大きく分けて、側面を鑿で切る技法と板材を折り返しして成形する技法とが提示されている。

またこれまでのところ、古代（7 世紀後半以降）の U 字形鋤先は福島県滝原前山 C 遺跡^(注1)、群馬県西野原遺跡^(注2)、栃木県金山遺跡^(注3)、富山県友杉遺跡^(注4)出土品などで、断面観察が実施されている。このうち V 字溝部分の金属鉄の残存状況が最も良い金山遺跡から出土した製品（耳部破片）の調査結果でも、V 字溝の合わせ目から中央に沿って、折り返し鍛接された跡はみられない（写真①②）。また素地部分はほとんど炭素を含まないフェライト（Ferrite： α 鉄）単相の組織で、表層は少量黒色層状のパーライトが析出する（写真③④）。これらの特徴から、この鋤先破片は軟鉄材を U 字形に鍛打成形後、鑿によって溝を切って風呂部を作り、浸炭処理をした可能性が指摘されている。

上述したように、野添遺跡出土 U 字形刃先の X 線 CT による断面画像を撮影しての調査でも、板材の折り返しで生じる鍛接痕が明瞭にはない。金山遺跡出土品と同様に、軟鉄材の側面を鑿で切って V 字溝を作り出した可能性が考えられる。

ただし現時点では、U 字形刃先の分析的な調査例は非常に限られている。古墳時代～古代の U 字形刃先の製作技法について検討するためには、今後も各地域の出土品の分析調査を通して技術的特徴を精査していく必要がある。

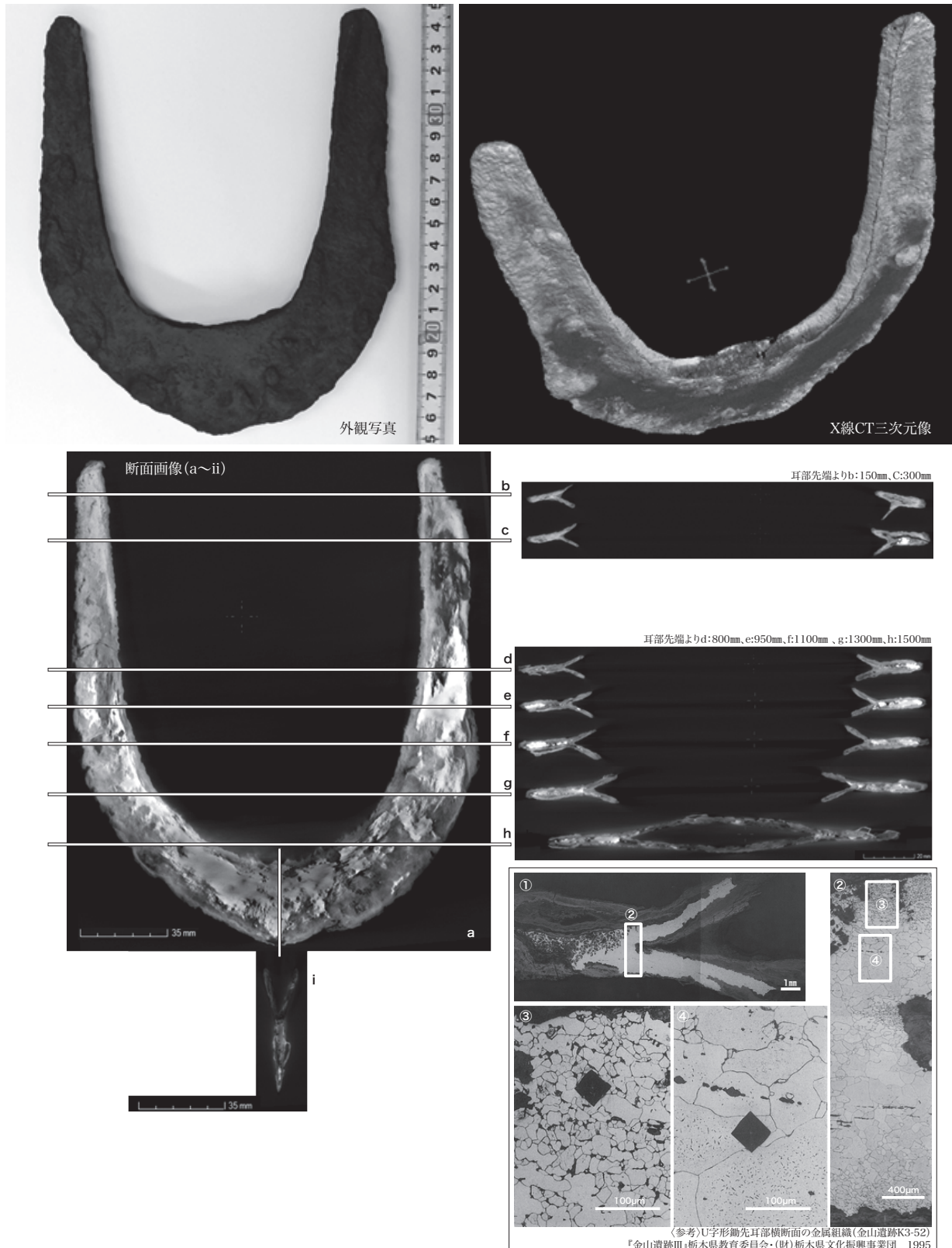
(注)

(1) 『矢吹地区遺跡発掘調査報告 4』福島県教育委員会・(財) 福島県文化センター 1989

(2) 『西野原遺跡(5)(7) 第2分冊－飛鳥・平安時代以降編－』(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010

(3) 『金山遺跡Ⅲ』栃木県教育委員会・(財) 栃木県文化振興事業団 1995

(4) 『友杉遺跡発掘調査報告』(財) 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2010



第37図 U字形刃先画像

第 VI 章 総括

本報告書では、平成25年度に愛知県豊橋市において発掘調査した野添遺跡について、整理報告作業を行った。ここでは、調査によって得られたいくつかの情報から、その意味するところを提示しまとめてみたい。

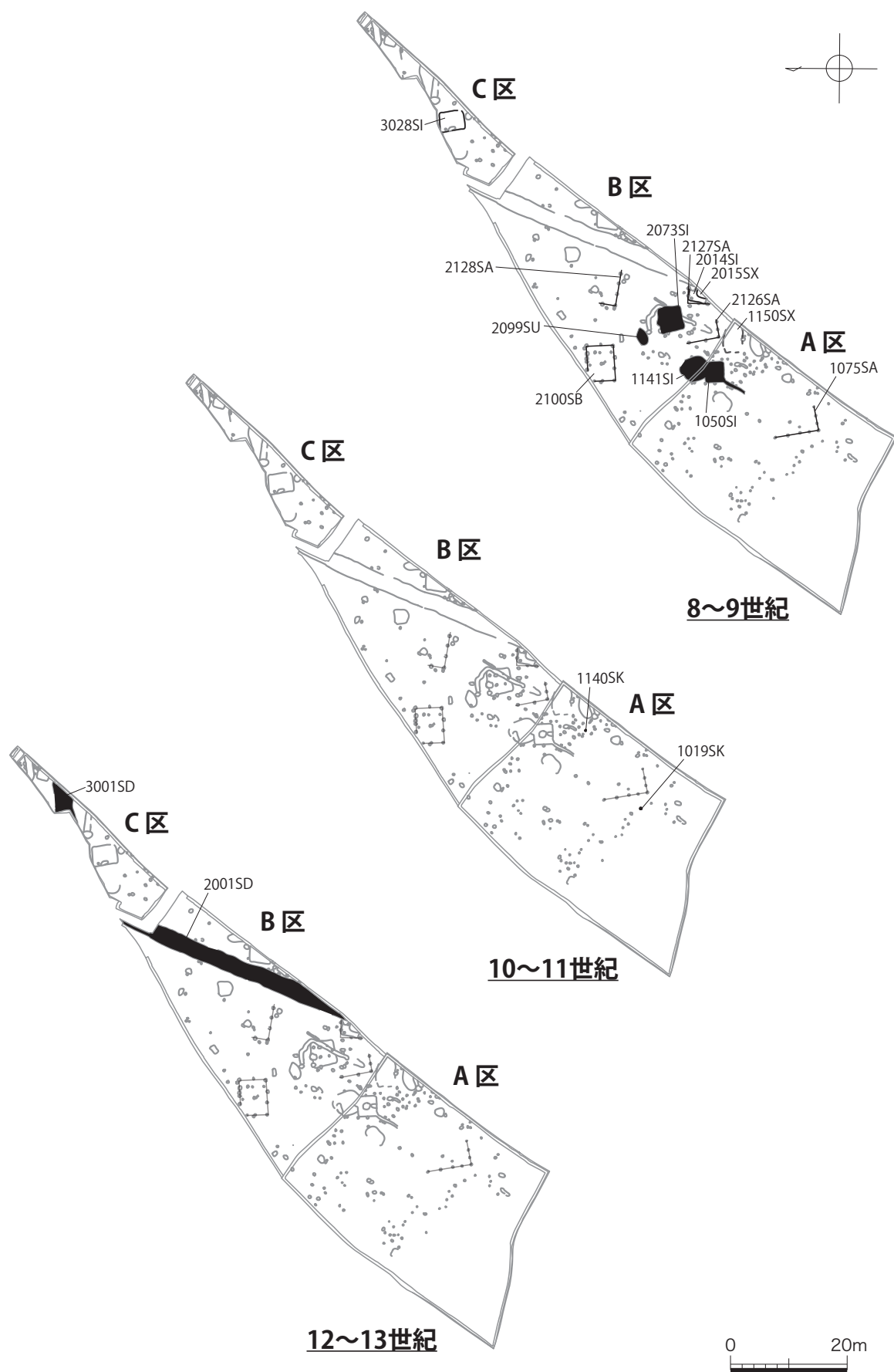
発掘調査 調査は、愛知県建設部による（主）東三河環状線道路改良工事に伴う事前調査として、平成25年11月から平成26年3月にかけて実施された。調査面積は2000m²で、これを三分割してA・B・C区とし、南西側（A区）から北西側（C区）へと順に実施した。

立地 遺跡は豊橋市北東部に所在し、豊川左岸の河岸段丘上に立地する。調査区は河岸段丘上の縁辺部に位置し、南側及び東側は神田川沿いの低地へと落ちる段丘涯となっている。調査地点の南東側約200mの位置には、神田川沿いの低地に弥生時代中～後期、中世を主体とした東下地遺跡が展開する。遺跡の東側を南流する神田川は、野添遺跡の南西約2kmの地点で豊川と合流する。この神田川は、本坂峠付近に流れを発生し西流するが、野添遺跡の北東約200mの位置で南に流れを変える。本坂峠付近から周辺の流れを集め、台地に打ち当たって方向が変わるため、この流路は野添遺跡東側に度重なる自然災害を起こして谷を開析しながら、低地を広げていったものと思われる。野添遺跡は、そうした河川と低地を東に臨む台地の縁辺部に、立地する。

行政区画 まず、野添遺跡が位置する地点とその周辺は、どのような行政的帰属関係に有るのかについて述べてみたい。上述したように、遺跡は自然環境においては台地縁辺部に立地するが、現在の行政区画では愛知県豊橋市石巻本町に位置する。調査地点は、律令制以降の旧国郡別では、三河国八名郡に属した。八名郡は、豊川中流域の南または東側（左岸）に所在した。ただしこの郡は、明治期以降に繰り返された町村合併により、昭和31年に山吉田村が編入されるのを最後として、住所としての区画は消滅している。

野添遺跡の変遷 今回の発掘調査では、A・B・C区の遺構については、覆土を除去した後に各時代の遺構面が検出されたわけではなく、基盤層で検出を行った。調査区内では、竪穴建物、掘立柱建物、土坑、ピット、溝、土坑列、遺物集中、その他が検出された。この中で、居住域が想定できる建物跡等の遺構は、出土遺物から判断すると古代、中世といった時期が想定できる。ただし、基本層序、遺構の概要についての説明部分でも述べたように、調査地点は大部分で、緩斜面に平坦地を設けるための造成事業時が行われたため、この時点で古代以前の自然堆積土層まで全面的に削平を受けている。旧地形の中で残ったのは、凹地など削平面より低い部分のみであった。したがって検出された遺構は、削平面より低い部分に所在したものか、削平面より掘削深度が深かったものであり、基底部のみが残存しているものがほとんどであった。こうした事態は、規模、共伴遺物など観察される情報が乏しくなるため、掘削時期、掘削理由の不明瞭な遺構が多かった。調査によって得られた情報から遺跡の変遷を概観すると、第37図のような状況が想定される。

8～9世紀 この段階の遺構では、B区南東側を中心として、竪穴建物跡1050SI、1141SI、2010SI、2073SI、遺物集中2099SU、不明遺構1150SXなどが出土遺物から確認できる。さらにこ



第38図 主要遺構変遷図

これらの遺構の周辺では、造成行為による削平により、基底部のみの検出で遺物による時期が確認できないながら、近似した規模、形状、基軸方向などから、2014SI、2073SI、3028SI が竪穴建物跡と考えられ、同様に1075SA、2100SB、2126SA、2127SA、2128SA は、掘立柱建物跡の可能性が考えられる。竪穴建物は、いずれも後世の削平などにより基底部のみの残存であり、多くは8世紀を主体とした須恵器が確認され、柱穴は明確ではなかった。北側にてカマドと思われる焼土、袖の基底部が確認できるものも検出されたが、いずれも残存部は浅く、明確な壁溝、貯蔵穴等も見られなかった。各遺構の配置としては、掘立柱建物跡である2100SBの南側にて、10m以上の空間を挟んで、竪穴建物跡、掘立柱建物跡の可能性を持つ遺構が並んでおり、その空間には遺物集中2099SUが位置する。各遺構の基軸方向は、東西、南北にほぼ方向が合致する2100SBを除いて、約10°前後西に振るものが多い。すなわち、方位に合わせた掘立柱建物2100SB、やや離れて近似する規模、形状、基軸方向の竪穴建物や掘立柱建物が同時期に存在していた可能性も考えられる。こうした遺構が検出され、8～9世紀の遺物が確認できたため、この時期に調査地点が居住域であった可能性が提示できることとなった。これらの遺構の出土遺物に目を向けると、竪穴建物の中には1141SIのように、鉄製U字形刃先が床面直上から出土したものも存在した。この鉄製U字形刃先は、X線CT断面画像による解析では、板材の折り返しで生じる鍛接痕が明瞭にないことが判明した。制作技法としては、耳端部の切れ込みが不均等なことも合わせると、鑿を使って割ったもので、折り込んで作った可能性は低いことが想定できた。大きさは、一般的なサイズよりやや小さく、小型品よりはかなり大きいいため、最初から実用品として作られたものではなく、特殊品の可能性も含まれる。1150SXからは、仏具の組み合わせも想定される須恵器が出土し、遺物集中2099SUでは装飾意識の強い大型の甕や脚付き盤が出土している。したがってこれらの遺物からは日常雑器とは違う特殊な使用、公共性も想定されるため、被支配者層の居住空間というよりも、支配者側に関連する建物施設、居住空間であったことも、可能性の一つとして提起しておきたい。

10～11世紀 調査地点は、先述したように緩斜面に平坦地を設けるための造成事業が行われたため、古代以前の自然堆積土層まで大部分で削平を受けている。したがって、傾斜が急になるA区南側ほど、削平、盛土、耕作土搬入などが激しい。調査区全体として、この時期の出土遺物はわずかだが、遺構に伴うものは1019SK、1140SK、2001SD上層、3001SD上層などであった。土坑の2例はいずれもA区で、このうち1019SKは傾斜が急になる落ち際に位置する。溝からの出土遺物は、いずれも上層からの出土で、これらの溝の下層からは中世と考えられる遺物が出土しているため、溝の掘削時期を示す遺物とは考えにくく、二次的な混入品としての可能性が高い。遺構出土以外には、この時期のものはトレンチ出土、検出作業中の出土遺物として、いずれも灰釉陶器がわずかに確認されたが、集中する地点などは見られなかった。こうした状況から、8～9世紀の居住空間以降、10～11世紀に継続して同様の利用がされていたとは考えにくい。

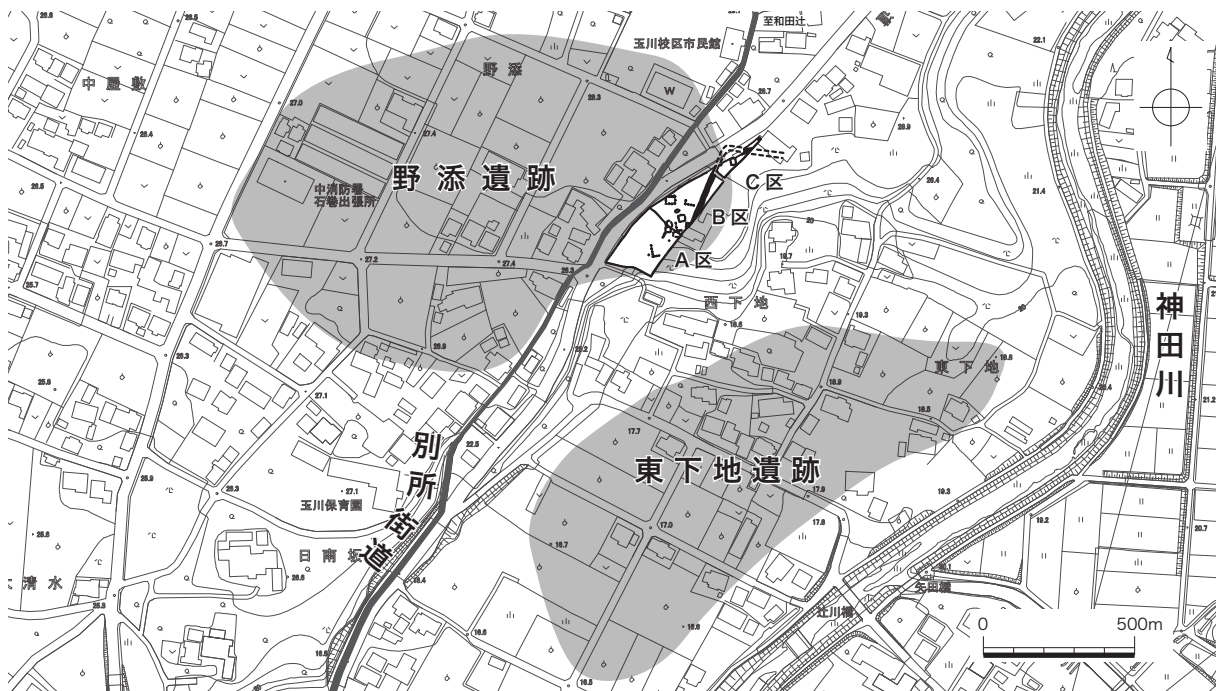
12～13世紀 出土遺物からこの時期と判断できる遺構は、B区、C区にて規模の大きい溝が確認された。当該期の遺構面は削平によって消失しているため、削平面より深く掘削された大溝のみ検出することができた。B区で43mにわたって検出された南北方向の2001SDと、C区で8mにわたって検出された東西方向の3001SDは、検出幅、深さ、断面形態、土層堆積状況などが一致しているため、

同時期に掘削された関連遺構の可能性が高い。仮に一体だとするならば、B区とC区の北側調査区外にて、方向を変えるか連結されているものと思われる。遺構の項でも述べたが、断面観察では2001SD、3001SDともに、流水、滞水などの痕跡は観察されず、下層の埋伏に偏りが見られ、東側からの堆積が顕著であった。この偏りは、溝の掘削時に東側に掘削土を排出して盛ったことが想定されるが、防御、区画などいずれの目的にしても土塁などは内側に設けることが通常である。したがって、この溝は東側の段丘落ち際を防御、区画などするために掘削されたことが想定されるのだが、東側は現況の平坦地が約30mほどで、そこから先は標高差約10mほどの段丘崖で、神田川によって形成された沖積低地まで落ちている。この時期の地形が現況と大きく変わりが無ければ、わずか30m幅の狭い範囲を区切るために大規模な普請を行ったことになるため、その目的が注目される。この2001SD、3001SD両溝からは、古代～近世にかけての新旧の遺物が混在することから、長期間にわたり凹みが残っていた可能性が高く、繰り返しさらいながら利用されていたことも想定できる。

胎土分析 今回の調査では、野添遺跡から出土した古代の土器について、豊橋市の他遺跡についても比較資料の提供が受けられたため、三河型と呼ばれる土器甕を主体として、第V章第3節のように胎土分析を行った。土器の粘土の種類および砂粒素性について検討した結果では、多くは砂粒素性が深成岩類からなり、淡水成粘土を用いた胎土が多く、これまで新城市、豊橋市の出土資料を分析して得られた結果と共通した、在地的な特徴が見られた。

東下地遺跡との相違 東下地遺跡は、野添遺跡調査地点の南東側、標高差約10mの段丘崖直下に位置し、平成23～24年には愛知県埋蔵文化財センターによって総計10,904m²が調査された。その結果、弥生時代以降の水田、中世の土壇墓、掘立柱建物跡などが確認されている。同じ神田川右岸に位置する野添遺跡と東下地遺跡は、段丘崖の上と下の違いはあれど近接した遺跡である。ただし、遺跡の画期としては、両遺跡の調査結果は連動性を判断できる材料が得られていない。野添遺跡では、東下地遺跡で検出された弥生時代以降の水田について、関連性が考えられるような遺構、遺物は見られない。また野添遺跡では8～9世紀という時期には、支配者側に関連する建物施設、居住空間であったことも、可能性の一つとして考えられる内容であったが、東下地遺跡の調査では、同時期の明確な関連性は見られない。野添遺跡では後世に造成されて削平が広くみられ、東下地遺跡では神田川が度重なる水害をもたらす「暴れ川」であったことも考えあわせると、連動性が無かったのではなく、判断できる材料が消滅した可能性も考えられる。周辺地域での、調査例の増加が待たれるところである。

交通環境 段丘崖の落ち際に位置する野添遺跡は、どのようなことを優先した結果、古代の居住域、中世の囲郭地点として選ばれたのであろうか。今回の野添遺跡調査地点は、第38図に示すように、近世以前の主要地方道であった「別所街道（中世の鎌倉街道と多くは重なる）」に沿っている。別所街道は、現在の愛知県豊橋市と長野県飯田市、伊那市方面につながる街道で、豊川を挟んで北側に併行する伊那街道とともにこの地方の重要な陸上交通路であった。この別所街道を北側に約800m進むと、東西方向に通る「姫街道（古代の二見道と多くは重なる）」と交わる。この姫（二見）街道、別所（鎌倉）街道は、度々ルートを変えた古代の東海道とつながる。したがって古代、中世の野添遺跡は、交通至便な場所であったことは疑う余地はないであろう。

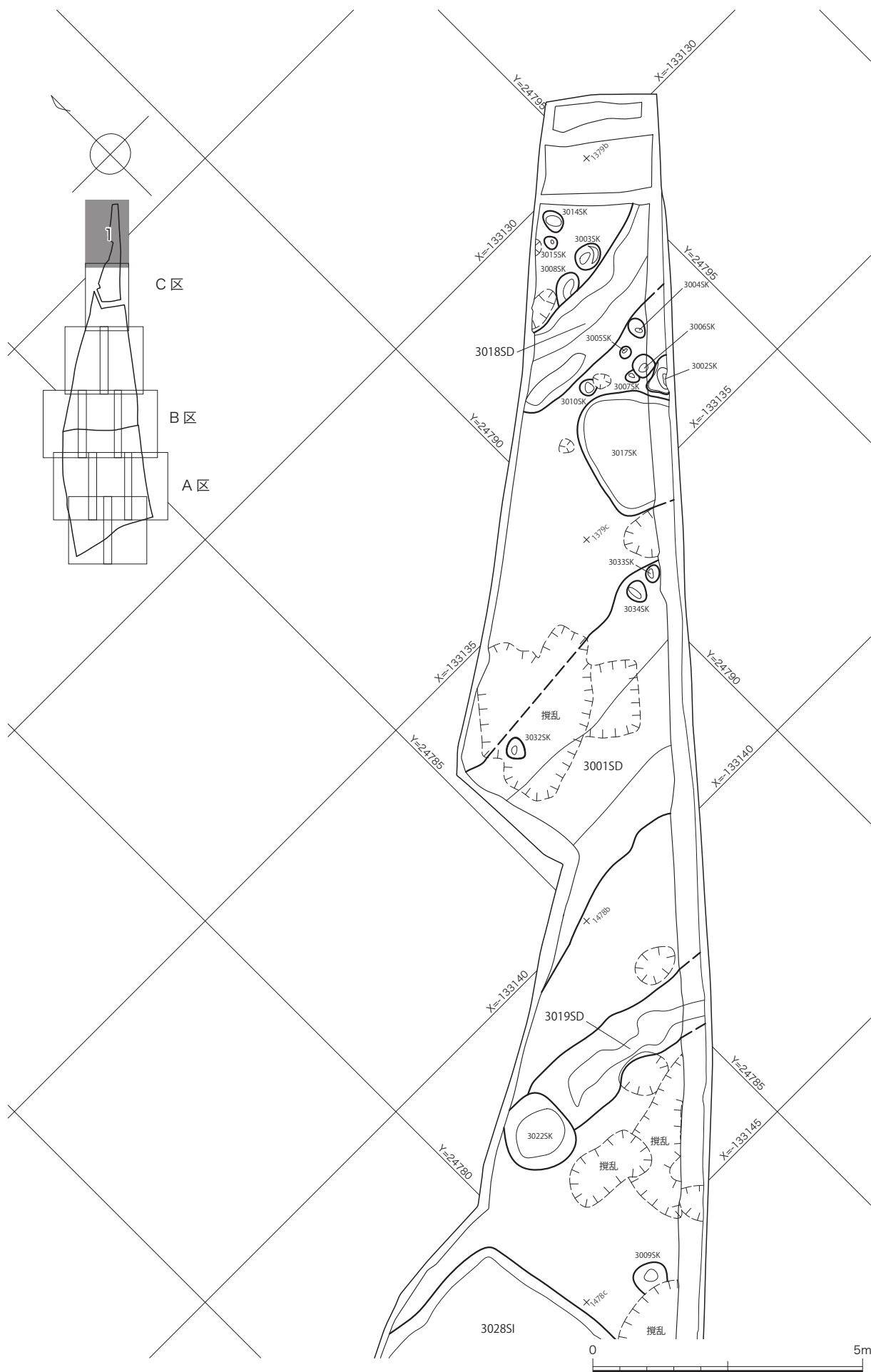


第39図 調査地周辺図

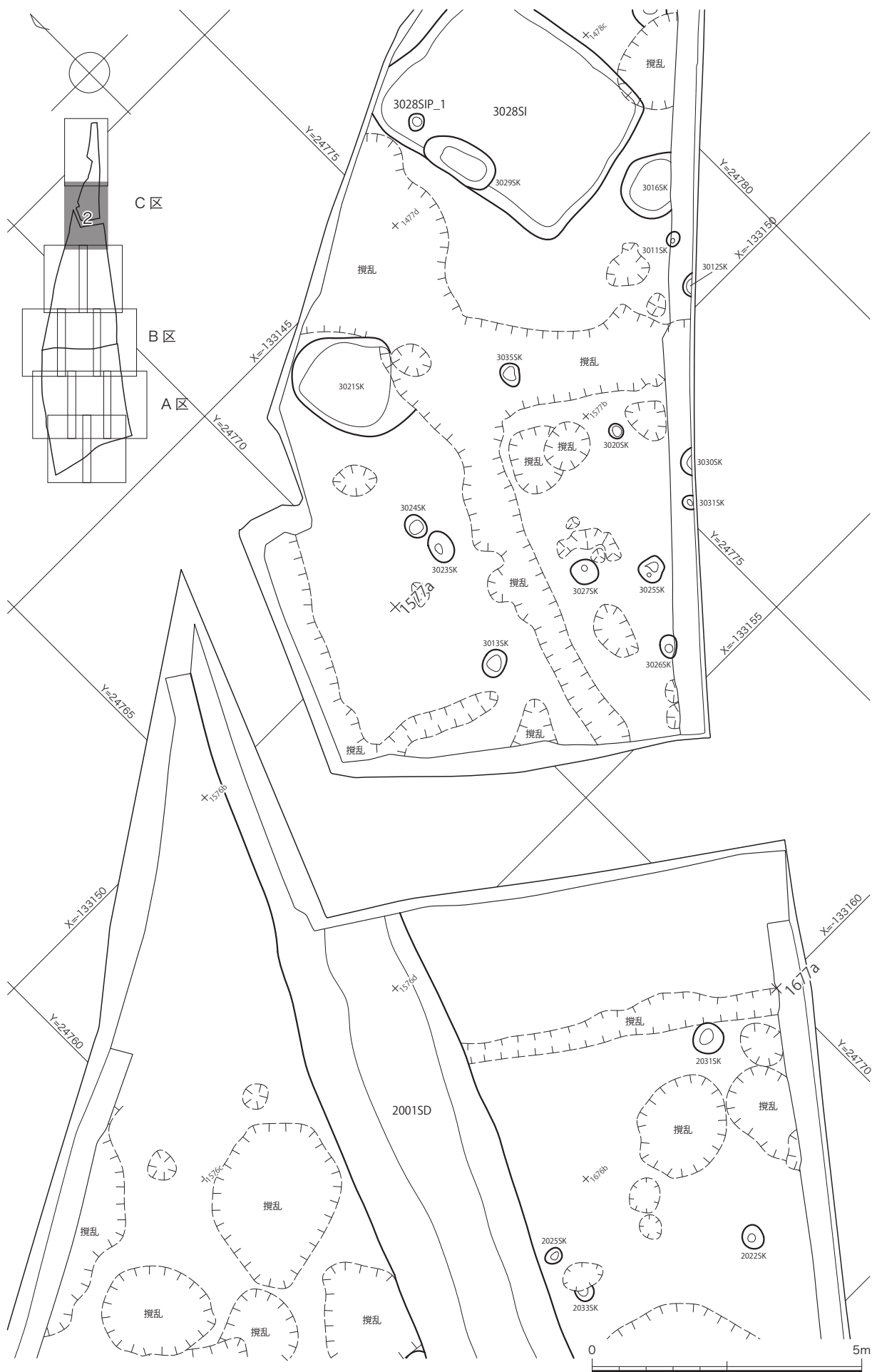
結語 最後に、調査によって得られた成果をふまえて、野添遺跡の歴史的 position 付けについて、今後の課題と問題点を考えてみる。野添遺跡に近接する玉川面では、古代に該当する集落の調査例がない。神田川、三輪川を挟んだ南対岸の牛川面では、西浦遺跡、西側遺跡、浪ノ上遺跡などで古代の堅穴建物跡が確認されているため、これらの遺跡と野添遺跡との関連性を明らかにしてゆく必要があるであろう。律令体制における八名郡は、郡府の比定地も判明しておらず、不明な点が多い。居住域としての野添遺跡は、八名郡の大部分が所在する豊川左岸地域や、当時の支配体制に対してどのような位置にあったものか、また街道沿いという点が重要視されていたならば、その視野に入れたものは街道に対するどのような利便なのか、解明が必要な課題は多い。限られた材料で仮説を述べるならば、野添遺跡は、現在の豊川市に所在した旧三河国府や古代の東海道からも離れておらず、隣接地でもないことから、特殊な U 字形刃先が使用された公的な施設を想定したとしても、上級クラスではなく、公的機関とつながりのある集落、のような空間が想定できるかもしれない。野添遺跡のような地理的環境は、集落が営まれた歴史的背景とどのように関連しているのか、調査成果を一つ一つ積み重ねて、これらを明らかにしてゆくことが今後の課題となるであろう。

参考文献

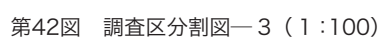
- 豊橋市史編集委員会 1973 『豊橋市史 第一巻』 豊橋市
- 愛知県教育委員会文化財課 1994 『愛知県歴史の道調査報告書』 X - 伊那街道・別所街道 - 愛知県教育委員会
- 林 弘之 2002 「東三河地方の古代二見道」 『三河考古』 第15号
- 新編豊川市史編集委員会 2011 『新編豊川市史』 第一巻 通史編 原始・古代・中世 豊川市
- 藤根 久・米田恭子 「古代土師器甕の胎土分析と年代測定」 『加原遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター 第194集
- 魚津知克 2003 「曲刃鎌と U 字形鉄鋤先 - 「農具の画期」 の再検討 - 」 『帝京大学山梨文化財研究所 研究報告』 第11集
- 河野正訓 2014 『古墳時代の農具研究』 - 鉄製刃先の基礎的検討をもとに - 雄山閣

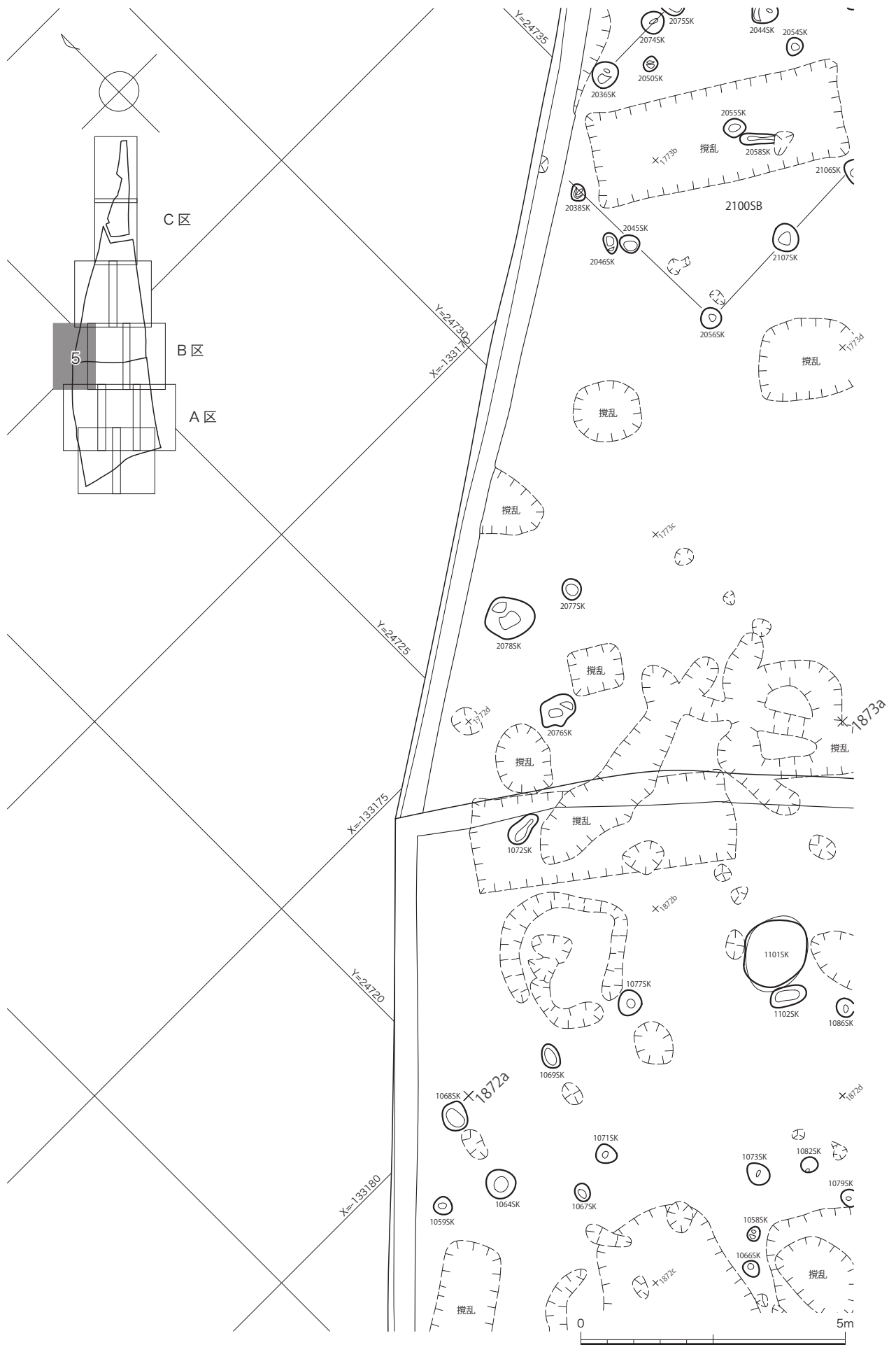


第40図 調査区分割図一 (1:100)

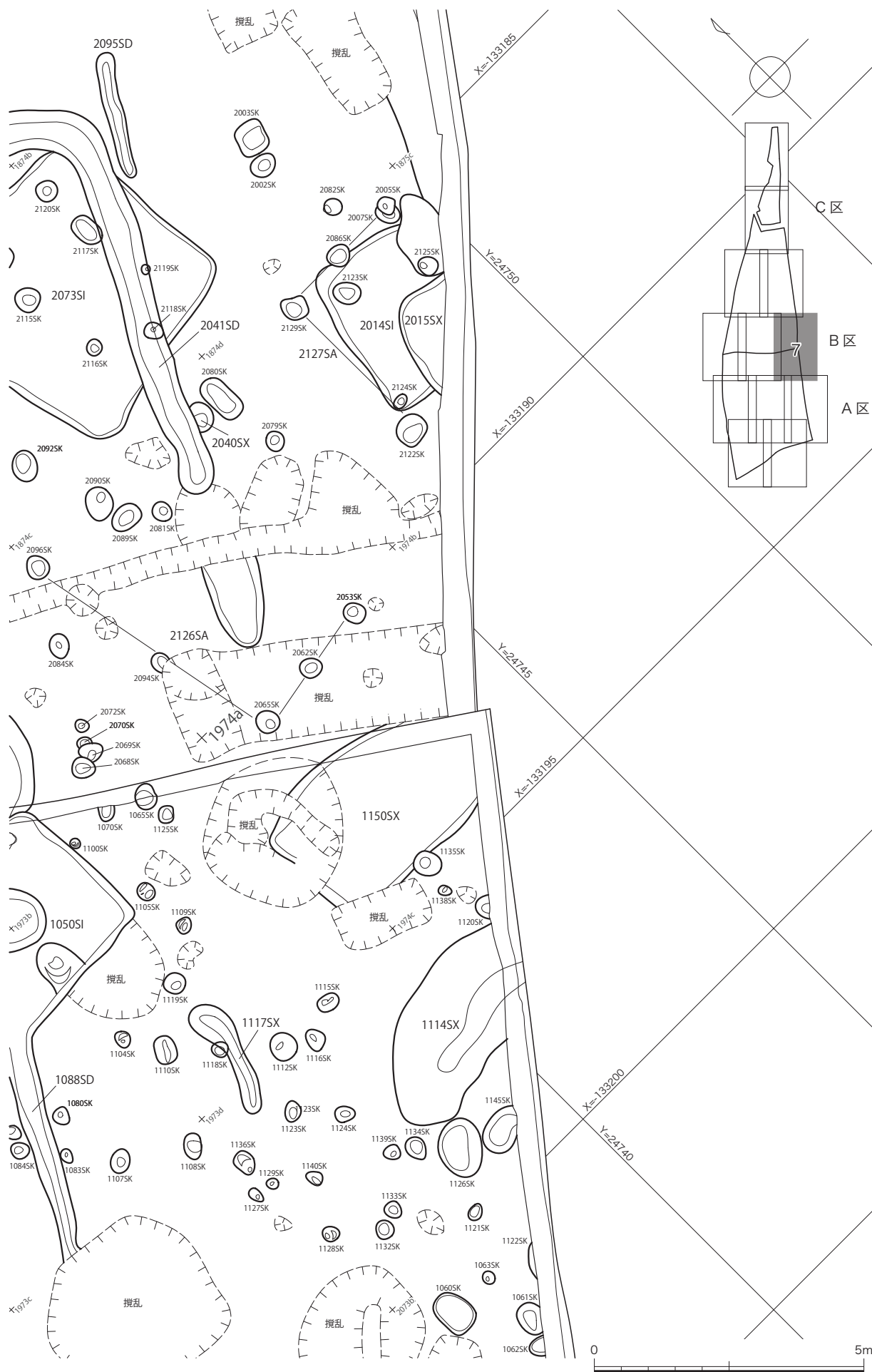


第41図 調査区分割図—2 (1:100)

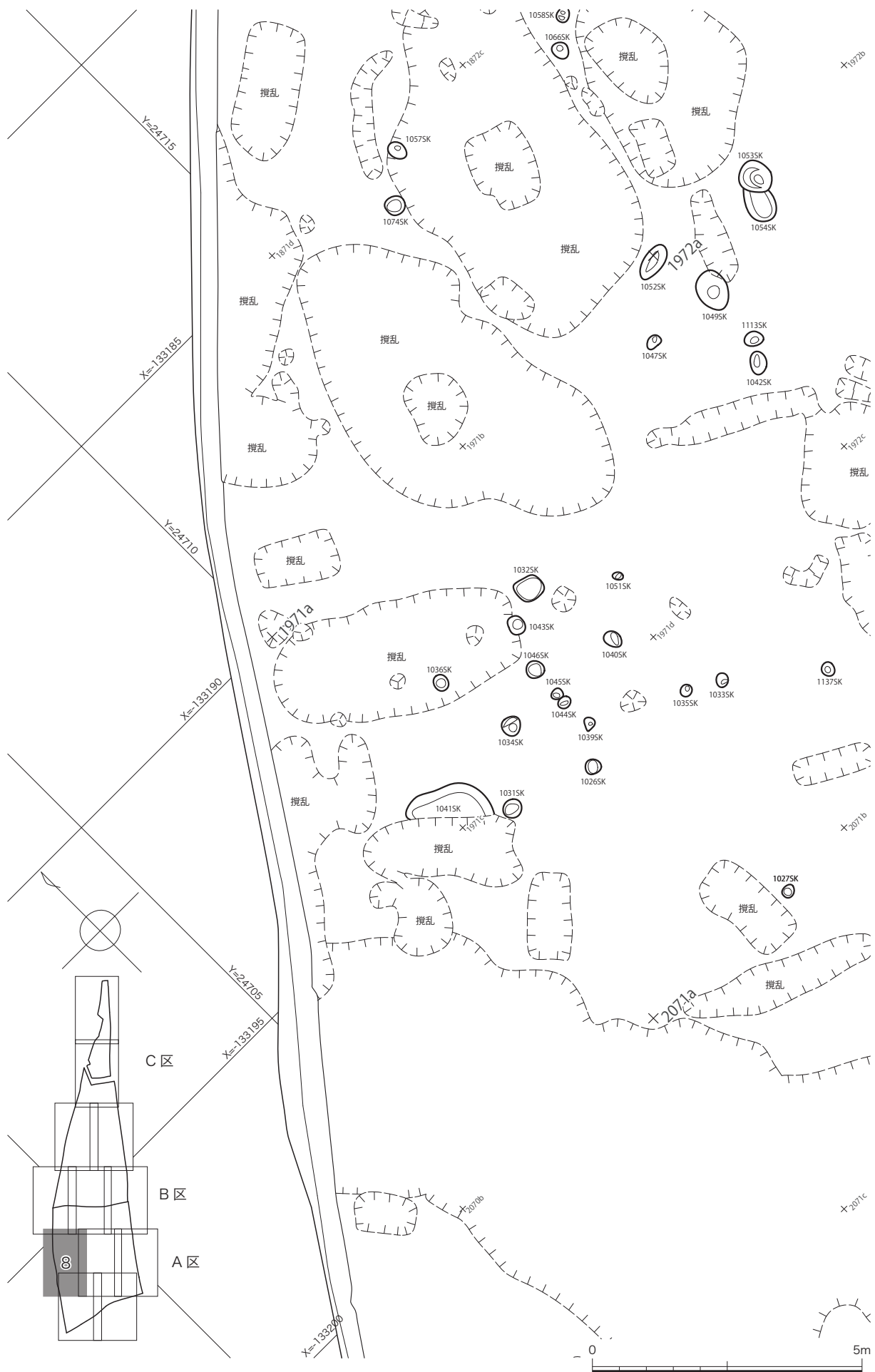




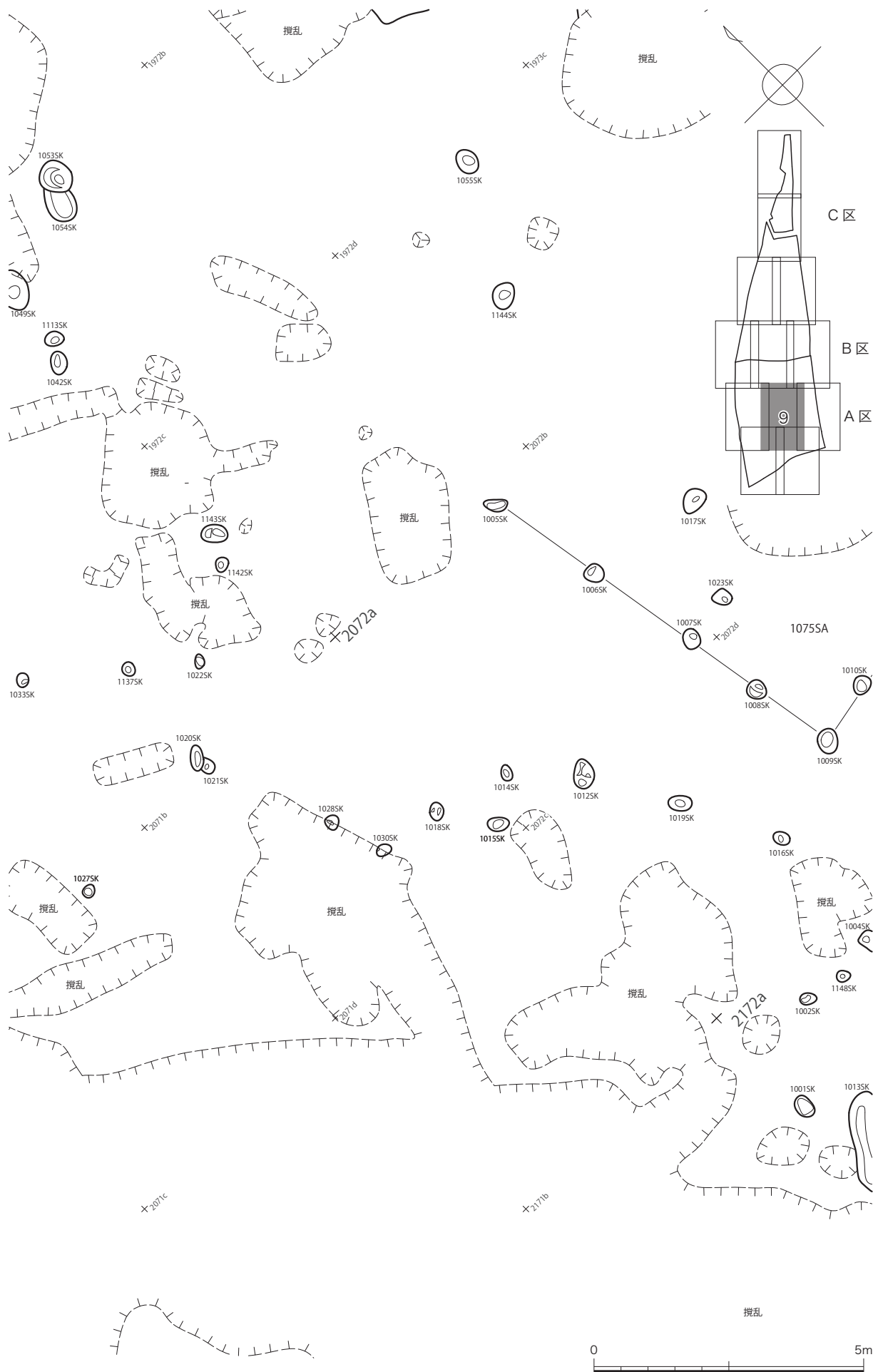
第44図 調査区分割図—5 (1:100)



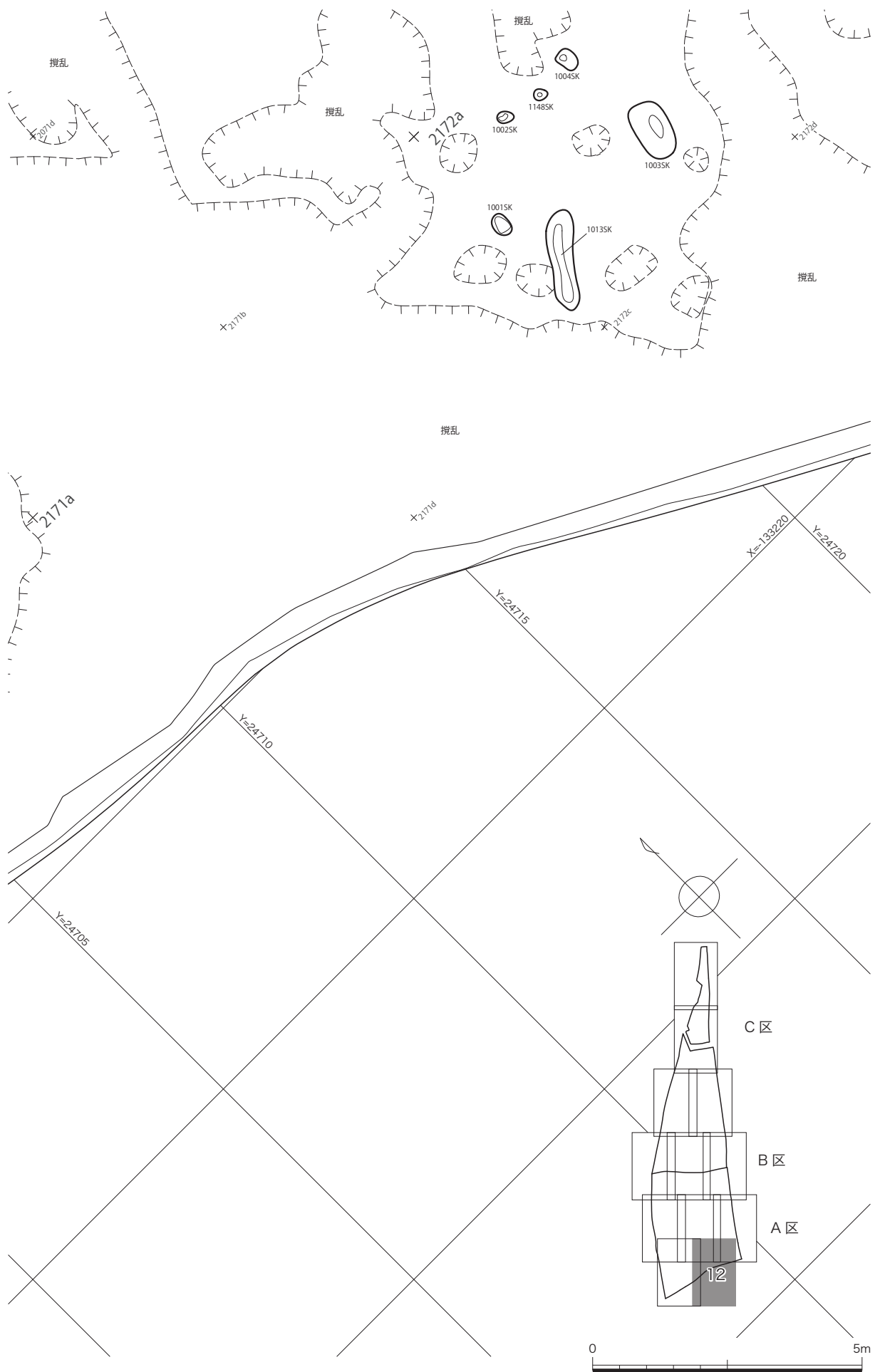
第46図 調査区分割図一7 (1:100)



第47図 調査区分割図—8 (1:100)



第48図 調査区分割図—9 (1:100)



第51図 調査区分割図—12 (1:100)



調査地点遠景（南から）



調査地点遠景（北西から）



A区全景（北から）



1050SI（東から）



1050SI カマド (北東から)



1088SD 断面 (南東から)



1075SA 完掘 (北から)



1150SX 完掘 (南東から)



B 区遠景（南東から）



B 区全景



1141SI 付近



1141SI 南北断面（東から）



1141SI 完掘（北東から）



1141SI 遺物出土状況（北西から）



2010SI・2001SD 付近（北東から）



2001SD 北側完掘（南西から）



2001SD 断面（南西から）



2001SD 遺物出土状況（北西から）



2008SI・2009SI 断面（北西から）



2008SI 遺物出土状況（南西から）



2014SI 完掘（東から）



2014SI カマド断面（南西から）



2014SI カマド遺物出土状況（南西から）



2010SI 遺物出土状況（西から）



2010SI 遺物出土状況（北西から）



2010SI 遺物出土状況（南東から）



2010SI 遺物出土状況（南東から）



2010SI 遺物出土状況（南東から）



2073SI 付近（南から）



2073SI 東西断面（南から）



2073SI 遺物出土状況（西から）



2099SU 遺物出土状況（南から）



2100SB (南から)



2126SA (南から)



2127SA (北から)



2128SA (西から)



C 区全景（南西から）



3001SD（南東から）



3001SD 西側断面（南東から）



3001SD 遺物出土状況



3001SD 遺物出土状況



3018SD 完掘（南東から）



3018SD 断面（西から）



3028SI（南から）



作業風景



作業風景



2



3



4



7



8



14



15



18



20



22



23



21



25



28



28 墨書



31



35



42



37



41



43



M-1



46



47



48



50



51



52



53



61



58



59



62



64



報告書抄録

ふりがな		のぞえいせき						
書 名		野添遺跡						
副 書 名								
巻 次								
シリーズ名		愛知県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号		第205集						
編著者名		松田 訓・パレオラボ株式会社・日鉄住金テクノロジー株式会社						
編集機関		公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター						
所在地		〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24 TEL0567(67)4161						
発行年月日		西暦 2016年 3月 31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
のぞえいせき 野添遺跡	あいちけん とよはしし 愛知県豊橋市 いしまきほんまちにししもじ 石巻本町西下地	23201	790844	34度 47分 55秒	137度 26分 15秒	2013.11.05～ 2014.03.25	2,000	道路建設（主） 東三河環状線 道路改良工事 に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
野添遺跡	集落 ほか	古代 ～ 中世	竪穴建物、 土坑、 大溝等	土器、 須恵器、 灰釉陶器、 山茶碗				
文書番号		発掘届出(25埋セ第79号・2013.9.20) 通知(25教生第1889号・2013.10.11)						
		終了届(25埋セ第159号・2014.3.28) 保管証・発見届(27埋セ第19号・2015.5.7)						
		鑑定結果通知(27豊教美第54号 2015.5.7)						
要約	本遺跡は豊川及びその支流によって形成された河岸段丘の高位面に立地し、古代の竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑などのほか、中世の大溝も検出され、居住域が想定される。本遺跡は、周辺の台地上に展開する散布地などとともに、当該期の遺跡群に含まれているものと思われ、周辺の集落遺跡を含めた各時代の生活実態を解明する上で、貴重な資料として位置づけることができよう。							

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第205集

野添遺跡

2016年3月31日

発行 公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 西濃印刷株式会社